
緋弾のアリーナ―忍ぶ最強― (改訂中)

テツオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のエリアー忍ぶ最強一（改訂中）

【Nコード】

N7444S

【作者名】

テツオ

【あらすじ】

ド貧乏な勤労苦学生 of 転生先は『緋弾のエリアー』！？
ケチな神に授かった中途半端なチート能力だけで彼はどう生きるのか？

この世は金と金、ときどき友情だ！

※※※原作10巻に出てきた設定に合わせるため、現在最初から改訂中です※※※

転生でござる（前書き）

駄文だけど感想なんかもらえたら嬉しいでござる。

転生でいえる

眼を開けると、そこは宇宙だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。うん、夢だな。明日もバイトで忙しいし、今のうちに少しくらい宇宙遊泳でも楽しんでおこう」

そう思ったのだが、まったく体が動かない。

「何、これ？ 金縛り？ ちょっとちょっと、いくら夏だからってこれは勘弁してくれよ。何？ 霊？ ないないないない。そんな非科学的なものは、存在しなーい。有り得なーい。・・・・・・・・・・。いや、冗談だって看破したじゃん。ドッキリ失敗じゃん。だから仕掛け人出てこーい。今なら肩パンで許すから出てこーい」

身体が動かない。

「や、マジ出てきてください。俺がバイトに遅れたら、コンビニが潰れるんですよ、割とマジで。放っておくと店長が幼女追いかけて店から逃げるから、俺が見張らないとダメなんですよ。だから、ね？ ほら、仕掛け人さーん！」

仰向けの状態で・・・・・・・・。。

「え？ 何？ マジなの？ マジものの・・・・・・・・モノホンの・・・・・・・・・・霊さん？」

身体が・・・・・・・・動かない。

「ヘルプ！ ヘルプミー！ カミーンイタコ！ あれ、イタコじゃなかったっけ！？ とにかくカミーン！ 怖いとかじゃないけど、いや本当にそういうんじゃないけど！ もうこの際ぬーべでも何でもいいですからああああああ！！」

そのとき、一人の男性が目の前に現れた。その瞬間、身体にかかっていた不可視の戒めが解かれた。

「ぬーべ！ 来てくれたんだ！ ……ぬーべってこんなんだっけ？」

「よく来たな。輪廻の輪よりはずれし者よ」

月桂樹の冠を頭に頂き、古代ローマ的布の服を着た男性。

背後から神々しいまでの光を放つその姿はまさに神。

無神論者たる俺にも、彼が人よりも高次元な存在というのは、頭でなく魂で感じ取れた。

しかし、とある部位が俺から畏敬の念を場外ホームランしている。

「はーい、どつきりだーいしっぱあああああああー！ 死ね店長！」

そう。ここ三年毎日顔を突き合わせている、俺のバイト先の店長だったのだ。

しかし、俺渾身の肩パンは、難なく店長をすり抜けてしまった。

「わしはそなたの言うテンチョーとやらではない。わしは神。この姿もそなたが心の中で最も信用している者の姿をとったにすぎぬ」

え？ 何？ 俺ってあの^{ロリコン}変態を一番信用してたの？ 俺の十五年の生涯って何さ？ あー死にてー！

「安心しろ。そなたはすでに死んでおる」

何と霊さんは俺本人だったらしい。

中々にショッキングなリアルをプレゼントされてしまったが、よく考えたら別に悪くはない。どうせ天涯孤独な上に、くそつたれな親に押し付けられた借金まみれの人生だったし。

「む、まさかそんなに大変な人生じゃったとは……」

心も読めるみたいだし、少なくとも黄色い救急車を呼ぶ必要はないようだ。

「失礼じゃのう。まあいいわい。とにかく、そなたは死んだのじゃ。そしてここは、黄泉の狭間。輪廻から外れた者の集う中継所じゃ」

「輪廻？ てか、せめて死因くらい聞いても？」

「寝ている君を893が攫って内臓を抜いたのじゃ。借金のかたに」
うっわ、せめて一言言ってくれよ。てか現実にあっただね、臓器売買。

「で、本来なら君は輪廻の輪に乗って転生するはず、だったんじゃ

が・・・・・・・・」

「ん？」

「ワシの孫娘が一人間違っで殺してしまったのう。ちょうど今期の定員が締め切られたのじゃ」

「普通、そいつがこういうところくるんじゃない？ テンプレ的に」

「人間の常識なぞ知らん。本当ならたかが雑霊の一人や二人、放っておいてもいいんじゃないかのお・・・・・・、お主の霊質は異常としか言えぬほどでな、このままでは堕ちるんじゃないよ」

いや、んなもん知らんし。興味ねえよ、金でももらえない限り。

「そなたの意思なぞ、堕ちてしまえば消えてしまうわ。とにかく、そうならぬためにそなたが選べる道は次の三つじゃ」

そう言っで、三本指を突き立てた右手を上げる店長。

「まず一つ。この場で今すぐ魂を消滅――」

「却下、却下あ！」

何が悲しくて自殺せねばならんだ。俺は死にたいと思ったことが一度もないのが取りえなんだぞ。

「二つ目。元の世界に蘇生をする」

「そういうのが出来ないから、転生っていうのができるんじゃないか

ったつけ？」

「たかが人間の一人や二人、どうして復活させられないと思うんじや。その程度できん奴など、神を名乗る資格もないわい」

「おー、セリフが神様っぽい」

「これを選ぶならさっさとせい」

「その心は？」

「灰から作り直したり、他人の記憶を弄るのは面倒じゃから、出来ればお主の遺体が発見される前に決めて欲しい」

「本音駄々漏れ！ でも、元の世界は………戻りたくねえな
こんちくせう。パス。最後」

「最後はお主も言っておった転生じゃ。この場合お前が行く世界は決まっておる。何て言ったか………そうそう！ 『緋弾のアリア』の世界じゃ」

死亡フラグ満載ですね。わかりたくねえよ。友人に借りたことがあったが、どう考えても一般ピーポーな俺では即死だ。はて、どうしましょ。

「まあ、裸一貫で放り出すのも目覚めが悪いし、これを選んだら何か願いを叶えてやろう」

んなもんそれしかないじゃんか。それと、神様も寝るんだな。

「では、三つの願いを言うがよい」

テンプレ通りなら、ここで最強無敵になれるチート能力が手に入るはず！

どうする？　ここは無難に一方通行か？　それとも直死の魔眼？
はたまた完成？
ジ・エンド　うーん………。

「で、三つの願いを叶えてやろうと思う、のじゃが………」
友人から借りた数々の作品を元に俺が手に入れたチート能力を考
えていたら、不意に不吉な話の切り方をされた。

「………じゃが？」

嫌な予感しかしねえな、コレ。

「ワシは最初からチートというのは嫌いなんじゃ。だからそういう
感じのは一切なしじゃぞ」

「こなちくせう！！」

「人間、努力して何ぼじゃ」

何だよお。今まで不幸だったらこういうところで挽回なんじゃねえの
かよ。

「じゃから三つなんじゃ。普通ならそんなものやらんぞ」

「あ、そうなんだ。ならまあ、いい………のか？　何か誤魔

化されてる気がするが………」

だが、高校一年生レベルの頭を振り絞っても何の解決もしないか。
ならさっさと決めて、第二の人生を謳歌すべきだな、うん。

「で、決まったかの？」

「じゃあ、『人類最強』の能力が欲しい」

「話聞いておったか？却下じゃ」

「『アリバイブロック腑在証明』！」

「却下じゃ」

「『オールマイクシヨン大嘘憑き』ならいいだろ！」

「何でいいと思ったんじゃ。却下」

「ったく………仕方ないから『オートパイロット自動操縦』でいいや」

「何か譲歩してるっぽいが、お主が行く世界ではチートの極みじゃろうが」

「こなちくせう！！もう何にもねえじゃねえか！」

「いや、結構あるからの」

どうやら店長は、本気で俺に修羅の道を歩かせたいようだ。

だけど俺は挫けない。あとで泣くのが嫌だから、いざとなれば伝家の宝刀だって抜いてやるって心構えでいこう。

「なら、努力による身体能力の伸びを青天井にしてくれ。これならあんたも文句ないだろ？　ないだろおが!？」

「努力するという点がいいのう。承認じゃ。あとキレるな馬鹿者。」

・・・っち。偏屈じじいが。

「ああ？　何か言ったかの？　ふとした拍子で目の前の雑霊を消してしまうかも知れぬが、まあいいか」

「ヤクザかおどれは!」

このままここにいたら、心の中でどんな暴言を浴びせてしまうか分からない。

うかうかしているうちにアウトー!　は御免だ。さっさともらえるもんもらってトンスラしよう。

「ほれほれ。わしも忙しいんじゃ。さっさとせい」

「真庭忍法の会得!　チートな『異常』『過負荷』は無理でもこれぐらいはくれ!」

「……………それでもかなりチートになるから却下じゃ」

「少っ少っ!　少っ少っだから!」

「少しでもダメじゃ」

「ほんの少し！ 先っちょだけだし！ 先っちょだけならセーフでしょ！」

「能力の先っちょって何じゃ。絶対ダメじゃ」

「・・・・・・・・ならないだろう。後悔してももう遅いぞ」

「ぬ？」

出来れば、ここでは使いたくなかった。これを使えば、そこはかたない精神力を使うから。

それでも！

俺は抜こう！ この宝刀をおおおお！

「いーじゃん！ いーじゃん！ ちよーだい！ ちよーだい！
よーだい！ ちよーだい！ ちよーだいよー！」

「ダメだったらダメじゃ」

「ちよーだい！　ちよーだい！　ちよーだい！　ちよーだい！　ち
よーだい！　ちよーだい！　ちよーだい！　ちよーだい！　ちよー
だい！　ちよーだい！　ちよーだい！　ちよーだい！　ちよーだい
！　ちよーだい！　ちよーだい！　ちよーだい！　ちよーだい！
ちよーだい！　ちよーだい！　ちよーだいたらちよおおだい！」

何とでも言うがいいさ！ 俺は一円でも多くの利益を得るためなら、迷わずプライドを質に入れる男だぜ。

それにしても、俺のプライドがごっそり持っていかれちゃった。もうやりたくないや。

「で、何が欲しいんじゃ」

「『足軽』だ！」

「いやじゃのー。あげたくないのー。でも言ってしまったからのー。わし、神様じゃからなー」

そんなに嫌だったんかい。

「……ではあと一つ。どんなのがいいかの？ 言っておくが、もうあの駄々は通用せぬからな」

「っち」

「やっぱりする気じゃったか！」

ちくせう。伝家の宝刀を封じられてしまったぜ。しかし、これはいけるかねえ？

「『めだかボックス』の宗像の『暗器使い』……は……
……どうでございます、か？」

あれは『異常』じゃない唯のスキル！ チートとも言える範疇ではない……はず。

「とってつけたような敬語じゃのう。……………」
まあ、サービスじゃ。いいであろう」

やっほーい!!

「あ、忘れるところだった……………。あと一個だけおまけしてくれ」

「む？言っておくが能力ならもう……………。というか、今思えばお主どんだけ西尾維新好きなんじゃ」

「好きなものは好きだからしょうがない。それに能力じゃねえっす。ほら、前世の記憶とかあったら十歳くらい年上と恋愛しないと、精神的にロリコンじゃん。俺、そういう趣味はないからそういうのは……………な？」

「あいわかった。では前世の記憶を全て消せばいいのじゃな」

「黒歴史を作ったりしたくないから、精神年齢は今のままでお願いします。勉強とか語学とかそういう知識は不気味じゃない程度に残してくれたらなおよし」

「どんだけ我がままなんじゃ……………。なら、母親を教育ママにするか……………」

やぶ蛇ったあああああ!!

「ちょタンマ！今の取り消し——」

「では行くがいい。新たな人生を楽しむのじゃぞ。ホール、オープン!!」

へ？ ホール？

あれ？ 何この黒いの？

へ？ 何で俺の下にあるの？

あれ？ 何で俺浮いてるの？

「レッツ・ラ・ゴー!!」

「ふりいんだよおおおおおおおおおおお!!」

転生でござる（後書き）

はい、何とプロログから改訂、というか書き直しちゃいましたね。
どうもテツオです。

転生オリ主の根幹とも言える能力。これを変えたのにはワケがあります。何も闇雲に変更したわけじゃないんですよー。ただ、米国編^{ステイツ}をやるに当たって避けては通れないものを乗り越えるために、足輕先生がどうしても必要だったんです。

とはいえ、物書きとしては結構やっちゃいけないことやっちったなー、という自覚は十分にあります。タグの微妙チートを普通よりちょい下チートに変えるべきかなー、とも思ってます。

なので、今までは何とか読めるものだったけどもうお前にゃ付き合いきれない、と思った方はお気に入り登録を消去した後静かにウィンドウを閉じてくださって結構です。

こうなったら地獄の底まで付き合ってやるさ、という精神イケメンな方はどうぞこのまま新しく書いた次話にお進み下さいませ。

では、少しでもイケメンが多いことを祈りつつ。

妹分でござる(前書き)

これを読んでいるということは、すでに腹を括ったということでしょうしいでござるな？

妹分でござる

「はじめまして諸君。皆のシヨタこと霧隠才貴四歳だ」

「おにーちゃん、きゆうにごあいさつしてどーしたの？」

俺と一緒に木登りをしていた少女が、太い枝に逆さになってぶら下がりがらそう訊いてきた。

はて、何で俺はこんなことを言ったのやら。言わなければという強迫観念に駆られてしまったのか。ま、いいや。

「それとおにーちゃん、しよたってなーに？」

「俺くらい小さな少年のことだ。ちなみにお前の場合はロリな」

「ろり？」

「おう」

「えへへへー。ろり！ ろり！」

「うむ。元気があってよろしぬばあああああ！」

「おいこら才貴い。他所さまの子に何変なこと吹き込んでんだい」

真下から飛んできたスリッパが額に激突し、そのまま俺は落下してしまった。額をさすりながら見上げれば、仁王のように聳え立つ一人の女性。

そう！ 彼女の名は――！

「あ、おぼばー！」

――ピキ

「ひ、ひいちゃん？ それ、誰に言われたんだい？ お姉さんに教えてくれないかなあ？」

後ろに般若を従えて修羅と化した女は、溢れる怒気を必死に抑えて彼女に問いかけた。

しかし、幼女ことひいもさる者ひっかく者。幼いながらもその小さな身体に秘めた才が鳴らす警鐘に怯えて、隠れてしまった。

俺の後ろに。

「ひう！ おぼばこわい！」

――ビキビキ

「な、なあ才貴？ お前は心当たり、あるんじゃないの？」

「まったくくないね。よし、ひい。今度は川で魚採りだ！」

「うん！ あ、おにーちゃん！ ちゃんとおぼばっていったから、あとでおかしちょーだいね！」

「ば、おま！ それは俺がいないときは、な……し――」

・・・・・・。ふう、やれやれ。オウ、ドウシタデスカ？ スウィートスペシャルデリシャスグレートボンバーファンタステイックマアム？ ワタシ、コレカラヨウジアリマスデスヨー」

「おや奇遇だね。丁度私もアンタに用事ができたところだよ」

「・・・・・・。逃げろ！」

「にげろー！ きゃー！」

「待てやゴルァ！」

俺とひいは、所謂幼馴染という間柄である。

俺の父親と彼女の父親は家が隣同士の幼馴染であり、今でも友人としての付き合いがそのままというわけだ。

そして、ひいの家は赤貧一家のため両親共々日中は家にいない。

そのため、日がな一日ゴロゴロするしかすることがない生粋の暇人であるうちの母がひいを預かってきては、何故か俺が世話しているというわけ。特に長期休みの間はずっとそうだ。

まあそんなわけで妹同然に育てたからか、ひいは俺を『おにーちゃん』と呼び慕ってくれる。

そして俺はひいをいい性格に教育する。

これぞ素晴らしい相互扶助関係！

「アホか」

バゴンッ！

「ぬぐおおおおお！　ず、頭蓋から・・・・・・・・およそ発せられない音がああああ！」

「それは教育じゃなくて汚染って言うんだよ」

しゅゝ、とどういう理論か煙を発する母の拳。何で女性は読心術を標準装備しているんだろうか。理不尽だぜ。

(・・・・・・・・にしても)

「ほおら、ひいもう泣くな。飴ちゃんやるから」

「ひっく、ひぐ・・・・・・・・うん！」

「おう、ひいは強いなあ。それじゃ、また面白いことを教えてやるか」

「わかったー！」

(ひいちゃんが転ばなかったら、私でも追いつける気がしなかった・・・・・・・・。。才貴の奴、こいつはもしかしたらもしかするね)

そんなことを母が考えてるとは露知らず。俺は泣き止んだひいにさ
らなる教育を施すべく、今後のプランを練るのだった。

〳数日後〵

「突然だがひい。今後からお前は語尾に「ござる」をつけてみる」

「? なんでー?」

「そっちのほうが、早く立派な忍者になれるぞ。…………たぶ
ん」

「ほんとー!? わかったー!」

「ほら、語尾語尾」

「はっ! わ、わかったでござる!」

あー、可愛いわー。癒されるわー。何この癒し系の生物。ナマモノ

「ついでにこれから自分のことは拙者、俺のことは――」

「? どうしたの?…………でござる?」

何だろう…………。今ここで俺の呼び方である「おにーちゃん」
を、「あにじゃー」とか「あにうえー」とかに変えてしまうと、未

来で筆舌に尽くしがたいほどの後悔をする……気がする。

「おにーちゃん」の呼び方に、果たしてそんなに価値はあるものなのだろうか？正直理解できないが……勘というものは以外に侮れないものだ。

もしかしたら、今の俺には理解できない感情があるのかもしれない。たとえば、親父がたまに小さい人形を集めてはニヤニヤしてるアレ。正直気持ち悪いとは思えない。が、アレを理解できれば「おにーちゃん」の価値も分かるやもしれん。

もつとも、ああなったら死とは違う意味で人生の終焉だ、と母さんも言ってたし、きつと理解してはいけないんだろうけどな。

「？ おにーちゃん……ござる？」

「ああ、悪い悪い。あと名詞にまで「ござる」は付けなくていいから」

「はえ……ふにゃ！」

キョトン顔のひいの頭をわっしやーとかき乱す。

「ま、俺の呼び方はいいや。これからは、ひいんとこのおじさんとお婆さんのことは、父上と母上って呼んでみる」

「うん！」

「よーしい子だー！ ご褒美に肩車してやろう！」

「きゃっほーい！」

〽一年後〽

「えー、才貴。何か言い訳は？」

「反省はしてるが後悔はしてませんです。はい」

「おにーちゃん。早く遊ぼーでござるよー」

「ひいちゃんはちよーつとそこらで遊んでくれるかな？ 今お兄ちゃんと大事な話してるんだよ。言うこと聞いてくれたら、あとでお菓子あげるから、ね？」

「むー……。ぜーったいでござるよおぼー！」

タタタター

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「百歩」

「へ？」

「百歩譲って、ひいちゃんの口調を変えて遊んでたのはいい。向こ

うの家も大概アホだからね。忍者っぽくてカッコいいとか喜んでたよ。……でもさ」

がしっ！

「アイアンクロードで陥没すりゅううううううう！」

「なーんで私は「おばば」のまんまなんじゃあああああ!!」

「そりゃそっちの方が面白いか——らあ、ああ、ああ、ああ、ああ」

～その半年後～

「ああああああ。やっちゃったよー。やっちゃったよー。やら
かしちゃいましたよー」

右手で顔を覆い隠して、嘆息とともに天を仰いだ。俺の心中は、今猛烈な後悔の味が占めている。

「何……失、れ……いなこと……抜かし
てんだい。ぜえ、はあ……」

そんな俺の足元にはボロ雑巾になって倒れ伏すマイマザー。

そう。俺は今、無傷で勝ってしまったのだ。一族始まって以来の天才と謳われた母、二十二代目「霧隠才蔵」に。

もうお分かりいただけただろう。

俺の姓である「霧隠」と、名である「才貴」。

その姓は、かの真田十勇士に数えられる英傑、伊賀忍者霧隠才蔵の血を受け継ぐ一族の証明であり、名に冠する「才」の字はその中でも本流を汲む者という意味である。

ようするに、俺は霧隠才蔵の直系の子孫なのだ。

ま、ひいの家と同じで廃れた一族だから、分家もクソもないんだが一応の形式美って奴だ。

実は俺、生まれたときから次期当主として地獄の特訓をされ続けてきた。それこそ、今までご覧頂いたひいと遊んでいた牧歌的光景なんて、その時間の数千分の一にも満たないほどに。

そしてどういうわけか、本来なら十五歳の誕生日に行われるのが通例の、当主の座を当代との決闘で奪い取る儀式を母の一存で大きく前倒しし、俺の六歳の誕生日、すなわち今日に決行。

必死に止める父やひいんとこのおじさん達を振り切って行われてしまったそれは、しかし彼らの予想を大きく裏切り、わずか六歳児である俺の勝利に終わってしまった。

つまりは………。

「えーと、才貴。母さんがまともに喋れそうにないから僕が言うけど………」

と、観客に徹していた一般^{パネー}人の親父が俺の肩を叩いてそう言う。

「あー、今日より「才蔵」の名は、先代霧隠才香より今代霧隠才貴へと継承されます。両者、依存はないね？」

「はっ………ない、よ」

「依存しかないっす」

「それじゃ、才貴………じゃないや。「才蔵」は明後日には家を出て、どこでもいいから武者修行の旅に出ること」

「スルーか！ てか武者修行の旅って何だ！ 初耳です！ おじさんとお婆さんも、うちのヴァカ親どもに何か言ってくれ！」

援軍を求め、ひいとその家族のほうを向き叫ぶ。しかし………。

「ほら、お兄ちゃんにおめでとうって言っとけ」

「おにーちゃん！ 素晴らしき美技でござったー！ 拙者感服したでござるー！」

「才貴くーん！ 気絶したお母さんの代わりに、今日はお婆ちゃんが腕によりをかけたご馳走を作ってあげるからねー！ 食費はそっち持ちだけど。アナタもひいも、今日はタダ飯食えるから、詰め込むだけ詰め込んでおくのよー！」

「わーい！ ごっちそうでござるー！」

「数日ぶりのまともな飯だー！」

「何てこった！ ここには敵^{ヴァカ}しかない！」

こうして数時間後、霧隠家のことなのに何でか二家合同で行われた祝宴は、夜を徹して開催された。

始めは普通に美味しいものを食べて楽しくやる、というコンセプト・
・・・・だった、のだが・・・・・。

その数時間後。間違って酒を飲んで俺に絡んでくるひいに、それぞれ入り婿ゆえの苦労を延々と垂れ流す幼馴染ダディズ。そして極めつけには、脅威の回復力で復活した母さんとおばさんというくノ一タッグver. 悪酔い。

たった数時間、たったの数時間で、愛しの我が家はカオスと言うに相応しい異空間へと成り果ててしまったのだった。

次の日は、俺も含めた全員が二日酔いという、とても俺と過ごす最後の日とは思えない体たらくだった。

いやいや、俺とひいは仕方ないだろ。

何せ六歳と五歳なんだから。飲酒適齢年齢の三分の一以下なんだから。飲ませてきたの母さんたちなんだから。

で、何の用意も出来ずに迎えた、強制武者修行の旅出立の日。眠りこけていた親父をたたき起こして馬車馬のように働かせることで、何とか旅の用意は完了した。

が、ここで問題発生。

それが、これだ――

「嫌ー！！ おにーちゃん行っちゃ嫌でござるー！」

俺の腰にへばり付いて、さっきから同じことしか言わないひい。昨日の宴会は吐くまでエンジョイしてたくせして、いざ俺が別れを告げた途端にこれだ。

てかさ、俺だって大人びてるだの何だの言われますが、一応六歳児なんですよ。本来なら小学生なんですよ。いや、入学はしてるから事実小学生なんだけどさ。二桁回も登校してないものね。

とにかく、俺だって親元離れるにはキツイお年頃よ？ そこんとお分かり？

「ほれ、離れい」

「やー！」

俺が何とか引き離して放り投げるも、こういうときだけ無駄に忍者らしい身のこなしで着地しては引っ付く。これの繰り返し。

しかし、いつもならここで何とかしてくれるひいの親は働きに行っちゃってるし、親父はただのリーマンだから役に立たないし、母さんはニヤニヤ笑ってるだけだし。

「・・・・・・・・あのな、ひい。聞いてくれ」

中腰になってひいと目線を同じにする。俺が同年代の平均身長を結構上回っているため、こうしないと頭一つ分くらいの差があるからだ。

「・・・・・・・・やでござる」

「正直、俺だって行きたくねえよ。というか、説明が出発の二日前とか、マジ親父死ねって思ったさ」

「僕う！？ いや、本当なら才香の役目であって――」

「でもま、行く場所も大体決まってるし、二度と会えないわけでもないんだから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あー。もし離してくれなかったら、俺、ひいのこと嫌いになるかもなー」

「！ ひう・・・・・・・・・・。・・・・・・・・・・。・・・・・・・・・・。お手紙」

「ん？」

「お手紙、送ってくれるでござるか？」

国際便って、一回いくらかかるんだろう？

「・・・・・・・・・・・・・・・・。てへ」

「やっぱり行っちゃ嫌でござるー！」

「あー！ 書く書く！ 書けばいいんだろこんちくせう！」

「絶対、絶対でござるよー！！」

「ああ、きつと書くから」

三年に一回くらいでな。うん、嘘は言っていない。

「ほーら、んじゃ離せ」

「・・・・・・・・ん」

ようやく服の裾を離してくれたひいを一撫でし、両親を向いた。

「それじゃひい、行ってくる。母さんも親父も、お達者で」

「おにーちゃんもお元気で！」

「ああ、行ってらっしゃい」

「元気でやりな」

こうして俺、霧隠才貴改め霧隠才蔵は、六年間育った町に別れを告げてまだ見ぬ地へと旅立ったのだった。

こんな風に締めるとファンタジーっぽいな。

妹分でござる（後書き）

いきなり現れたあの子は一体誰なんでしょう（棒読み）！！

彼奴^{きやつ}を幼馴染ポジに変えたのも理由があります。鋭い人なら、そこから今後才蔵が歩む道のりが分かるかも、くらいには重要な話でした。雰囲気はまったくそんな感じじゃないけど。この布石によって、とりあえず帰国した後の展開が全て変わります。オール書き直します。

はい。今テツオが精を出している作業は、改訂という名の書き直し、という認識で結構です。改訂するに当たって最初から読み直すと、この最初辺りの話の酷さに驚いたんです。だからこそその書き直しです。

少しでもキャラ、そして話が魅力的になるようにこれからもさまざまな点で書き直しは続きます。しかしヒロインを変えるつもりはまったくありませんので、全レキファンの方々ご安心を。無論、ハーレムなんていうふざけた展開にするつもりもないですよ。そこだけは絶対に変えるつもりはないので、ハーレム嫌いの方も安心してご覧下さい。

……これは、この小説を凍結して新しく投稿しなおしたほうがいいのか？

アメリカンドリームでござる（前書き）

遅れてた本編更新でござる。

今回の話は、原作十巻を読んで急遽書き上げた話なのでおかしなところもあるかもでござるがご容赦を。

ちなみに「」は日本語、□は外国語でござる。

アメリカンドリームでござる

「スラムツパギアメリカー！」

入国審査のゲートを抜けて空港の入り口に立った俺は、両手を広げて叫んだ。瞬間に、周りからの奇妙なものを見る視線。

そりゃ、アメリカでインドネシアの挨拶なんかしたら変だわな。俺、どう見ても東南アジア系ではないし。

さて、何で俺がアメリカなんかにいるかと言えばだ……あのーもういちいち説明とかめんどくさいな。よし、まとめ上手さんに任すぜ。それじゃ、ほわわわわーん。

「んじゃ、母さんも親父も身体には気をつけろよ。それとケンカするなよ——」

「もちろんさ！」

「——親父が死ぬから」

「酷い！今生の別れなのに息子が辛辣だ！」

むせび泣く親父（キモい）を捨て置いて、母さんのほうを向く。

「それじゃ、霧隠才蔵行って参ります」

背を向けて家を離れようと足に力を溜めたときだった。

「ちよいと待ちな」

「?どうした母さん」

「アンタ、これからどうするつもりだったんだい？」

「どうって……普通に適当なアパート見つけて修行しながら、武偵か怪盗にでもなろうかと」

この世界で最も俺の力を活かせるのなんて、武偵か犯罪者くらいだろう。うちの母さんも若いころは悪いほうにハッチャケてたらしいから反対もされないだろうし、俺には犯罪者になることへの忌避感も特にはない。

「そっか……よし!ならこれを持ってきな!」

そう言って母さんが俺に渡してきたのは一通の書状。一応受け取るも、疑問符ばかり浮かぶ。

「もし武偵になる気があんなら、アメリカに行きな。住所はそこに書いてある。そこにいる人に頼めば生活や修行の世話してくれるだろうからね」

「……いや、何でアメリカ？」

「日本じゃお前みたいなジャリガキなんぞ、^{インターン}中学生までは武偵の資格なんぞ取れないよ。それだったら、わざわざ修行だけで過ごすよ

かアメリカで活動して名でも売ったほうが万倍マシさ」

「そうそう。まあ、お前ならどんな道でも頂点に行けるだろうよ。何たって、僕の「私の息子なんだから」……………シクシク」

「は、はははは。分かった。じゃ、コレはありがたく頂きます。では改めてお達者で！」

「ああ！」

「元気だな！」

ほわんほわんほわん

「と、言うわけなのでございました」

「何言ってやがるんだ、坊主？」

はい、現実逃避しゅりょ。

さて現在俺の目の前には、葉巻を吹かす……………まあ……………
・何と言いますか……………所謂“ギャング”的な集団のおボス
様がいらっしゃいますのでございます。

「ナンデモナイデスヨ。タダノデンパデスヨ」

「ったく、才香の奴もこんな坊主に負けるとはな。世も末じゃねえ

か」

「才香？誰でございますれりますかそれ？」

「ん？ああ、お前のお袋の真名だ。てかその珍妙な喋り方はやめな。敬語なんざどうせ使い慣れてねえんだろ？」

「あ、そう？いやー堅苦しくて困ってたんだよ、ジジイ」

「とことん口の悪いガキだぜ。なあ才貴」

そう。目の前のドン的なご老人の名は霧隠才牙。元二十一代目才蔵であり、俺の母方の祖父……。らしい。隠居してから渡米し、今ではアメリカでも有数の武偵企業の社長になっている。ちなみに呼ばれ方はファーザー……。本当に武偵企業なのだろうか？

「もう俺は“才蔵”だ！というか聞いていいか？何で母さんはジジイの連絡先知ってたんだ？名を継いだら今生の別れはねえのか？」

「んあ？聞いてなかったのか？あんなもただの形式美だ。次代の頭領をたくましく育てるためとか銘打っちゃいるが、つまるところ若いモンに負けた先代が恥や外聞から逃げるための救済策よ」

ええ。何すかソレ？あの大泣きした別れの宴の意味は？

「今頃才香も悶え苦しんでるころだぜそりゃ。史上最速で頭領の名を渡すなんて恥、晒しちまったんだからなあ！」

ゲラゲラと豪快に笑うジジイ。性格も、大雑把そうだが人柄は好漢とでも言える人のようなのだ。

「さて、お前がここに來た理由は書いてあった。武偵になりてえんだったか？」

「ああ。こんなガキでもアメリカなら武偵になれるんだろ？」

「そりゃ、実力至上主義の国柄だからよ。こんな不良老人でも大会社のトップになれるんだ。強ければお前見てえな小便可せえガキでもインターンで武偵高に入れるはずだぜ？……つと、そうだそうだと忘れてたぜ。ニコル！」

そう言ったジジイが拍手を二回打つと……うおっ！見るからに「私、裏側アンダーグラウンドの人間です」といった風貌の男が出てきたぞ……・・・！その手には……書類？

「取り敢えずこの国で暮らすための戸籍だ。国籍はアメリカに帰化しといたぞ。構わねえな？」

いえ、構います。俺は自分でも知らない間にアメリカ人にされていたようだ。抗議こそすれ、聞き届けてはもらえず。ジジイは一度後ろに控えたニコルさんを前に呼び寄せた。

「次は武器か……ニコル！こいつを武器庫ジャンクショーンにつれてきな！才蔵、こいつはニコル。日系二世だから日本語も通じる。ここでの生活はこいつに面倒見てもらえ」

「フアーザーの紹介にあったとおりだ。よろしく頼むぜ」

ゴツイ手を差し伸べてきたニコル。サングラスのせいで目線は読めないが、口元を見る限りはいい人か？てか俺、英語しゃべれるんだ

けどなー。そう思って手を差し伸べた瞬間。

「っ！……………どういうつもりだ、クソジジーイ？」

「くっ……………ふぁ、ファザー……………」

俺の手を潰さんばかりの勢いで力を込めてきたので、それ以上の力を以ってニコルを制し、素早く背に回って関節を取りながら問う。するとジジイのニヤケ面が目映った。

「合格だ才蔵。すまねえな、ニコルにはテストを命じたんだ。解放してやってくれ」

渋々解放すると、右肩をさすりながら、ニコルが俺に頭を下げてきた。

「ソーリーだリトル」

「ニコルはこれでもSランク武偵なんだぞ。それをこうも簡単に沈めるとは、さすがは俺の孫だぜ」

こうもニカッと笑われては怒る気も削がれる。溜息を一つついてからソファに座り直る。それとニコル、俺をリトルと呼ぶな！俺は同年代にしては身長高いんだからな！

「改めて武器庫に行ってこい。それが終わったら、武偵免許をとるための方法を教えてやる」

「りょーうかい。んじゃ、ニコル。案内してくれ」

「OK」

二コルにつれられてエレベーターに乗り、たどり着いたのは地下五階。扉が開いたときの、俺の最初の一言は、

「わぁお」

だった。

四方六方、見渡す限りの武器、武器、武器。その手のマニアならば垂涎のものであろう光景だ。しかし、この企業は戦争でもおっ始める気なのだろうか？各種拳銃の横に鎮座するロケットランチャーや、ラックの奥に微かに見える、迷彩柄の鋼鉄の車体を見てふと思ってしまう。

「リトル。ここにある武器で、何か使いたいものはあるか？」

「リトルじゃねえ！才蔵だ！……って、本当にこの会社って武偵企業なんだよな？武偵企業を隠れ蓑にした闇の組織とかじゃないよな？」

「ん？………ああ、そうだな、うん。ここはただの武偵企業だぜ」

「今の間なんだ！？」

気になる間のワケは教えてもらえないまま、武器を選べハーリーハーリーと急かされてしまった。

仕方ないので、M60を始めとした銃火器を次々と「暗器使い」で

ポケットやら襟元やらに仕舞い込んでいく。それを見たニコルの、
啞然とした表情が見れただけよしとしておこう。

「おうおう、お前が新入りのジャップか？ いいもん着てんじゃねえ
か。置いてけぶろふぁ！」

「ジョニーイイイ！！こんのイエローモンキーがはこふ！」

「ジョニー！ ケビン！ このくそやろうがらへぶ！」

絶賛ストリートファイト中なう。この世界だと時代の先取りなセリ
フだよなコレ。

なんでこんなことをしてるのかというと、一対一ならニコルを相手
取れた時点で分かったが、一対多だと頭数いればSランクでも厳し
いからだとか。そこで裏通りの治安最悪な箇所で一週間以内に全て
のカスを締め上げれば、ニューヨーク武偵高の編入試験に推薦して
もらえるらしい。

「取り敢えず帰ったらジジイぶつ殺すキーーック！！！」

「ジーザアアアス！！！」

俺の異国での戦いはまだまだ続く！

アメリカンドリームでござる（後書き）

『才藏&p,レキのキャッキャウフフなデート日和』はまだまだ受け付けてますので、一回参加してください。まだ参加されてない方も、どちらにも遠慮せずにどうぞ。一人何通でも受け付けます。詳細は『お知らせ』にて。

普通の意見・感想・アドバイスをいつでも待ってますよー。

では、また次回！

七月二十八日改訂

ニューヨーク武偵高でござる（前書き）

構想としては十話程度で終わらすつもりが、十五話以上になりそうな予感のアメリカ編。

先行き不安でござるが、とりあえずどうぞでござる。

ニューヨーク武偵高でござる

ストリートを締めてから二週間後、ジジイから編入試験の日程が伝えられた。

試験は二日間に分けられ、初日は筆記試験だ。

なぜ武偵高なのに実技のみの試験でないのか。それは俺の年齢の問題だ。

中学生のインターンなら日本でも認められているし、小学生もないわけではない。が、普通なら皆無に等しい。なぜなら武偵高には、武偵としての専門学科以外に、一般教科ノルマーレという普通科高校の授業もあるからだ。

そして、普通に義務教育を終えた生徒であるならここの成績はあつてないようなもの。単位をいくら落とそうが依頼で補クエストえばいい。

しかし、小学生のインターンとなると、義務教育二つ（アメリカは高校も義務教育だが）すっ飛ばしていることになるので、ある程度の一般教養の有無も関わってくる。

いくら強い武偵を排出しても、中学生で習う数学も出来ないような奴は、どんなところで国の恥となるか分かったものでもないしな。

とは言っても、所詮は中学二年までの内容の試験だ。一夜漬けで昔習ったことを引き出せばいい。なのでこれは楽々クリア。

そういえば霧隠の秘術の一つに、情報保護のための記憶操作術があ

ったよな……。この世界で生きる上で向こうのことを覚えてる意味もないし、試験が終わったら自分に施すことにしよう。転生とかの記憶は全て封印して、知識や技能の記憶はこの世界で身につけたと改竄すればいいか。

次の日の実技試験は諜報科^{レザド}らしく、変装術やトラップだらけの建物への潜入、そして的に発見されたと想定した試験官との一対多の戦闘だった。

変装は「骨肉細工」、トラップも壊せるものは壊し、避けれるものは避けと難なくクリア。

しかし、最後の戦闘試験は向こうもこちらが小学生と見て甘く見ていたのだろうか、あまりにも覇気がない。腰の銃すら抜く気配がない。これにはカチンときた。

「坊や、怖がらずにかかっておいでH A H A H A！」

そして、その中の一人はこんなことばかり言っている。これは、武偵云々の前に、試験官としてどうなのだろうか。それとも、こちらが（元）日本人というのも関係あるのだろうか。

「吼え面かせてやんよ！」

「アア？」

俺の挑発でこめかみに筋を浮かべる試験官の一人。

そして、開始のブザーが鳴った。

試験官の人数は五人。聞いた話ではAランク三人にBランク二人。おそらく俺を馬鹿にしていた男とすぐにキレた男の二人がBランクだろう。

試験での使用が認められた武器は、ゴム弾入りの拳銃と刃が潰されたコンバットナイフ一本。ただし倒した相手武器は奪ってもいい。

「H A H A ! G O T O H E E E E E L L ! ! 」

「お前がな！」

バカ正直に突っ込んできたキレ男が、ナイフを腰溜めに構えてそれを勢いよく突き出す。

鳩尾を目掛けて放たれたそれを人差し指と中指で挟んでへし折り、すれ違い様に腹パンを食らわせる。

それを見て慢心を止めた試験官たちの手がホルスターに伸び、それぞれの愛銃を手中に収める。その瞬間にへし折ったナイフの刃先を残ったBランクの右手に放ち、抜いた銃を落とさせた。

「痛っ！」

「しっ！」

ベルトから抜いたコンバットナイフを直線状に投げ、柄をBランクの顎にブチ当てて脳を揺らしながら、二歩バックステップ。眼前には三閃のゴム弾が、俺の頭部、左胸、右足へと軌道を描く。

しかしここでジャンプするのは悪手。空中で方向転換するのは物理的に不可能となり、その隙を下からの一斉射撃で仕留められてしまうだろう。

なら横は？

ダメだ。どうやら前情報に嘘が織り交ぜられて伝えられていたらしい。銃弾を放ったあとの試験官のうち一人はすでに次弾を撃つ準備を終え、左手にはナイフが握られている。そこまでの準備をこの数瞬で終えられる彼はおそらくSランク武偵。横に跳べば彼が撃ってくる。

避けるのは諦めよう。

防げばいいだけの話なのだから。

頭部と左胸を目掛けて飛んでくるゴム弾を右手で弾き飛ばし、そのうちの一発が俺の右足を穿とうとしていたゴム段に当たり地面に沈める。

「！ジーザス！ガハッ！」

目の前の光景に驚いてすぐに対処が出来ないAランクの一人にトップスピードで接近し、腹部への肘鉄をお見舞い。すぐさま銃口を向けてきたSランクの前に、気絶体のAランクを放り投げて視界を塞ぐ。

「オイシャラアアア！！」

放り投げたAランクの背から強烈なとび蹴りを浴びせ、そのままの勢いで試験場の壁に激突。二人のノックアウトを確認して宙に飛び上がる。

残るはAランク一人。天井を駆け抜けて頭上まで移動。落下した勢いでそのまま肩車の体を取り膝を使って彼の首を捻る。

「ほいっと！」

急激な首への圧迫に、タツプする間もなく沈む試験官。彼が倒れる前に肩を踏み台に飛び上がり、地面に着地して立ち上がる。

ビイイイイイイイイ！！

そうしてその場に立つのが一人きりとなったとき、試験終了のブザーが鳴り響いた。

『編入試験結果』

霧隠才蔵（6） 希望学科『諜報科』

変装技術…S

潜入技術…A

戦闘技術…S

総合評価…Sランク相当

貴君のニューヨーク武偵高への編入を許可する』

英語でこう書かれた書類が家に届き、教科書を取り揃えたりと準備に追われること二週間。

今俺は、人生初の編入挨拶をすることになった。

見渡す限り人の目だらけ。好奇の目が八割程度を占めている。

まあ無理もないことだろう。自分の半分以下の年齢の子供がいきなりクラスに転入してきたんだから。

残りは……欲情が二割。……。

いやいや。いやいやいや！約四十人の二割欲情で！ショタコンどんだけいるんだよ！？

今後の高校生活に早くも戦々恐々としながら、教師に紹介されるのを待つ。ちなみに担任は、スキンヘッドのゴツイおっさんだった。俺、せっかくアメリカに来たんなら、金髪のボンキュボンなグラマラス美女に会いたかったのに。

「今日から飛び級で入ってきた編入生だ。キリガクレ、挨拶しろ」

「うい。えーと、紹介に預かったサイゾウ・キリガクレっす。見た目ガキだけど中身は大人とかはないんで、そこんところよろしくお願いしまーす」

「キヤー！」「何歳！？何歳なの！？」「お姉さんたちが可愛がつてあげるよー！」

ぬいぐるみか何かだと思っているんだろうか？俺は見世物じゃねえっての。

「キリガクレの席は……おいジョン！お前たしかじいさん日本人だったよな？面倒見てやれ！」

「うえ！俺！？嫌っすよ、そんなガキのお守り！てかじいさん俺が生まれる前に死んでるし！」

コミックを読んでいた少年が、席を立てて猛抗議する。

「関係ねえ！お前の方がよっぽどガキだ！黙って言うこと聞け！単位落とすぞ！」

「職権乱用だ！横暴だ！」

ブーブー文句を言いつつも、俺の面倒を見ることを承諾した様子の、ジョンと呼ばれた赤毛の少年。嫌なのは分かるが本人の前でガキガキ言うなよ。飛び級だろうと、高校に来てる以上は話の内容だって理解できるんだからな？

「キリガクレ、あいつはジョナサン・マードックだ。手のかかる悪ガキだが、よろしく頼むぞ」

「イエス、サー」

「面倒見るのは俺だろ!!」

ジョンの反論は、教室を満たした笑い声にかき消された。

高一の内容には難なくついていけたので問題なく乗り越え、今俺はジョンとランチをとっていた。

選んだのは、ジョンはチーズバーガーで俺はビッグバーガー。円形の小さなテーブルに向かい合うように座って食事を取る。遠巻きからの人の目垣になるが、全部無視することにしよう。

「なあサイズー」

「ん？何だジョン？」

始めは俺のことをガキと見ていたジョンも、体育の授業のバスケットでも Dank を決める俺を見て見直したらしく今では普通に友人として会話している。ちなみに武偵ランクは A で、専科は情報科だインフォルマそうだ。

「お前午後から暇か？暇なら校舎の施設の案内をしようと思ってんだけど」

「今日は用も特にはないな。ならよろしく頼むぜ」

「おう！」

「あ、いたいた！おい、ジョン！」

「んげ！M・J！」

ジョンが俺のほうから聞こえた声に対して、露骨に嫌そうな反応を見せる。振り返ってみると、アッシュブロンドの髪をボブカットにした美少女が、トレイを持って歩み寄ってくるところだった。

その彼女が、近づくなり俺の顔を覗き込んできくる。

「お？おおおー？君が噂の飛び級君かい？」

「おいおい、この美少女は誰だ？ジョンも隅に置けねえなあ。このこの」

「違えええええ！！断っ！じてっ！こいつはそういうんじゃない！」

左肘で小突く動作をすると、顔を真っ赤にして即答するジョン。唾飛ばすな。ハンバーガーにかかるだろ。

「むー、ジョン酷いねー。昔は、『大きくなったら、M・Jをお嫁さんにするんだ！』って言ってくれたのにい……………」

「十年以上前の話を持ち出すな！……………あー、こいつはM・J。所謂腐れ縁って奴だ」

俺の右斜め前に陣取った彼女、M・Jが右手を上げて答える。

「はい！ミラ・ジョー・マクレーン・グレイスでっす！ジョンの幼馴染やってまーす！探偵科のAランクでーす！」
インケスタ

快活に笑顔を弾けさせながら自己紹介をするM・Jことミスグレイス。俺も自己紹介をするために、ハンバーガーを一旦トレイに置いた。

「噂の飛び級君こと霧隠才蔵六歳だ。ちなみに専科は諜報科で武偵ランクはSな」

「にやんと！こんなちっこいのにSランクとは！偉いねー、お姉ちゃんがお小遣いあげよう！ほい、1セント！」

財布からコインを取り出し頭上に掲げるミスグレイス。

その瞬間、妙に涼しい風が吹いた気がした。

「お前……今時ドケチな親でも1セントはないだろ……
……。そんな小遣い寂しすぎるわ！」

「えへへー。言ってから金欠だったことに気付いたのです。ソーリー！」

「夫婦漫才は他所でやってくれよ。あとちっこい言うな！」

「夫婦？えへへ」 「ふ、夫婦じゃねえ！」

なるほどなるほど。要するにジョンはテンプレギャルゲ主人公属性（ツンデレタイプ）で、ミスグレイスは最初から好感度マックスの幼馴染ヒロイン、と。

「ジョンの裏切り者！俺との関係は遊びだったのか！！」

非リア充仲間の意味な。

「な、サイゾー！？いきなりどうしたってんだ！？」

「？にゃ？」

「うっわ、サイテー。ジョンサンの奴、編入初日で右も左も分らない子誑かしたんだー」 「ホモでシヨタとかマジないわー。引くわー。てかキショー！」 「我らのアイドルミラちゃんの幼馴染と言う憧れのポジションにふんぞり返りながら、十歳も年下の少年にまで手を出した……だど……」 「節操ナシにもほどがあるぜ！」 「ジョンナサン……ついに、ついにこっちの世界に入ったのか……！待っていたぞ！」 「うほっ、こいつはこれからの高校生活が楽しみだぜ」

「ジョ………ジョン？」

「ち、違う………これは、そーいうんじゃないくて………と、とにかく違う、違うんだ………違うんだああああああ！！！」

「ちよつと、ジョオオオオオン！………行っちゃった」

「ちつとばかり悪ふざけが過ぎたか。えーと、ミスグレイス？」

「M・Jでいいよ、私もサイゾーって呼ぶから」

「わかった。ならM・J、ジョンの代わりに放課後校舎の案内頼んでもいいか？」

「OK！任されたよ！」

チーズバーガーを片手に持ったまま、とても情報科とは思えないほどの勢いで走り去ってしまったジョン。後に残されてしまった俺とM・Jは、そのまま楽しいランチタイムを過ごしたのだった。

百メートル先

「ぜひゅー……………！ぜひゅー……………！し、死ぬる……………
……誰か……………さ、酸素を……………、俺に……………
……O2を……………」

ニューヨーク武偵高でござる（後書き）

今日はまだまだ続くでござるよ。

サマーバケーションでござる(前書き)

本日改訂も入れて二話目でござる!ではどうぞでござる。

サマーバケーションでござる

俺がニューヨーク武偵高へ編入したのが七月下旬。それから早一ヶ月が経とうとしている。

俺、ジョン、M・Jの三人は、バイト代わりに受けた依頼クエストを終えて、小雨の降るマンハッタンを歩いていた。

晴れのときはアスファルトが熱せられて灼熱地獄になるマンハッタンも、天候が悪いときは気温での問題は特にならない。

そして俺も米国ステイツに来て初めて知ったんだが、生粋のニューヨークカーは基本的に傘を差さないらしい。何でも天候の移り変わりが激しいから一々持ち歩くのが面倒なのだとか。俺も小雨程度なら気にしないのだが本降りになったときはどうするのか。そう聞いたときのジョンの一言。

「雨宿りすればいいじゃん」

彼らに傘を差すという選択肢はあくまでないらしい。

閑話休題

「にしても、午前中のイベント会場警備四時間だけで、一人頭三百ドルとかボロい儲けだよな」

謝礼金の入った封筒をパタパタさせながらジョンが言う。

「ねー。今月もお財布事情が苦しかったから、私も大助かりだよ。誘ってくれてありがとね、二人とも！」

猫を髣髴とさせる仕草で喜びを表現するM・J。そう、今日の依頼はたまたま早朝から学校に顔を出した俺とジョンが見つけたもので、締め切りギリギリだったのを滑り込みでゲットしたのだ。その際、ジョンがバツが悪そうにM・Jも誘いたい旨を教師に申し出てきたときは思わずニヤついてしまい、後頭部を思いっきりドツかれたが。

「あ、ああ。募集人数が三人だったからな。仕方なくだよ。そうしねえと受けられなかったし……」

「なーんて言ってるけど、本当の募集人数はふた——モガ、モガガ——！」

「にゃ？どうしたのジョン？何かサイズが言いかけたみたいだけど……」

「（それは言わない約束だろうが！！）な、何でもねえ！何でもねえんだからな！」

「はいはい。ツンデレ乙」

「俺は誰にもデレたことなんてねえ！！」

ポツ……

ポツ、ポツ……

「むぎゃー！髪があ！乙女の命がわしゃわしゃにされちゃうよおおお！助けてサイゾー！」

「けっ！リア充は爆発しろ！」

「サイゾーが何かぐれちゃったああああ！むぎゃああああ！止めてジョナサアアアン！乱暴にしないでええええ！！抜けちゃう！髪が抜けちゃうからああああ！！！」

乙女にあるまじき絶叫を喫茶店に響かせるM・Jと、それに対して無視を決め込んで、世話焼き女房よろしくカバンから取り出したタオルで彼女の髪を拭くジョン。だからタオルまで用意してなぜ傘を持たない！

コーヒーストロー吸いながら目の前で青春する二人を抗議の意味を込めてジト目で睨むも、こうかはないようだ………。ああ、ニクシミデヒトガコロセタラ………。

ブルツ

「お、悪寒がっ！」

「うにゃっ！にゃー、髪ボサボサだよ………」

どうやら憎しみで人は殺せないが、青春のキラキラした感じを阻害することは出来るようだ。ほっ、と一息をついてた影響か、ただ単にコーヒーのせいかは定かではないが、もよおしていることに気がついた。

「悪い、俺ちよいとお花摘んでくる」

「お前はどこの女の子だ……行くならさっさと行ってこい。雨ももうすぐ止みそうだからな」

「いってらっしゃーい！」

「ほいほーい。いってきますよーっと」

「ふうー、開放感。さーて、お待たせしましたよーっととととととと
うえええええい!?」

ハンカチで手を拭きながら席に戻ると、地形が変わっていた。正確には、テーブルと椅子が散乱していた。

「おーい、ジョン。何があったんだ? ってM^{よめ}・Jはどこだ? アイツ
もお花摘みか?」

地面に寝てるジョンの首根っこを掴んで起こし、事情を聞く。すると、鬼のような形相になったジョンが俺に詰め寄ってきた。

「! サ、サイズー……………大変だ……………! M・Jが、
攫われた!」

「はぁぁぁぁ! ?」

ふと外に視線をやれば、雨は止んでいた。

「つまり俺がいなくなったすぐ後、ガラの悪い兄ちゃん四人に囲ま

れてうだらうだら。必死のもやしパンチ虚しく嫁を攫われた、と」

「はっ・・・・・・・・はっ・・・・・・・・そういう、こ・・・・・・・・と
だ・・・・・・・・！はっ・・・・・・・・はっ・・・・・・・・あ、と・・・・・・・・
・・嫁じゃ・・・・・・・・ねえ！」

生粋のパソコンオタクであるジョンはその運動会系な見かけとは裏腹にかなりの運痴君なのだが、いくらなんでも数百メートル全力疾走くらいでこの体たらくは・・・・・・・・。

俺がおぶってやろうかと提案もしたが、ジョンのプライドが許さないとのこと。今のお前にプライドの四文字を語る資格はないと声を上げて抗議したいのだが、そんな暇はない。

「で、どんな奴らだった？」

「黒人二人・・・・・・・・と、白・・・・・・・・二人、で・・・・・・・・
黒人の一人・・・・・・・・は、ドレッドヘ・・・・・・・・アー。もう一人は・・・・・・・・スキンヘ、ツド、だった。ひいっ・・・・・・・・ひいっ・・・・・・・・白人・・・・・・・・は、ボクサー経験が、ありそう
なロン・・・・・・・・ゲの奴と・・・・・・・・サングラスを・・・・・・・・
はあ・・・・・・・・ひい・・・・・・・・かけた短髪・・・・・・・・だ・・・・・・・・
・・・・・・・・！」

「お前は休んでてもいいんだぞ？もやしのお前にはもうキツいだろ——」

「それ・・・・・・・・でも！」

俺の休めという言葉に対して、怒気を滲ませて答えるジョン。

「それでも．．．．．！俺が弱いからこうなったんだ．．．．．
！せめて、助けてでもやらねえ．．．．．と、胸クソ悪いん．．．
．．．だよ！」

「．．．．．ぷっ」

「笑うんじゃ．．．．．ねえ！たしかに、はっ．．．．．はあ。
カッコついてねえのは、わかる．．．．．けど、さ！」

「ったく。いつもはあんなに邪険に扱ってくせに、いざとなるとそんな
一生懸命になりやがって。弱いくせに言うことだけは一丁前じゃね
えか。」

「いやいや、今のお前は最っ高にカッコいいぜ？だから少し落ち着
けや。ただでさえ足手纏いなのにさらに疲れてどうすんだ」

「ぬぐ．．．．．！辛辣．．．．．な．．．．．小学生のガ
キ．．．．．の、くせに」

ポケットからケータイを取り出して、いくつか操作をした後で送信
ボタンを押す。

「まあ、水でも飲んで待ってな。蛇の道は蛇．．．．．って奴を
信じてな。あと何度も言うが俺は高校生だ。小学生言うなボケ」

「待ってたぜ兄貴！この奥だ！」

「俺たちが出てくるまで虫一匹出入りさせんじゃねえぞ」

「」「」「わっかりやした!」「」

「あ、あのゝ、サイゾーさん?こ、この方たちは一体……」

「俺が今までストリートでファイトしてきた連中。締め上げてたらしいの間にこうなってた」

路地裏にたむろしていたチンピラならそういう連中にも詳しいかと思ひM・Jの写メと男たちの特徴を記したメールを送ったところ、M・Jに似た気絶した少女を背負った男たちを見た奴がいたらしく、最後に見かけた路地の場所を送ってきた。

「そんじゃま突入すっか!」

「お、おうよ!(待ってろよ、M・J!)」

Side M・J

「う………うん………」

私………どうしたんだっけ?たしか、サイゾーがいなくなつてすぐにガラの悪い人たちに絡まれて………。………!

「ジョン!?!」

「お、気がついたみたいだぜ？」

「お嬢ちゃん、起きて早速で悪いんだが、その邪魔な布を取らせてもらうぜー。ぎゃはは」

「！だ、誰……」

知らない男の人に囲まれている状況に怯えながらも、何か少しでも情報を得ようと未だ冴え切らない頭を働かせて周りを見渡そうとし……首につけられた金属に気がついた。

「な、何これ！？取って！取ってよ——キャッ！？」

勢いよく男の人の一人が持った鎖が引っ張られて、そっちに思いっきり引き寄せられてしまう。

「やかましいガキだな……だからさっさと薬^{ヤク}打ちちまおうぜってつったんだよ」

「そう焦るな。いっしょにいた小僧はのしたし、もう一人に至っては本当のガキだったんだ。それにここはポリスにも分からない、裏道に精通してる奴しか来れないところだぜ？」

「そうそう。じっくり堕としていこうぜ。ってことで取り敢えず……オラァ！」

「い、イヤアアアアアアアアアア！！」

鎖を持った男の人が私の服にナイフを当て、拒絶することもできないで制服を切り裂かれちゃう。

とっさに腕で胸を隠したけど、下卑た視線が私を嘗め回すように見
てくるのがわかって気持ち悪い。イヤ・・・・・・・・イヤだよお・・・

「おいおい、怖がっちゃまってるじゃねえか。レディにはもつと優しくねえと」

今まで会話に参加してなかった人が私の顎を持ち上げて顔を近づけてくる。その動作にとっさの防衛本能が働いて、思い切り顎を蹴り上げてしまった。

「がっ！・・・・・・・・。。このクソアマがああああ
ああ！！優しくしてやったのに調子に乗りやがって！！オラ！オラ
！オラ！こうしてほしいのかよお！！」

私の蹴りではサイゾーみたいに意識は刈り取れなかったみたいで、
すぐに立ち上がった男の人が、さっきとは別人のような顔で私の頭
を掴んだかと思うと、思い切り地面に叩きつけようとしてきた。

「い、イヤ・・・・・・・・！止めて・・・・・・・・！痛い、痛いよお・・・
・・・・・・・・！」

今は腕で顔を守ってるけど、それも限界になってきた。もう力が出
ないよ。

（うおおおおおおおおお！！）

ジョンの叫び声が聞こえてきた・・・・・・・・。幻聴かな？でも・・・
・・・幻聴でも、ジョンの声ってだけで勇気が出るよ。でも、でも

ね・・・・・・・・。

「ホントは怖いよ！助けて・・・・・・・・！助けてよ！ジョオン！」

「えいしやらああああああ！！！」

「いやああああああ！！！」

「がはあ！！！」

・・・・・・・・え？今の・・・・・・・・声・・・・・・・・。

「呼ばれてないけどじゃじゃじゃーん。あなたの街の霧隠才蔵です。王子様一人、頼まれてないけどお届けに参りましたあ！」

「王子様・・・・・・・・じゃねえ。人を・・・・・・・・ぶ、武器にするとか・・・・・・・・ありえねえだろ」

そこにいたのは、小学生の肩に担がれた世界で一番好きな男の子だった。

Side 才蔵

さて、建物に入っただいいがどうしましょう。色々な方法が考えられるが・・・・・・・・。

「うおおおおお！待ってろよおおおM・・・・・・・・犯罪者共
おおおおお！！！」

・・・よし、この突っ走ろうとするツンデレをどうにかしつつM・Jを救出する方針で行こう。

がしっ

「な！？離せサイゾー！今から腐った犯罪者をブチ殺して、そのついで！ついでにM・Jを助けに行くんだから！」

一度そいつらにやられたのをもう忘れたのだろうか。

よいしょっと。

「止めろ！降ろせええええ！小学生に担がれるなんて、俺のプライドがああああ！！！」

「そんなプライド、牛乳でもかけてシリアル感覚で食っちゃまえ。あと次小学生行ったら背骨へし折るぞ」

よし、そんなじゃま人の気配がする四階に向かってトップギアで行くぜ！

「うおおおおおおおおお！！壁！壁に当たりそーあ、ちょっと掠った！今髪の毛掠った！うおおおおおおおおお！！」

到着！アーンDM・Jピンチ！！

だがたしかジョンは、自分の手で助けたいって言ってたな。よし、取り敢えずジョンで倒せば問題はないな。

助走をつけながらジョンを振りかぶり……………

「えいしやらあああああああ!!」

フルスイング!!

「いやあああああ!!」

「がはあ!!」

壁にめり込むグラサン短髪。ホームランならずのエンタイトルツ―ベースってとこだな。

さて、みんなの注目が集まったところで名乗るとしよう。

「呼ばれてないけどじゃじゃじゃーん。あなたの街の霧隠才蔵です。王子様一人、頼まれてないけどお届けに参りましたあ!」

「王子様……………じゃねえ。人を……………ぶ、武器にするとか……………ありえねえだろ」

文句を言うジョンを担ぎ直して、M・Jを庇うように位置取る。

「な、何だてめえら!」

「何だかんだと訊かれたら以下略。ラブリーチャーミーな六歳児だ!」

「M・J! 無事だったかあ!」

バットになりながら真顔で問いかけるジョン。シュールだ。

「え、えへへへ。やっぱり来てくれたあ……………」

緊張状態が解けたからだろう。意識が落ちるM・J。小脇に抱えて、壁にもたれるように移動させる。その間、嫁の下着を見せなくなかった様子のジョンに目隠しをされていたが。

「さてと……………こっからはワンサイドゲーム蹂躪のお時間だ。いい子はその世でネンネしな」

「な、舐めるなよガキい！お前らブチ殺してこい！」

白人ロン毛の命令の元、黒人二人が猪突猛進してくる。フェイントも何もない真っ向勝負のようだ。

「そいやあああああ！！！」

「目が！目があああああ！！ぐるぐる回って痛っ！やがるううう痛て！うう！」

腰の辺りにジョンを持ち替え、ちょうど突っ込んでくる二人の顔面に激突する位置で横にブンブン回転させる。

「ラストオオオオオ！！決、め、て……………こいやああああああああ！！！」

ジョン曰くボクサー崩れらしいロン毛に向かって、ジョンナサンミサイルを投擲する。速度は、何とかジョンが目を開けて手足の動作が

できる程度。

[舐めるな！脳天勝ち割ってやるぜえええええええええ！！]

右腕を引いて殴る構えをとる男。おそらくこのままだと、運動エネルギーと相まって莫大なエネルギーがジョンの頭部を割りにくるはずだ。

だが、誰も俺が手出ししないとは言っていないよな？

棒手裏剣を二本取り出し男の両足を貫くように飛ばす。空飛ぶジョンを追い越したそれは奴の両足を貫いた。

「ぐおおおおお!!
・・・・・
しまっ――」

「くったばれえええええ！」

思わず屈んだロン毛の脳天。そこに、運動エネルギー＋振りかぶりが合成されたもやしパンチ改が炸裂した。

Side
ジョナサン

[いっすん...] []

「もー。動いちゃだめ！」

「そんなこと言っただって染みるんだ——痛えええええええ！」

男たちを警察に引き渡して事情聴取を終え、少しばかりの報酬を貰ったあと、俺はM・Jの家に連れてこられてしまった。

サイゾーが、

「用事があるから俺は帰るな。……ジョン、一発決めてこい」

と、やけにニヤニヤしながらサムズアップした親指を逆方向に曲げたのだが、別に俺は悪くないと思う。

「てか、怪我はお前のほうが酷いんじゃないか？　いつううう……！　」

横目で見た彼女の顔には、絆創膏やガーゼが張られて痛々しい。しかしそれでもM・Jは笑って言った。

「だいじょーぶだいじょーぶ。全部かすり傷だし。ジョンのほうが重症じゃん」

「……味方に負わされた傷だな」

そう。俺の傷は余すところなくサイゾーのせいだ。これは次あったらジュース一本じゃ済まないぜ。

「ぬぐおお……し、染みるう……」

「ほーら、もうちょっとなんだからじっとしてよ！（でも、私のために必死に走ってたって、サイゾー言ってたよね。これって脈あり……でいいのかなあ？）」

でも、まあ……。何となく気が向いたら飯を奢ってやるのもいいかもな……。あくまで財布に余裕があるときなんだが、今日の報酬もあるしまあ明日にでも——って！

「あ、ちょ！痛い痛い痛い！」

「にゃーっはっは！今のジョンの生殺与奪は私のモノ！喰らえ乙女の髪の毛！オキシドルアタックうううう！」

「やっぱ根に持ってたのかあああああああ！」

「（できたらそのまま、一生私のモノにしたいな……。なーんて！にゃーんてね！）」

「離せえええ、ガーゼを圧迫、圧迫するなああああ……。って聞いてない！？おいM・J！ト、トリップするな——みぎやあああああああ！」

サマーバケーションでござる（後書き）

できたらもう一話今日中に投稿したいでござるな。まだ一文字も書いてないけど。

感想やアンケートはまだまだ待ってるでござるよー。

キンクリでござる(前書き)

後書きにアンケートがあるでござる。

キンクリでいざる

この話を始める前に言っておくッ！

俺は世界の不条理をちよっぴりだが体験した。

い．．．．．いや．．．．．体験したというよりはまったく理解を超えていたのだが．．．．．。

あ．．．．．ありのまま、今起こったことを話すぜ！

『俺はついこの間米軍をのしたと思ったら、いつの間にか中学生の入学式だった』

な．．．．．何を言ってるのか、分からねーと思うが、俺も何をされたのか、分からなかった．．．．．。

頭がどうにかなりそうだった．．．．．。

ご都合主義だとか、作者の怠慢だとか、そんなチャチなもんじゃあ、断じてねえ。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ．．．．．。

ってわけで、今日は神奈川武偵高付属中学校の入学式です、はい。

神のヤロー、俺が原作に関わる気配がないのを見て、マジで介入しやがった。

ランクが上がってから大統領に熱烈なラブコールを受け続け、専属ではないもののボディガードをしていたんだが、ある日いきなりじいちゃんが「日本に帰りな」だからね？意味わからねえ。こんちくせう。

大統領は、最初は渋ったものの最後には途中で止めることを快諾してくれた。

それにしても、何でよりにもよって主人公と同年なんだろうか？でもま、クラスが違うだけまし、か。

そんな風に考えてた時期が俺にもありました。

それはGWも開け、ようやくクラスにも馴染んだころだった。

「アイツよ！遠山」

「霧隠の奴、少し顔がいいからって調子に乗ってケーコにセクハラしたんだよ！」

「ほらほら、早くやっちゃって！」

「そうだね。ケークを傷つけた罪はきっちり取ってもらおうか」

「はぁ」

どうしてこうなった。

ちくせう。

話は昨日、授業が終わってさあ帰ろうとした時だった。

〽昨日〽

「ふう・・・・・・・・帰るか」

「おーい、霧隠ー」

「ん？どうした？高橋と佐藤」

「なあ、今日二人でカラオケ行くんだけど、お前も来るか？」

「お、いいな。久々に俺のこの美声に酔うがいい！」

この二人とは、始め席が近かったのもあって、よくつるんでいる。

「ふふふ、だが残念だったな、霧隠！今日は毎日密かに特訓していた俺の独壇場！ミックミクにしてやんぜ！」

「では、我輩のコブシの効いた和の心にも浸らせてやろう！」

そんな感じにバカ言ってた時だった。

「霧隠君？」

「ん？えーと・・・・・・・・」

呼ばれた気がしたので振り向くと、いわゆるギャル集団という奴ら
がいた。

俺は前世からこういう連中が苦手なので関わらないようにしてたん
だが・・・・・・・・、何かしたっけか？

「ちょっと話があるから、今から顔貸して欲しいんだけど」

「いや、今からこいつらとカラオク」

「「行ってこい！」」

笑顔でサムズアップする二人。

とりあえずこっちも彼らを笑顔でフェイスダウンさせた。ようは廊
下に顔を叩き付けた。

「よし、行こうか」

「え、ええ・・・・・・・・」

めり込んだ二人を見て、顔が引き攣ってた気もするが、気のせいだ
ろうな。

「で、俺に何のようなんだ？」

廊下を歩きながら、前を歩く女子の一人に聞いてみた。

「まあ来れば分かるから」

「はあ」

そして着いたのは屋上。そこには、やはりギャルの一人がいた。

たしか、このギャル集団のリーダー格で………たしかケーコとか呼ばれてたっけか？

そんなことを考えていると、ケーコ（仮）が口を開いた。そこから出たのは、驚きの一言だった。

「あ、あの！霧隠！」

「お、おう。霧隠でございます」

突然の大声に、サ○エ風になっちまったぜ。

「わ、私、アンタのことが好きなの！付き合って！」

そーなのかー。

ふーん。そーなのかー。

・・・・・・・・・・。

は？

「はあああああああああああああああああ！？」

「キャッ！」

ケーコ（仮）がビクツとなったが、んなことはどうでもいい！

二度生まれて初めての告白だぜ！？体裁なんか関係あるか！

だが、まずはよく現状を整理しよう。

関係を図式にするとこうなる。

俺↓ギャル嫌い

ケーコ⇨ギャル

ケーコ⇨俺を好き

俺⇨自分で言うのもなんだがかなりのイケメン

俺⇨どうせなら原作キャラと恋したい

ケーコ||モブ

ケーコ↓俺を好き

結論

「ごめんなさい」

「・・・・・・え？」

「んじゃ、二人とも待ってると思うから、俺はこれで」

そう言って、俺は夕陽に照らされた屋上を去ったのだった。

余談だが、二人は帰ってやがった。

二人からのメールが『もげろ』の文字がびっしりだったので、サイトで拾った実際にもげた局部の画像を一通一添付、計百通ずつ送りつけてやった。

その後着拒にして、日課の修行に勤しんだ。

ちなみに二人には土下座で許しを請われたよ。

回想終了！ほわわわん

「で、今日も今日とて呼び出された俺は、律儀にギャルについていき、体育館裏に呼び出され今に至る、と」

「何余裕ぶつかましてんのよ！霧隠！」

「遠山！さっさとやっちゃってよ！」

「やれやれ。レディが怒った顔は嫌なんだ。女の子は笑ってたほうが可愛いからね」

「それに関しては同感だな。くされジゴロヤローめ」

「だからさっさと終わらせる」

そう言って、遠山がこちらに走ってきた。

「ちくせう。心底めんどうだぜ。金にもならない戦闘なんて、な！」

潜り込むように姿勢を下げて、俺の死角に入り込みながら横薙ぎに顎を狙ってきた遠山を、背後に飛びながら蹴りを繰り出すことで牽制する。

「なあおい遠山。お前はどんな女の子がタイプなん、だ！」

一回転して着地し、鍛えぬいた瞬発力で距離を詰めて、拳を振り下ろす。

「いきなり、なんだ！」

それをギリギリでかわした遠山は、転がりながら受身を取る。

「つれないなあ。会話くらい付き合えよ、な！」

体勢を立て直す前の遠山に近づき、腹に一発蹴りを入れる。

今回は避けるのを諦めたのか、代わりに腹に力を入れながら後ろに飛んで勢いを和らげたらしい。若干顔を歪めるも、すぐに立ち上がった。

「女性はすべて等しく美しいと思うが、な！」

「ひゅー。やっぱジゴロは言うことが違うわ」

遠山からの、側頭部を狙った蹴りを掴み、そのまま地面に叩きつけるが、バク転の要領で逃げられる。

そしてそのまま飛び掛ってきた遠山を横にかわす。

運動性能は段違いだが、何分力が上以上の相手との実戦経験の少なさがネックか。

ま、いつも一方的な蹂躪だったんだろう。そういう能力だ。HSS
つてのは。

「今のお前の実力も掴めたし、そろそろ終わるか」

「いきなり強がりか。威勢だけはいいな」

「………………。今の状況でその言葉しか出ない辺りは、そのモードの弊害か？」

「！」

虚を突かれた様子の遠山に、今までとは段違いのスピードで近づき顎に一撃。

「沈め」

その言葉は果たして聞こえたか。崩れ落ちる遠山を見て青ざめるギヤルたち。

そいつらに軽く殺気を込めた視線を飛ばして脅かし、気絶する遠山の財布から迷惑料の三千円を抜き取り、俺は家路に着いたのだった。

え？やることが不良？馬鹿言っちゃいけないよ。こんな善良な一般市民を不良とか、さ。

キンクリでござる（後書き）

才蔵が使う忍術・体術を募集でござる。

ただし、チャクラとか気とかそういうのはダメでござる。

漫画からとったときはその原作名も書いてほしいでござる。

ご協力お願いするでござる。

七月二十八日改訂

暴走でござる(前書き)

今年もやって来たでござるよGW。

カラオケにボーリングにゲーセンと予定づくめで財布がスカラカ
ンになりそうでござる。

暴走でござる

ど・う・し・て・こ・う・なっ・た！

「お前さえ倒せばこの学校は俺たちのもんだア！」

「「「うおおおおおおお！」「」「」

「いくぜヤローどもお！！」

「「「ひゃっはあああああああ！！」「」「」

「お、おい！どうすんだ霧隠！」

「わ、我輩、とても怖いぞ！」

俺の隣でガタガタ震える、チキンたち高橋と佐藤。いや、仮にも武偵中の生徒が不良怖がってどうすんの？

そう聞いたら、二人は救急科アンビュラスを目指しているらしかった。初耳だった。

ま、それはいいんですよ。

もう一度言う！ど・う・し・て・こ・う・なっ・た！

簡単に説明すると、遠山は学園最強でむかつく女の僕。

女子を怒らせると遠山が襲ってくるということで、今まで不良たち

は肩身が狭かった。

しかし、そこに俺という遠山を倒した男が現れた。

するとどうなるか。

ノータリンな不良どもの脳内図式では

俺Ⅱ現在校内最強Ⅱ倒せば俺たち最強

遠山を倒せるわけでもないのにそれより強い俺を倒そう、とても頭の悪いことになっているのだ。

別に遠山死んだわけじゃないのに。

で、今まさに学校中の不良が集って、俺を最初に倒した奴らが最強になるらしい。

思わず嘆息してしまう。しかし不良は待^{バカ}ってくれない。

「はあ」

「いっくぜエ!!」

一斉に向かってくる不良^{カス}ども。

あー、もう無理。溜まりに溜まったこのフラストレーションがもう限界だわ。

「てめえら……いっぺん沈んどけやボケカスどもがあ!!」

連日の襲撃に俺はストレスでマッハ。

それを発散すべく力を出し惜しみなく、敵が死なない程度にフルに使い、総勢数十人を超える不良軍団を一撃でのしてやった。

「おお!マジで強かったんだな霧隠!俺冗談だと思ってたわ!」

「授業でもそんな様子はなかったぞ」

そりゃ、手えバリバリに抜いてたからな。

「てか、お前ら本当に非戦闘要員だな。ちっとは戦えよ」

「ムリ♪」

笑顔の二人の脳天に、とりあえずゲンコツを落としておいた。

〽次の日〽

「「「「「おはようございます!兄貴!」」」」」

「……………どうしてこうなった。まさかの二日連続ですよ。

どこでどう因果が捻じ曲がったりしたのか、俺はいつのまにか神奈川武偵高付属中学校全不良のボスになっていた。

「「「「「兄貴!どうしたんですか!頭痛ですか!腹痛ですか!」」」」」

お前らのせいだよ。

「き、霧隠……?おは」

「おいテメコラ!兄貴になにナマきいとんだああん?」

「ひい!」

「てめえら引っ込んどけや」

「あべし!」

吹っ飛んでく不良を尻目に、俺は二人に近づく。

「悪いな。なんか変なことになっちまった」

「は、ははは」

乾いた笑いの高橋を伴って、俺たちは教室に向かった。

「「「「「いってらっしゃいませ!兄貴!」」」」」

……野太い男声を背後に従えて。

「おはよ、佐藤」

「おう、おはよう………なんか疲れているな」

校内のいたるところで好奇の目に晒され、すっかり焦燥した俺は、席に着くなり机に倒れこんだ。

「………もうやだ。なんでギャルを振ったら不良のリーダーになるんだよ。ありえないだろ。だいたい全部女に簡単にいいように使われる遠山が悪いと思わないか？ そうだよ。全部遠山が悪いんじゃないか。そもそもH S S てなんなんだよちくせう。女に優しくなるだあ？ ジゴロ死ね！ 氏ねじゃなく死ね！ あーもう考えてたらイライラしてきたなあ！ ……よし！ 殺そう！ 遠山のクソジゴロを今すぐ殺そう！ 縄で縛って髪を引き抜いて爪を抜いて歯を叩き折って目を抉り出して耳を？ いで指を一本一本切って四肢を五cm毎に刻んで金玉を握り潰して局部を千切って皮を少しづつ剥いで塩を塗り込めて熱湯を浴びせかけて生コンに詰めて東京湾にレッツゴー」

「「待て待て待て！」」

「止めるな二人とも！ 今なら俺、米軍だって一人で相手どれる気がする！」

「ますます待てえ！！」

「おいみんな！ 止めるの手伝ってくれ！」

「「「「「ムリ。コワイ」「」「」「」」

「薄情者どもおおおおお！」

「ギャハハヒキクカキコケカハハ!」

「霧隠が壊れたぞ! 制御不能!」

「と、止まらない! まさか……」

「暴走!」

「霧隠! 暴走しました!」

「拘束が、はずれてい! ……ぎゃあああああ!」
オレたち

「クルキカハカキキコケケカカキコカヒヤカ!」

俺の意識はここでもなくなった。

三人称

遠山キンジは、頭を抱えていた。

二日前、またも女子に利用されて襲った、C組の霧隠才蔵。

あとあと他に聞いた話だと、別にセクハラも何もしていない、まったくの無実だった。

しかし、それだけだったら今までもあった。

問題は二つ。

一つは霧隠の圧倒的な強さ。

ヒステリアモードの自分が負けるなど、今まで兄を相手以外一度もなかった。それを、今まで名前も知らなかった、まったく名も知られていない同級生にされた。

そしてもう一つは、彼がヒステリアモードを知っているかのような言動をしたこと。

遠山家の秘奥を知るなど、普通は有り得ない。

この二つを、謝罪とともに聞こうと思ったのだが、目の前で不良相手に無双する彼を見て呆然としている間に去られてしまい、その後も、例のギャルたちに敗北を責められるなどして、一向に話しかけられなかったのだ。

そして今日。

今日こそと意気込んでいたのに、霧隠の周りになぜか昨日の不良が取り巻いていて、結局声をかけられなかった。

「はあ、どうすればいいんだよ………」

溜息をついた、そのときだった。

ドガァン！ガシャン！

「な、何だ!？」

突然教室のドアが吹っ飛び、音のタイムラグなしに奥の窓を破りな

がら外に落ちていった。

しかし、それ以上の危険を示す真っ赤なシグナルが、遠山キンジの脳内でただただ明滅していた。

理解するでなく本能で感じた、真剣^{リアル}な生命の危機。

しかし、頭で分かっているも体は動かない。

正面から感じる圧倒的威圧感に、覇者のオーラに、決して弱者は抗えない。

「遠オオオ山くウウウウウウウン!!」

轟音と絶叫とともに、

今、最強最悪の魔王が誕生した。

暴走でござる（後書き）

感想に全部返すのは大変なので、ここでお礼に代えさせてもらおうでござる。

アンケートに沢山の投稿感謝感謝でござる。でも、説明が足りなかったみたいなので、少し要望の追加と約束でござる。

まず、忍術にはその詳しい理論（仕組み）と一緒に書いてほしいでござる。何だかんだで一番重要なことでござったな。

次に、真庭忍法はダメでござる。これはこの作品を書いていく中で譲れない、作者の我が儘でござるが、どうかご勘弁を。

最後に、著しく世界観を崩すような忍術も無しでござる。すでに身体能力だけで十分人外認定でござるが、それでもこれも理解して頂きたい。両親との修行風景について色々言いたい方もいるでござろうが、そこは才蔵が努力するための神からのサービスってことにしておいてほしいでござる。

ではでは、こんな駄作を読んでくださる方に感謝しつつ、今回はこれにて失礼。

理不尽でござる（前書き）

いつも読んでもらってありがとうございます。まだまだ忍術は募集中でござるよ。

今回はそれに平行して、後書きでもう一つアンケートをとるので、そちらの方もよろしくでござる。

それから、視点について指摘をもらったのでござるが、武偵高に入学するまでは才蔵以外の視点はないので、そのことに関してはごめんなさいでござる。

理不尽でござる

話変えリセット！アーンド……… キングクリムゾン！

キンジとの戦闘から早くも一年が過ぎた。

え？魔王？暴走？知りませんけど何か？

あの後、血まみれのキンジとかガタガタ震えるクラスメイトとか見たけど、

『俺は悪くない』

さて、二年生になってまたも同じクラスになった二人^{バカ}+いつの間にか仲良くなったキンジの四人でつるむようになった。

浮気調査みたいな簡単な依頼を四人で受けたりしたし、よくキンジと模擬戦闘なんかをしている。まあ俺が特訓してやってるような感じだが。

今日の武偵訓練時間（通称…武練）は、^{レザド}諜報科と^{アサルト}強襲科の合同演習が入っている。

言ってなかったが俺の希望進路は忍者らしく諜報科だ。なので強襲科志望のキンジとはよく専門授業でも合同になる。

で、今日は下級生と上級生も混ぜた戦闘訓練らしい。

あれ？こんな内容の話原作に何かなかったっけ？

正直な話、原作の内容なんてこれっぽっちも覚えてないし、登場人物もキンジとアリアくらいしか覚えてない。

そりゃ、忙しい中で友人に押し付けられて何となく読んだだけの小説なんて、十年以上も覚えてられっか！って話だ。

「まったく、なんで他学年と訓練なんかするんだ？めんどくせ」

「霧隠は授業全部めんどくさいって言ってるじゃねえか。」

俺の愚痴にキンジが茶々を入れてきた。

だってここで習う技術とかとくに両親に教わってるし。しかもあの父^{アホ}に。

「あーあ、高橋と佐藤はいいな。簡単な講習だけで、あとは怪我人が出るまで待機だろ？せつけえな」

「救急科^{アンビュラス}を強襲科とか諜報科の訓練に混ぜたら、目も当てられないだろうが」

「そりゃそうだけどさ」

たぶん死に体で互いの怪我を治すという、シニールすぎる光景が誕生するはずだ。

「ほら、さっさと着替えてグラウンド行くぞ」

「へーい」

気の抜けた返事をしながら体操服に一瞬で着替える。それを見てキンジがジト目になった。

「……………いつも思うんだが、一体どうやって着替えてるんだ？」

「忍者だからな」

「理由になってないぞ」

「ニンジャ N I N J A と サムライ S A M U R A I は東洋の神秘。ニンジャ 外人が相手ならどんな摩訶不思議も理不尽も ニンジャ N U N J U T S U と ブシドー B U S H I D O でごまかせるんだぜ？」

「まず俺は日本人だし、それは外人を舐めすぎだ！」

「そうカッカすんなや」

「誰のせいだ。ったく」

愚痴りながらも服を着替えるキンジ。

俺が忍者だったのは三人に教えてある。身体能力とかについていろいろと聞かれるのが面倒なので、とりあえず全部『忍術』のゴリ押しで誤魔化すためだ。じゃないと、説明つかねえからな。

「さてと、お前も着替えたな。じゃ、行こうぜ」

「おう」

で、廊下に出た瞬間だった。

「うお！」「きゃ！」

キンジは吸い込まれるように、尻餅をついた少女の豊満な胸へとダイブイン。
ヘンタイ アヴァロン

とりあえず、キンジと友人になって一つはつきりしたことがある。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。ふう、君、大丈夫かい？」

「え？え！？」

この世には万死に値する害悪の名を冠する、この世全ての男子の仇敵たる人種が存在していて・・・・・・・・

「悪いな。連れが迷惑を――」

「ひっ！き、霧隠！・・・・・・・・さん！私は食べてもおいしくないです！し、失礼しました！」

「あ・・・・・・・・」

「やれやれ、恥ずかしがり屋な子猫ちゃんだ」

一度付いた汚名は決して雪げない、ということだ。

「・・・・・・・・」

「ん?こ?」

「こんちくせええええええええう!!」

「ぐはっ!」

・・・・・・・・泣きながらキンジを殴った俺は絶対悪くない。

三人称

「戦闘訓練はあらかじめこちらで決めた組み合わせで行う。それでは呼ばれた順にAからGコートに入ってくれ」

教師が次々に生徒を呼んでいく。組み合わせは同学年同士もあれば混合もある。

やはり一年の壁は大きく、順当に上級生が下級生を下していく。しかし、様々な組み合わせの生徒が模擬戦闘をしていく中で、何人か下級生が勝ち、それを見てギャラリーが沸いていく。

そして一年生の間には、ある考えが広まりつつあった。

『もしかしたら一年生の誰かが、あの二年生たちを倒せるかもしれない』、と。

基本、武偵の世界は完全な実力主義だが、まだ見習いでほとんどが

どنگりの背比べ状態の武偵中学校はその限りでない。

先輩が絶対上位の体育会系な世界が展開されているのだ。

いや、いたのだ。

しかし、今の二年生が一年生のころから、それは変わった。

二人の男子が一年生にいたことで、支配体系が変化したのだ。

先輩風を吹かせて一年生の女子をナンパした上級生の男子は、女子の番犬になった、たった一人の男によって制裁された。

その男を簡単に倒した男は、いまや県下のほとんどの不良を従えている。

これにより、関係のない二年生までもが調子に乗り、二人の介入を恐れた一年生と三年生は肩身の狭い思いをしている、というのが現在の神武（神奈川武偵高付属中学の略）の実情だった。

しかし、実際にその力の片鱗を鑑みた二、三年生とは違い、現在の一年生は話には知っていても現物を見たものはいなかった。

そして、噂は誇張されるもの、というのがこの手の話の常だ。そのため今の一年生はせいぜいケンカが強い不良たち、というイメージしか持っていなかった。

それ故の期待。それはある一年生に多く注がれていた。

噂によるとある高名な忍者の末裔。

血筋から言って常人とは違う彼女なら、たかだか一般人の不良など倒せるはず、と。

その願いが届いたのか否か。次に呼び出されたのはこの二人だった。

「二年B組霧隠才蔵と一年A組風魔陽菜！Bコートに入れ！」

呼ばれた俺は、ダラダラと指定されたコートに向かう。たしかBコートだよな。

にしても『風魔』だと？風魔なんて『風魔忍軍』くらいしか心当たりがないぞ。

古くは戦国。頭領は代々『風魔小太郎』を襲名し、不落城の異名をとった小田原城を拠点に関東で隆盛を誇った北条氏を、初代早雲と北条盛時から五代目隆盛まで影から支えた、伊賀、甲賀と並ぶ忍者集団だったのが風魔忍軍。

だが、江戸の世となり徳川氏によって五代目『風魔小太郎』が処刑され、百年に渡り後北条氏に仕えた忠義の忍一族、風魔忍軍は滅亡した。

しかし、この世界は史実とは違う。何よりも俺やキンジの存在がそれを証明している。

ならばきつと『風魔陽菜』は彼らの生き残りなのだろう。仕事で一度も話を聞かなかったのを見る限り、すでに一族は没落していると察せるが。

だがこの世界で生きてきて、初めて出会う『霧隠』以外の忍者だ。少しは楽しめるといいのだが。

そんなことを考えながらコートを中心に立つ。すると、突然の旋風によって巻き起こった土煙とともに、印を組んだ一人の少女が現れた。

ポニーテールのような、しかしチョンマゲにも見える髪形。

籠手を両手に詰め、首に巻いた赤マフラーを風になびかせている。

「……………これで、『只今参上!』とか言つてのけたら、紛うことない100%純粹培養の絶滅危惧種テンプレ忍者だ。いや、忍者自体が絶滅危惧種か。じゃあアレだ。特定天然記念物。」

「一年A組風魔陽菜、お呼びに預かり只今参上つかまつた!」

「……………世間様の忍者に対する風が冷たくなるから、見た目はともかくその喋り方は止めれ。三百円上げるからさ。」

「拙者の相手は不良殿でござるか。しかし、拙者を今までの相手と同じとは思わない方が懸命でござるよ!」

瞳の奥に炎を轟々と燃やしながら、風魔がビシッ!と俺を指差す。人を指差しちゃいけません!

何か、色々めんどくさいぞコイツ。勝っても負けても変な方向に転がる予感。え、これフラグ?

「そろったな。では所定の位置につけ」

とりあえず向かい合う。

互いに無手。各々が構える。

「はじめ！」

瞬間。土煙を巻き上げながら風魔が突っ込んでくる。なるほど確かに風魔は忍者だ。ホンモノ。対処すらさせずに終わらせようとする考え方なんて特に。

だがな風魔の末裔よ、

「甘い！」

知らないだろうが、霧隠オレだって忍者ホンモノなんだぜ？

「むっ！」

俺の腹を狙ったブローを掴み、そのまま腕を下に引く。それと同時に片足を引っ掛けた。

「よっと」

「ぐふっ！」

止まることが出来ないまま宙を回転し、勢いよく地面に叩きつけられた風魔の首に手刀を添える。

「センサー」

「え、あ！そこまで！」

一瞬理解が追いつかなかった監督役の教師が、訓練終了を告げる。

「さて、キンジでも見に行くとするか」

まあ、さっきヒスってたし勝つに決まってるけどな。

……今考えれば、そのまま立ち去ればよかった。

しかし、その時は絶対どうかしてたんだと思う。

「これは独り言だがな、風魔。お前は中々筋はいいみたいだし、上手くいけば化けれるかもな」

そんな風に、後ろを向いたままかっこつけて、俺はそんなことをほざいてしまったのだ。

だから気付かなかった。

風魔陽菜の、先ほどまでは轟々と燃えていた瞳が、今は爛々と輝いていたことに。

やっぱりフラグは侮れない。

いや、これは自業自得だわ。

理不尽でござる（後書き）

武偵中の授業体系とかは完全に捏造なので、その点についての指摘は受け付けないでござる。

それでは前書きで予告していた通りにアンケートでござる。

今回は選択肢を選んでもらうパターンなのでござるよ。

めでたく一万PVを突破し、総合評価も何時の間にやら二百を超えて感謝感激雨霞なこの小説でござるが、チョイチョイっと合い間を縫って番外編を掲載して行こうと思っているのでござる。

節目節目に書いていこうと思っている記念小説。これが今回のお題なのでござる。

選択肢は次の四つでござる。

？才蔵が家を出てから武偵高に入学するまでの、バイオレンスで変態だらけな日々を描く『霧隠風雲記』

？もしも才蔵がイ・ウーに入っていたら……というIFルートが題材の『霧隠幻想録』

？いろんな漫画や小説の世界に才蔵を飛び込ませ、ダイジェストで一話完結な短編集『霧隠旅日誌』

？上記よりももっといいアイデアがあるでござる！

上のどれか一つを感想とともにバンバン送ってほしいのでござる。
締め切りは才蔵が武偵高に入学するまででござる。ご協力よろしく
でござる。

では今回はこの辺で。ドロン！でござる。

平和が一番でござる（前書き）

気付けば総合評価が三五〇、お気に入りは一二〇を超えてたでござる。

いつもありがとうございます。これからもよろしくでござる。

今回は微妙でござるゆえ心して読まれよ、でござる。

平和が一番でいざる

突然だが今回は趣向を変えて、霧隠才蔵の休日を覗いてみようと思う。異論は認めない。

（AM 4・・00）

彼の朝は早い。

陽も昇らない早朝に眼を開けると、天井から飛び降り、ボロボロのアパートの部屋を出て屋根に飛び上がる。

忍の力を生かして高額の謝礼を得、年収ではすでにかなりの額を溜め込んでいる彼がこんなところに住んでいるのは、別にケチだとかそういうことではない。

前世では一万円札の存在すら親友に見せられるまでは都市伝説の類と信じていた彼は、自分で稼いだものとはいえあまりの生活水準の変化に耐えられず、十数年たった今もほとんどを銀行に預け、必要最低限だけの金で生活しているのだ。

ようするに貧乏性なのである。

とにかく、アパートの屋根に上がった才蔵は、大きく深呼吸し爽やかな朝の空気を吸い込んだ。

まずは修行場である近所の山まで行くために、屋根から屋根へ、電柱から電柱へ、電線から電線へと飛び移っていく。

しかしただ移動するだけでない。

飛び移りながらも一切の着地音を立てず、電線を揺らさず、気配を流れて行く周囲と常に一体化させる。

気配をただ断つだけでは、空間に一箇所だけ何もない空間が出来る。

気配を断つというのは、完成した絵画が描かれたキャンバスの一部をのみで強引にくり抜くような行為なのだ。

それゆえの同化。絵の上からそっくりの贋作を重ね合わせる。

しかし所詮は紛い物。気配に聡い動物すら騙せる才蔵を以ってしても、決して本物には至らない。気付く者は気付く。だからこそ今日も彼は鍛え続けるのだ。

山頂の木々に覆われた場所に、不自然に開けた場所がいくつもある。

まるでそこだけを除草や剪定したように、きれいなドーム状の広場。

その近くの林の中で今才蔵は動いていた。

手刀を構え、ただ振り抜く。

ただ早く、ひたすら速く、どこまでも疾く。

筋肉を、筋繊維を、関節を、神経を、全てを同調させて同時に操る。

才蔵は神からもらった「青天井の身体能力の伸び」をさらに有効活用するため、満遍なく鍛錬しつつも、四肢は一点を特化するように別メニューを組んでいた。

いくら伸びは無限でも時間は有限。自分は不老でも、まして不死でもない。精神と時の間がある訳でもない。

だからこそ器用貧乏で終わらないようにしようとしたのだ。

その一つがこれ。とことんハヤさを追い求め続けたその両腕は、今では厚さ数cmの鉄板すら切り裂けるほどになっていた。

比喻ではない、正真正銘の手刀。

真の武道家がたどり着く極地の一つをこの齢にして成し遂げたのだ。

ただの才能では言い表せない、血のにじむ努力の末の業。わざ

しかし彼はそれを驕ることも誇示することもなく、まだ足りないと言わんばかりに貪欲に修行を続ける。

（AM8..00）

ほどよい疲れを感じたところで修行を切り上げ、近くに流れる川で汗を流す。

無理が祟れば何が起るかわからない。だからこそ彼は己の身体が悲鳴を上げる寸前で留めるのだ。

川で行水するのは忍者とかそんなではなくただの節約だが。

行きと同じように周囲と一体になりながらアパートに帰った才蔵は、冷蔵庫から材料を取り出し朝食の準備を始める。

ラジオから流れる音楽に合わせ、調子っぱずれな鼻歌を口ずさみながら野菜を切り刻む。

彼は無自覚に重度の音痴である。

（AM9..00）

ピンポン！

弾むように軽快なチャイムが鳴る。

ちょうど卓袱台に配膳を終えた才蔵が呆れたような顔をしながら、動作とともにギィギィ音がする玄関を開ける。

そこには一年前初めて出会った時と変わらない、ポニテだかチョンマゲだかわからない髪型をした凛々しい顔の少女。

眼の下に薄く隈をこさえた彼女は、ニツコリと笑ってこうのたまうのだ。

「ご相伴に預かりに来たでござるよ。師匠」

「何度も言うがウチは食堂じゃねえんだぞ、風魔」

「もちろん金は払わないでござるからなってアタツ！ちよ！いた、痛いでござるよ師匠」

胸を張ってなぜか誇らしげな風魔陽菜に、容赦のないデコピンラッシュが降り注ぐ。

しかし何だかんだで女の子に甘い才蔵は、嘆息を付きながらも額をさすりながら涙目になっている彼女を部屋に上げるのだった。

S i d e 才蔵

何でコイツがうちに飯をたかりに来てるのか、分からない人もいると思うので説明しよう。

ことの発端は忘れもしない一年前。

どう考えても黒歴史認定なカッコつけ発言の次の日、いきなりコイツは俺の教室に強襲を仕掛けてきた。

そして何を言うかと思えば開口一番、

『拙者を鍛えて欲しいでござる、師匠！』

だ。

自分で蒔いた種とはいえとんでもない厄介者の登場に、思わず頭を抱え込んだ俺は無言で三人に肩を叩かれて慰められた。

弟子入り？

もちろん即答で拒否ったさ。

何が悲しくて赤の他人の面倒を見なきゃならんのだ、と。

しかしそれから奴は、俺の行く先々に出没した。

バイト先のコンビニに何時の間にか同じシフトが組まれていたり。

商店街に行けば配られたティッシュに一枚ずつ『弟子にしてください』と書かれていたり。

学校で常に視線を感じるのになぜか発見できなかったり。

果ては郵便受けに毎日書状が入っていたり、とギャグ補正の恐ろしさを身を以って感じた俺は、平穏な日常（なんて武偵な限り少ないが）を取り戻すため、仕方なく彼女を弟子のようなものにしたのだ。

ようなもの、というのは、別に直接指導したりするわけではなく、赤貧の彼女に休みの日だけだが飯を食わせたり、比較的簡単な諜報の仕事を斡旋したり程度しかしてないからだ。

そも、俺の修行方法は人間には無理なものばかりだ。まあこう言うと自分が人外だと言外に言っているようなものだからアレだが。

なので、俺は修行を見てやることなんかは出来ない。それに今は廃れたとはいえ元々風魔は伊賀や甲賀と敵対していた忍。

それに行ったこともないが形式上伊賀者である俺は、忍者としての

干渉するものかどうかと思うわけだ。

まあ、ひとまず言えることは。

「おかわりでござる！」

「ちったあ遠慮しろ！」

こいつに『自重』の二文字はない。

くAM9..30く

「ごちそうさまでござる」

「.....お粗末さまでございやした」

「では師匠。拙者は今日も修行に参るでござるよ」

「おーおー、いってらー」

ちなみに風魔が言う修行は大体がバイトを意味する。

中学生がバイトって果たしていいのだろうか。いや、別に俺が言えた義理じゃないけど、と、才蔵は思索にふけてしまった。

と、いうよりも仕事が入っていない休日は、朝の修行以外一切家の外に出ないのが才蔵だ。

外に出ず昼から次の朝まで眠りこける。こうすることで食費を浮か

そうという、二重の意味で何とも不健康極まりない生活を送っているのだ。

（AM10：00）

やがて『どうでもいいや』と結論に達した才蔵は、朝と同じように天井に逆さまに立つと、そのまま眠りについた。

霧隠才蔵十五歳。

休日の活動時間は二日合計で十一時間である。

これは、何でもない休日的一幕。

平和が一番でござる（後書き）

どう見ても風魔さんストーカーでござるな。陽菜好きの皆さんごめんなさいでござる。今後は普通に返るので安心して欲しいでござる。

さて、今のところ番外編に関してのアンケートの途中経過はご覧の通りでござる。

？

？ 1

？ 1

？ 1

なかなか来ないでござるよ。感想は書かずに番号だけでもいいので、ジャンジャン送ってほしいでござる。

アンケートの詳しい内容は前話の後書きに載っているゆえ、参加する気になった方はご確認どうぞでござる。

アンケート終了の中学卒業まで、あと四、五話程度でござる。

忍術アンケートもそろそろ締め切ろうかな？と現在思案中でござる。

原作介入まではまだ遠い。ってわけで、また次回でござる。

いざ逝かん入学試験でござる（前書き）

真剣で今回はギリギリでござった。投稿したのが十一時五十九分でござる・・・・・・。

とにかくこれで、今夜は徹夜でフィーバーでござる。

ではどうぞでござる。

いざ逝かん入学試験でござる

受験当日、俺とキンジは東京武偵高校にやって来た。

やはり、地元を離れてここまで来る奴というのは、俺たち以外にはいなかったらしい。

キンジはヒステリア・モードを知る人間がいなかったところに行きたかったから。

俺？だってどうせ神が介入してくると思ったからな。自分から受けたよ。クソツタレ

ちなみに受験科目は俺は忍者っぽい諜報科レザドで、キンジは金一さんに憧れ強襲科アサルト。

閑話休題。

そして、俺たちはお互いに受験する科の会場に向かおうとしていた。無駄に長い廊下を歩く俺たち。この先の突き当たりで分かれる予定だ。

しかし廊下の四分の三に差し掛かった辺りで、一人の少女とキンジが衝突した。

しかもさすがはラッ^{キンジ}キースケベ!!

たわわな双丘に顔をすっかりうずめるといふ、一般人がやれないことを平然とやってのける!!

そこにムカつく!! 殺意沸くう!!

あーあー、女の子泣きじゃくってるよ。そんなにキンジに触られて嫌だったんだねえ。

そうだよ。これこそまともな反応だよ!

どいつもこいつも顔赤らめやがって!!

怒りをフツフツと滾らせながらふと見れば、少女の来た方に何かめんどくさそうな男三人が現在痴漢現行犯のキンジをしっかりとらみつけている。

男の一人と眼が合ったので、何となくサムズアップしておいた。性犯罪者はみんなの敵さ!

「おい、兄ちゃん。その子を渡してくれよ」

「そうそう、今から俺たちと楽しい用がアンだからよお」

「何なら見せてやってもいいけどな! ヒヤハハ!」

む、性犯罪者は向こうだったか。あまりにキンジがムカついて気がつかなかったじゃないか。

そんなDQN君たちを尻目に、しっかりな^いったキンジは、泣きじゃくる少女に何か声をかけた後、立ち上がってそいつらを見据えた。

「ンだよ？やるのか？」

「お前らみたいなモヤシっ子はどうせ情報科とかそんなんだろ？俺たちは強襲科だぜ！」

後ろに志願が付くだろ志願が。

ま、俺は先行ってるか。諜報科の試験は始まるのが強襲科より早いし。

「というわけでお先ー」

「何が、というわけかはわからないがここは任せていいさ。もうすぐ時間だろ？」

「あざーす」

後ろ手を振りながらDQN君たちを抜き去り、俺は会場に向かった。

ま、今のアイツに勝てんのなんて、ここにいる生徒では俺くらいだし無問題無問題。
モーマンタイモーマンタイ

「時間ニナツタカラ入学試験ヲ始メルヨ！！受験番号三十番ズツ建物ニ入リナサイネ」

おー、皆パニくってるパニくってる。目の前^ににいるチャン・ウーに

気付けないか。まあ、Sランク武偵でも下の方の奴には見つけれないだろうな。こりゃ。

「ハイ次八九十一番カラ百二十番デスヨ！早く集合シナサイ！」

気付けばいつの間にか順番が巡ってきた。指定された建物は小さなプレハブ小屋だった。

「ハイ、皆入りナサイ。急ギナサイヨ！！」

言われたとおり、三十人が入ってもまだ少し余裕がある教室くらいの大きさの小屋に入る。

そして全員が入ったとたん、扉からガチャっというロック音。続いて四方からのガス噴射に、慌てふためく受験者が続出した。

無理も無い。ここにいる受験者など、いくら優秀だったとしても初戦は中学同級生内での優秀。要は士官学校の上位者をいきなり戦闘最激戦区に裸一貫で放り込むようなものだ。

だが俺は違う。幼いころから鬼畜な両親、というか母にしごきにしがかれあらゆる場面を想定したスパルタ修行を課せられ、小学生のころからアメリカ大陸を飛び回ってきた。

さらには多くの薬物・毒物への耐性もついている。今噴射された睡眠ガスなど欠伸すら出ない。

だがここはあえてガスが効いたフリをしておく。自由でありながら、不自由な大多数に混ざることとどんな状況にでもアドバンテージを作れるようにだ。

完全な脱力をし、眠りとまったく同じ状態に体を持っていく。今の俺は機械さえ使われなければ完全な睡眠状態だ。

するとしばらくして扉が開け放たれ、眠っている受験者はリアカーに寄せられてどこかに運んでいかれた。てかりアカーて!!

やがて俺も寄せられ、数分くらいの雑居ビルといった感じの十階建ての建物の一室に入れられた。その時両手両足も縄で縛られた。

ガスが元々弱かったのか順番に目を覚ましていく受験者。すると、試験官を名乗る男の受験内容の説明が、備え付けのスピーカーから流れてきた。

簡単に要約すると、諜報科の入試課題は捕縛された状態からスタート。

俺たちがいる、窓のない建物のどこかの部屋に隠された金庫内のカードを手に入れ、すみやかに脱出するというものだった。

障害として、二十人の試験官が仮想敵として階をランダムに徘徊している。

しかし強襲科と違い彼らをいくら倒しても合否に関係は一切無く、いかに早く部屋を見つけ、いかに迅速に金庫を解除し、いかに早く脱出できるかだけがポイントだ。

さらに言外に定められたルールも見つけた。ま、言われてないけどやりますよ。俺は偽善者でもお人好しでもなんでもないんで。

そして、ようやく全員が落ち着き内容を理解したところで任務開始。ミッションスタート

多くのものが縄抜けを試みるが、存外キツく、もがくだけで終わっている。

「さて、チャツチャと終わらせて寝るか」

そう呟いて、両手首の縄をスルリと外す。周囲が驚いているが、この程度は初歩の初歩。縛られるときに少しだけ手首を動かして隙間を作ればいい。

だが、今回は寝たフリをしながらという制約があったので、やや手間取ったがな。

両手が解放されれば足の縄は手刀で切れればいい。立ち上がって大きく伸びをする。

では言外ルールを実行いたしましょうかね。

俺に、縄を外せだなんだのたまう芋虫状態の奴らをグルリと一瞥し、俺はこう宣告する。

「お前らにはここで退場願おう」

建物への侵入でもっとも大事なのは、目的を達成するまでは決して素性をバラさないこと。

かと言って、服装だけを似せても、見たことの無い顔には多少の差

あれど違和感を抱くのが人間。

ではどうするか。

簡単。顔も似せればいい。

というわけでようやく初披露。真庭忍法・骨肉細工！！

試験官の背後を天井から襲い、服だけ奪ってそこら辺の小部屋に放り込んでおき、骨肉細工でそいつに変身した。

もちろん変身の様子を見せるわけにはいけないので、そこらにあつた『目』は先に潰しておいたぞ。

「ん？お前どうしてこんなところにいるんだ？」

四階でついに敵にエンカウント。だがここで表情を変えず、自然体で、自分は間違っていないといった態度で接する。

「何を言ってるんだ。これから金庫のある階と交代だったじゃないか」

「え？ああ、そうだったのか。悪いな」

「気にするな。頑張れよ」

「そっちな」

まったく気付かれることなく別れる。欲を言えば金庫のある階を教

えて欲しかったんだが……まあどこかで分かるだろう。

金庫があつたのは八階の手前の部屋だった。かかった時間は大体九分といったところか。

金庫はダイヤル式だったがそんなのはお構いなしに手刀で切断。中からカードを一枚取り出し、他は細切れにしておいた。受験生としてはアレだが、諜報員としては常識だ。

「もう任務も完了^{ミッション}したし、派手な音立てても問題ないよな？」

そう。それが、俺が今まで建物を破壊しながら金庫を探さなかった理由。

正直そっちのほうが何倍も早いが、実際に潜入してそれしたら、もう二度と上客の依頼なんて来なくなる。

だが、成功したら基本建物は脱出した後爆破だろ？

イギリスのジェームズ見てしろ！あの人が建物壊さない回なんて見たことないぞ！

まあ、そんなこんなで。

「一発入魂！俺の豪腕右腕の腕前を見やがれ！！」

キンジ辺りなら「腕って三回言ったぞ！！」とか突っ込んでくれるだろうな。なんて考えながら、俺は外と仲を隔てる壁を破壊。後は悠々と側面を歩いて帰還した。

「オー帰ッテ来タネ。ジャアカードヲ見セテ頂戴？」

「これだろ？」

そう言って俺は、チャン・ウーがいる方向にカードを掲げる。

「……………サスガハ“Rランク”武偵の霧隠クンダネ。私ノ隠業モ効果ナシトハ……………」

「おろ？知ってたのに入試受けさしたのか？趣味悪いなあー」

「米^{ステイッ}国デ知ラヌモノナシノ最強武偵、『雷^{イヴァン}帝』ノ才蔵ノ実力ヲ拝見シタカッタノヨ」

「それでご感想は？」

「敵イツコナイ、ダネ。ソレニシテモ米^{ステイッ}国デハナク、東京^{ニホン}ニイルナシテネ。願書ノ名前ヲ見ツケタトキハ、教務科ガパニックニナツタノヨ？」

「あらら、中学じゃバレてなかったんだけどなー。無理とは分かってるんですが、黙ってちゃもらえませんか？」

「無理ヨ」

ダメ元とはいえマジで頼んだんだが、バツサリと断られてしまった。

「セツカク世界ニ八人ダケノ天才ガイルノニ隠ス必要ガナイワヨ。将来有望ナ学友ノ励ミニスルタメヨ。アキラメナサイ」

「へーい」

これで高校生活は騒がしくなること間違いなし・・・・・・・・か。はあ・・・・・・・・。

「トニカクコレデ君ノ試験ハ終了ヨ！今更必要ナイカモダケド一応言ッテオクヨ」

そう言っで一度、チャン・ウーは言葉を切り、

「ヨウコソ！！東京武偵高へ！！」

こうして俺は、危なげなく入学の切符を手に入れた。

聞いた話だと、キンジはキンジで無双してたらしい。後々思い返しては頭を抱えていた。

ざまあ。

いざ逝かん入学試験でござる（後書き）

アンケートの途中経過は下の通りでござる。

? 2

? 2

? 3

送られてきたのを見て、四番は本編に組み込んだほうがいい、と思ったので、次から送るときは番号ではなくただアイデアとして送ってくれればいいでござる。

そして、予定では後二話でようやく入学!! アンケートも同時に締め切るので、早く送っていただけるとありがたいでござる。

ではでは。

七月二十五日改訂

打ち上げでござる (前書き)

定期テストが近いので、昨日徹夜でストックを五つ書き溜めたでござる。

ストックを作るのは初めてでござる。

もしかしたらどこかで更新が途絶えるかもしれないでござるが、その場合は待ってほしいでござる。

打ち上げでいやる

「――飲み物は持ったか？トイレは済ましたか？親に泊まりの連絡は？では！神奈川武偵高付属中三年D組一同！卒業と入試全員第一志望合格を祝して！！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

俺の音頭にあわせて、総勢三十八人のグラスが掲げられる。

今日は四月二日。

先日の合格発表で、奇跡的に第一志望を誰一人落とさなかったD組三十八人は、クラスメイトの家が経営するホテルのパーティー会場を貸しきっての豪華な打ち上げを行っていた。

「しかし全員受かるなんて、世の中わからないな」

隣に座ったキンジが、コップに入ったウーロン茶を啜りながら呟く。

「まあ珍しいだろうけどいいんじゃないか？めでたいことだし」

「それもそうだな」

「おーい、霧隠え！遠山あ！ビンゴやるからカード取りに来いよ」

高橋が、ビンゴカードを上で振りながら俺たちを呼んでいる。キンジの分も俺が受け取ってきてキンジに渡す

「はい」

「サンキュ」

「全員持ったな！今回の商品はすげえぜ！綾小路が提供してくれた豪華商品てんこ盛りらしいぞ！」

「」「」「」「うおおおおおおお！！」「」「」「」

高橋の言葉に、部屋中が沸く。綾小路はこの会場を提供してくれた令嬢で、たしかパリ武偵高に留学するとか言ってたっけ？

「おーっほっほっほ！高貴なる私に感謝をするといいですわ！！」

お聞きの通りの高飛車お嬢様だ。俺的にはお嬢様は凜としたタイプが至高だと思っているんだがな。

「綾小路iiiiiiii！一生ついていっくぜえええええ！！」

「ではひれ伏しなさい！！」

「ははー！！」

言われるがままに頭を下げる高橋を見て、呆れるやら悲しいやらだ。

「馬鹿だな……………」

「そうだな……………」

「「はぁ・・・・・・・・・・」」

「さぁ、気を取り直しも「お前のせいだろうが」うるさいっ！！・・・
・・・ごほんっ。では、これから番号が書かれた玉を引いていく
から、ビンゴした奴は申し出てくれよ！」

そう言って、高橋がガラガラを回す。

カラン

「えーと、56！」

「あった！」「惜しい！57だったら！」と、一個目から皆のテン
ションが上がっていく。

「っと・・・・・・・・お、あったあった。56っと。キンジに佐藤、
お前らはどうだ？」

両隣に陣取る二人に問いかける。

「俺はないな。まあ、まだ一個目だしな」

「我輩もないぞ」

「拙者もないでござる」

「そうか・・・・・・・・お、次が来るみたいだぜ」

「・・・・・・・・気付いているなら、無視は止めて欲しいでござるよ・

「……………」

「いや、そもそも何でお前がいるんだよ」

「うおっ!!ふ、風魔!?!」

「何時の間に!?!」

「ふふん。愚問でござるな師匠に先輩方!タダで豪華なでいなーを
ご相伴に預かれるとあれば、拙者、ホテルの会場警備程度、余裕で
掻い潜ってくるでござる!!」

「うん。それ犯罪な」

「い、痛、イタタタ!!グリグリは痛いでござるうゝ!!」

「ま、まあまあ、どうせ一人や二人増えても変わらないだろ」

「……………たく、大人しくしてろよ」

「無論でござるよ」

「さあ、突然の乱入者だが気にせずドンドン行くぜえ!!続いては
――」

「ビンゴだ!!」

「記念すべき一人目は梅波羅だあ!!」

寿司屋の次男坊で、神奈川武偵高に通う予定の紳士同盟の一人、梅波羅が名乗りを上げる。

紳士同盟とは、俺、太刀花、梅波羅の三人が別のクラスだった一年のころから結成した、明るく健全なエロティシズムを探求するための秘密同盟だ。

具体的にはお宝本の貸し借り仲間だ。

「さーて、お宝本の軍資金になるものはあるかね？」

壇上に上がる梅波羅。売る気満々だな。

「さあ、次の中から好きな景品を選んでくれ！」

そう言って、ダンボールを見せる高橋。

・・・・・・。ダンボール？

「おうよ！・・・・・・ん？なっ・・・・・・なっ・・・・・・！」

「う、梅波羅、どうしたの？」

突然動きが止まった梅波羅に周囲がざわめく中、梅波羅の相棒で一コ上に銚島先輩という美人な彼女さんを持つリア充紳士、太刀花が何事かと問いかける。

「ふ、ふふふふ、ふははははは・・・・・・！！」

「うわぁ！梅波羅が壊れた！！」

「なあおい、高橋。少し聞いていいかい？」

静かな中に憤怒の炎を燃やした梅波羅に、高橋は汗を流しながら頷く。

「これを用意したのは、綾小路さんでいいんだよね？」

「あ、ああ……」

「その通りですわ！！私がこの世で最も素晴らしいと思うものを提供させていただきましたわ！！」

「貴様！！これを見せ付けるためだけにこの企画を開いたのかぁ！！」

「これ？は？……って、血涙！？」

要領得ずといった様子の高橋を、梅波羅は血の涙を流しながら睨み、景品が入っているダンボールから何かを引っ張り出す。

「お前ら、これを見ろ！！こいつは……こいつは……、こいつは……、俺たち独り身をずっと影であざ笑っていたんだ！！」

そう叫ぶと同時に掲げられた物体。

「？何だ……アレ？」

「ピンク色のクッション？梅波羅の奴、何をそんなに……」

一同は一瞬何かわからず、

「ちょ、ちょっと待て!! あ・・・・・・・・あのプリントは・・・・・・・・
・何だ?」

ようやく事態の重さに驚愕し、

「う・・・・・・・・嘘だっ!」

しかし辛い現実を認めたくなく、

「俺だって・・・・・・・・俺だって認めたくなんかねえ!! でもよ・
・・・・・・・・これは真実なんだよお!!」

だが現実には容赦なく襲い来て、

「ふ・・・・・・・・ふふふふ」

「・・・・・・・・。ああ、理解した」

「わかったよ。認めるさ」

ようやく彼らは認めた。

「」「」「死ねや高橋いいいいいい!!」「」「」
「」

「え? ちょ、ま、何がなんだか、って、うわなにをするやめ・・・・
・ぐわああああああああ!!」

あっという間に人の波に蹂躪される高橋。俺たちの角度からだが見えなかったんだが……何を見たんだ？

そう思っていたら、例のピンクのクッションが飛ばされてきて、丁度佐藤の腕に収まった。

「うおっと。どれどれ何があったのやら……おいおい待て待て……」

急に素の口調に戻る佐藤。その原因を俺も覗き見て……驚愕した。

「た……高橋が！」

「あの、性欲の化身にして、幾たびの合コンで不勝の、“あの”高橋が……」

「「綾小路に頬チューされている……だど!?」」

そう。そこには、ハートマークに囲まれた、真っ赤な高橋とその頬にわずかに顔を赤らめながら口づけをする、初心感満載な綾小路の姿があった。

「……佐藤」

「……霧隠」

「「やるぞ!」」

「あ、ちょ、お前ら!!」

「し、師匠!？」

キンジと風魔が後ろで何か言っているが、そんなの知ったことか。

「あ、お前ら! 助けに来てくれも、え? 何その棒手裏剣? え? 何そのメス? いや、ちょ、待て! 話せばわかー! ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

後ろでは、ジゴロとリア充がただただ静かに合掌していた。

【現在の死者数…一名】

「気を取り直して、今度はカラオケ大会行くぜ!!」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「俺がルーレットにダーツを投げて、名前に当たった奴が歌え!!」
真ん中は立候補制だ!!」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

突然の級友の死の悲しみを乗り越え、次のプログラムへ移る。

「いや、殺したのお前らだろ」

キンジが何か言ってるが華麗に無視する。

司会は突然の不幸で気絶中の高橋ただのしかばねに変わり、俺になっている。奴は綾小路カノジヨが付きっ切りで看病しているらしい。死ねばいいのに。

「さあ、トップバッターは誰になるかな？ 風魔、回してくれ」

「承知」

俺の言葉に合わせて、アシスタントの風魔がルーレットを回す。

「パージェロ！パージェロ！パージェロ！」

「いや、これ友達公園じゃないからな！」

「やつ」

トスッ、と音を立て、ダーツが刺さった。真ん中じゃないな。

「先鋒は………守条先輩でござる！」

風魔が当たった名前を発表する。

「お、俺！？ トップバッターかよ………」

キンジと双壁を為すフラグメイカーにして三バカデルタフオースの一角である守条に白羽の矢が立った。

「にゃー。さすがカミヤン。一番気恥ずかしい最初に当たるとは」

「だが安心は出来んよ。カミジョー属性は歌でも発動するはずや！」

「いや、何だよ属性で。んなもんあるわけが、うおわ！」

「わっ!!」

土美門と青ピの野次に辟易としながら壇上に上がろうとした守条が、急に配線コードに躓いて転んだ。

そしてそのまま近くの生徒を巻き込んで……

ドガッ!

「つてて、だ、大丈夫……」

むにゅ

「ん? 何だこれ？」

むにゅむにゅ

「んあ」

「へ? んあ? つて……ふ、落寄さんんんんん!？」

「か、守条……アンタねえ……」

「やっぱりカミジョー属性の前には誰も勝てないのか!？」

「あの鉄血宰相落寄までもが毒牙に!!」

「貴様は・・・・・・・・卒業してまでこれかああああああ!!」

「そげぶううううう!!」

「はぁ・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・」

シューと音を立てて沈む守条。俺たちが手を下すまでもなかったな。

「じゃあ飛ばして次行くか」

「「「「「おー!!」」」」」

「切り替え早っ!!」

キンジよ。このクラスで切り替えのスキルは必需品だぜ？

「じゃ、俺が歌うか」

「意地でも止めろおおおお!!」

「「「「「サー!! イエッサー!!」」」」」

「な、何だ!?! は、離せ! たまには俺にも歌わせろおおおお!!」

「「「「「させるかああああああ!!」」」」」

【現在の死者数..二名】

そして数時間後。

たくさん企画されていたプログラムも全て終わり、後はひたすら飲めや食えや……だったんだが……

「どうしてこうなった……」

「むふふうー！じゅーいひべんサトー！！どじょーすくだぞ！」

「いいぞー！！」

「ジョッキいきまーひゅー！！」

「いーつき！いーつき！いーつき！」

「ぎやははははははは！！」

「さあ、高橋！！わたくひの足をお舐めなひゃい！！」

「よろこんでえ！！じょおーさまー！！」

「だからあー、もいひませんぺいが世界で一番かわいーんだよ！！」

「何馬鹿なこといつてるにゃー！！義妹こそが至高なんだぜい！！」

「あはははははは！！おんなのこはみーんなまほめて僕のところにおきなさい！！あはははははははは！！」

「ZZZ……ししょー……ZZZ」

「うえーん！！離れたくないよおおおお！！」

「わらひもおおお！！」

飲み物に酒があったことから、こんなカオスに。

てか、土美門！！お前絶対素面だろ！！口調はつきりしてるじゃねえか！！

「結局こうなるんだな……………」

「ああ、キンジ。お前も無事だったか」

「ああ。酒には強いんだよ」

「これは目が覚めたら大惨事だぞ……………」

二日酔いとか吐き気でな。

「はは、かもな」

「ま、こんなことになったんだし、とことん飲むか？」

「……………まあ今回くらいは付き合うぜ」

そして顔を見合わせて笑いながら、俺たちは静かにグラスを煽るのだった。

【最終撃沈数…三十七名（内一人部外者）】

打ち上げでござる（後書き）

燃え尽きたでござるよ・・・・・・・・真っ白になでござる・・・・・・・・。

そして予定が変わって次話で武偵高入学でござる。

そこで番外編のアンケートは今日五月十五日の深夜二十三時五十九分が締め切りでござる！参加してくれる方はお急ぎくださいでござる！

今夜までなので票数は隠して、どんな内容だったかを載せておくでござる。

？高校入学までの裏話

？イ・ウーに入ったらのIFストーリー

？様々な世界に飛ばされまくる短編集

ではまた明日！

新しい出会いでござる（前書き）

アンケートの結果は後書きにてでござる。

新しい出会いでいゐる

『入学試験の結果

課報科 一年 霧隠才蔵

所要時間 9分46秒／180分

660名中 1位 ランクR』

『入学試験の結果

強襲科 一年 遠山キンジ

捕縛人数 教官5名／5名 受験生26名／26名

729名中 1位 ランクS』

「あれが、あの？」

「強襲科期待の新人だろ？^{ウチ}蘭豹^{ランビョウ}がめっちゃ嬉しそうだったぜ」

「抜き打ちで潜んでた教官まで捕まえたって奴だろ？聞いた聞いた」

「じゃあ隣は……って、アイツ見たことあるぞ！！」

「う……嘘でしょ！？^{ロイヤル}Rランク武偵の霧隠様！？中学生だったの！？」

「たしかブツシュのボディガードだった奴だろ！？オバマの横にいないと思ったら、こんなところにいたのか！？」

「今年の一年はどうなってやがるんだよ!？」

「はぁー・・・・・・・・・・」

今朝はずっとこの調子だ。

今日は東京武偵高の入学式。そのため体育館に向かってたんだが・・・・・・・・。正直先輩や同級生の奇異の目が鬱陶しい。声かけてくるのはもっと鬱陶しい。

「にしてもお前、Rランクなんて聞いたこともないランクの武偵だなんて知らなかったぞ」

キンジが不満げにそう言ってくる。俺が黙っていたことが気に食わないんだろうか。

「俺はあくまで普通の中学校生活を送りたかったんだよ。そんな世界で数人レベルだなんて知れたら、俺に平穩はなかったろ?・・・・・・・・今みたいに」

「・・・・・・・・そうだな、すまん」

「はぁー・・・・・・・・・・」

と、いつの間にやら体育館に着いてたな。

「にしてもデカいなあ」

「そりゃ何千人も入れるわけだからな。あ、C組こっちだから」

「A組はこっちか。んじゃ、また後でな」

それぞれが所属するクラスの列に向かうのだが、その途中にも何人にも声をかけられた。一応体裁は大切だから笑顔で手を振っているが、正直勘弁して欲しい。

「A組の……お、ここか」

二列ごとに並べられた座席に座る。まだ俺の周りは来てないみたいだ。近くだと嫌が応なしに会話しないといけないのでこれはありがたい。。

すると、横から肩を叩かれた。

「ん？」

「失礼。通してもらっていいかな？」

見れば、俺の足が通路を塞いでいたようだ。それを詫びてソイツを通す。

「ありがとう。僕は不知火亮、東京武偵高付属中出身で専科は強襲^{アサルト}科だよ。君は？」

「不知火君な。俺は神奈川武偵高付属中出身の霧隠才蔵。諜報科^{レザード}だ」

「不知火でいいよ。……それにしても、霧隠って……
・」

「あー、たぶん不知火が考えてる通りの“霧隠”だ」

俺がそう言うのと、俺の隣の座席の爽やかイケメン、不知火は得心がいったとばかりに頷いた。

「『雷帝』……世界に八人のうちの一人が隣にいるなんて、凄い確率だ」

「……お前は騒ぎ立てないんだな？」

「それでも凄く緊張してるんだよ？でも君も疲れてるみたいだしね。僕まで騒いだら休めそうにないし」

「お前はすごい奴だ。親友に慣れそうな気がする。末永く仲良くしようぜ、不知火」

「凄く光栄だよ。こちらこそよろしくね、霧隠君」

そして、どちらともなしに手を差し出し、握手をしたのだった。

「ま、まさか初日にもうカプが出来るなんて！！」「シラ×キリ！？それともキリ×シラ！？」「ああ見えて、亮様は鬼畜攻めだったりして！！」「あるいは亮様のDS受けか！」「でも、才蔵君も意外と激しそうだし……」「な、何て柔軟性に富んだカプなの！？」「我ら腐偵連合に新星現るだわ！！」

アーアーきこえない（〇。Δ。）

「末永くとは言ったがそういう意味じゃねえぞ！俺が好きなのは女の子だからな！！」

「は？うん。僕も女の子は好きだよ」

「そう！だから俺たちは“友達”だ！！わかるよな！？」

「そ、そうだね。何でそんな剣幕なのかはわからないけど、友達のつもりだよ」

「よし！あ、そろそろ始まるみたいだな」

話はそこで切って、もうすぐ始まるであろう入学式に備えた。備えるっていうのはどうということかっていうと……。

Side 不知火

『雷帝』の才蔵

この二つ名を聞いたことがない生徒は、おそらくこの体育館にはいないだろう。

曰く、ブッシュ前大統領の懐刀

曰く、米国の陸軍大隊を数時間で制圧した

曰く、世界中の国家首脳、大富豪に専属武偵の要請を受けているが拒んでいる

曰く、任務成功率120%

中学生のころから世界中で活躍する凄腕武偵。しかし、それゆえに

自分で依頼を選ぶ傲慢な男。そう思っていたんだ。

その彼は今――

「・・・・・・・・・・・・・・・・。zzz・・・・・・・・」

爆睡していた。それもどこからか枕まで取り出してね。

僕が彼と知り合ったのは偶然。

最初は、クラスメイトに彼がいるらしいという噂を聞いた。

散らばる情報から、破壊狂や傲慢といったイメージが先行していた僕は、今日百聞は一見にしかずを体感した。

人当たりのよさそうな、女性に人気の出そうな凛々しい顔立ちの好青年。

僕の席の隣に座っていた彼が、その人だったのだからね。

話してみればみるほど、噂なんて当てにならないと思った。

それと同時に、これから始まる高校生活が早くも輝かしいものになる。そんな予感がした。

S i d e O u t

「霧隠君。式は終わったよ」

「ん。あ、終わったか。あんがとさん、っと。んゝゝ」

大きく伸びをすると、固まっていた関節がパキパキとなった。

「どういたしまして。それじゃあ教室に行こうか」

「おう」

ああ、どこかにいるであろうお母様。武偵高は魔窟です。

「あー、今年一年アンタらを担任するうー、尋問科の綴ダギユラだアー。綴つづせんせえー、または、女王様と呼ぶよおーにいー」

タバコ（？）の煙を輪っかに煙を吹かす、何か目が据わってイッチヤってる女が、無気力全開でそんなことを言った。

（・・・・・・なあ、不知火？あれは本当に教師なのか？隔離収容棟から脱走してきた精神病患者とか言われても俺は信じるぞ？むしろそうだと言ってくれ。三百円上げるから）

（ははは）

（ははは・・・・・・じゃねえよ！！）

今俺は、静かに怒鳴るという高等技術を会得した。

「こらそこお。私語は慎めえ」

「申し訳ありません」

「すみません」

「その爽やかイケメンはあれだなあ、不知火亮。^{レーザー}LAMつけたS
^{ソールコム}OCOM使用。入試の評価だとバランスのいい戦闘をするAランク
武偵。お前、モテるだろう」

「詳しいですね。女性からの評価は、僕には分かりませんが」

「ふうーん。で、そっちのお前はあ霧隠才蔵——^{えもの}武装は^{エフエヌ}FNのハイ
パワーMk.？。二つ名は『雷帝』。世界中で活動するRランク武
偵で各国の首脳陣なんか顔が利く。チャン先生ご執心の新入生だ
な」

「最後のは嘘だっ！！」

「ホントホントおー。また私語したらもつとバラすぞおー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さあて、と。・・・・・・・・えーと、何だったか・・・・・・・・ああ
ー、話すことないから、今日は帰っていいぞおー」

それだけ言って、ラリってる女、綴は教室を出て行ってしまった。

「不知火・・・・・・・・俺もうヤダ」

「ははは。まあ頑張ろうよ」

「はぁ・・・・・・・・」

「昼、どこかで食べて行かない？」

武偵高の校門付近に近づいた辺りで、不知火に誘われた。

「あ、それなら一人増えてもいいか？おなちゅう同中の奴なんだけど」

「構わないよ」

不知火の承諾を得て、キンジに電話する。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。・・・・・・・・・・・・・・・・・・。・・、

『霧隠？どうした？』

「ああ、キンジ。このあと予定あるか？」

『ないが？』

「なら今から一緒に飯どうだ？今からクラスの友達と行くんだけど」

『俺が行ってもいいのか？』

「了承は得たぞ」

『そうか。なら先に行ってくれ。場所、どこだ？』

そう聞かれて、まだ決めてなかったことに気付いた。

「あ、どこだろう？」

『いや・・・・・・・・俺が聞いてるんだよ』

「不知火、どこの店行く？」

「そうだね・・・・・・・・まだどこが美味しいかなんて分からないし、無難にマックでいいんじゃないかな」

「分かった。あ、キンジ。武偵高の近くのマックに決まった」

『わかった。すぐ行く』

ピッ

「キンジって、強襲科の遠山キンジ君？」

「ああ、知ってるのか？」

「知ってるも何も彼、強襲科じゃ有名だよ。教官五人を倒したSランクだって」

「そんなことも言ってたっけな。」

「一日でRランクとSランクの武偵に知り合うなんて、普通なら人生で一度もないことだよ？」

まあ、Sランクは世界で七百人強、Rランクに至っては八人だから

な。俺一人で七千五百万分の一の確率なのか。宝くじに当たるほうが嬉しいだろ、この確率。

「俺もキンジも、ランクとか気にしない奴だし、意識することもないけどな」

そんなことを話ながら、俺たちはマックへ向かった。

キンジと不知火はすぐに打ち解けた。同じ強襲科だったのもあったと思うし、不知火は人格者で人当たりもいいから、あまり協調性のないキンジでも喋りやすかったんだろう。

寮まで一緒に帰った俺たちは、それぞれ自分の部屋に向かった。キンジと不知火は偶然にも同室だったらしい。

「さて、今後三年間のルームメイトは誰でしょう」

カードキーを差し込んで、ドアを開ける。

ガチャ

ガラーン、という音がこれほどなく似合うスツカラカンな部屋。気分は仕事から帰ってきたら妻と娘がいなくなっていたリーマンだ。

「見事に誰もいませんね。わかります」

キンジ辺りなら気を使わないで済むと喜びそうだが、何だかんだで人というのが好きな俺に、この広い部屋を一人で使え、だと？

ははははは。

「こんちくせう!!」

ああ、どこかにいるであろう親父、
アンタの息子は早くも挫折しそ
うです。

新しい出会いでござる（後書き）

結果発表でござる！！

ででででででー（ドラムロール）

ジャン！！

二番の『霧隠幻想録』に決定でござる！！

ヒロインはジャンヌなので、ジャンヌ好きな方はお楽しみにでござる。

では今夜はこれにて。

・・・・・・原作が遠いでござる。

七月二十五日改訂

部活を探すごさる（前書き）

連続投稿四日目のごさる。

今回はキャラ崩壊が尋常じゃないのでお気をつけるでござるよ。

部活を探すでござる

昼休み。俺と不知火で学食に来たはいいが、肝心の席が見つからない。どうしようかと思ったら、不知火がキンジと誰かが一緒に食っているのを見つけた。席も丁度二つ空いているようなので、声をかけてみる。

「よおキンジ、誰かいるみたいだが、隣いいか？」

「僕もいいかな？」

「霧隠に不知火か。俺はいいぞ。武藤、お前はいいか？」

「構わねーよ」

武藤と呼ばれたガサツそうな男子の了承を得たので、トレイを置いて席に着く。

不知火は相変わらず、綺麗にキンジのトレイを整えて会釈してから座るといふ人格者っぷりを余すところなく発揮している。

「武藤、でいいのか？俺はキンジと同中^{おなちゅう}で謀報科^{レザド}の霧隠才蔵だ。好きに呼んでくれ」

「僕は霧隠君と同じA組で強襲科^{アサルト}の不知火亮。僕も自由に呼んでくれていいよ」

「俺はキンジと同じC組の武藤剛気、車輛科^{ロジ}だ。にしてもキンジにこんなイケメンの知り合いが二人もいたなんてな。人は見かけによ

らねーもんだ」

「うるせえ」

さばさばしていて話していて気持ちいいし、悪いヤツじゃなさそう
だ。ただモテるかモテないかって聞かれると・・・・・・・・アレだな。

「ところで、遠山君たちはどこか部活に入るのかい？」

飯を食べながら、不知火が二人にそう問いかけた。

「いきなりどうしたんだ？まあ、俺は入るつもりはないな。武藤は
？」

「俺も同じだ。特にやりたいものもないしな」

「さっき霧隠君と話しててね。今日の放課後色んな部活を見学しよ
うと思ってるんだけど、君たちもどうかと思って」

「部活なあ・・・・・・・・見学してみたら案外面白そうなのもあるか
もしれないし、付き合ってもいいぜ」

「あ、なら俺も行くわ。どうせ今日は調整イジリしたいものもないし」

「なら、今日の放課後下駄箱前に集合な」

パーティーに二人を加え、俺はそう締めた。

「行ってみたい部活とか、お前たちあるか？」

一応全員の希望を聞いてみる。

「ない」「ないよ」「ないな」

見事なまでの統一された返答。面倒は全部俺に丸投げですか。ちくせう。

「なら適当に運動系を見て回るぞ」

頷く三人を引き連れ、俺は歩き出した。

「まずは部活の王道の一つ、野球部だな」

グラウンドに近づくと、十数人の生徒が試合形式で練習をしていた。

「霧隠君、野球はやるの？」

「やりはしないけど見るのは好きだな。中学のときはキンジとあと二人と一緒に、よく球場まで行ったりしてたしな」

「へー。俺も野球観戦は好きだけどよ、見るのとやるのはかなり違うぞ？」

「ふっ、愚問だな。武藤」

俺の余裕の態度に、武藤がたじろぐ。

「な、何だ？この自信に満ち溢れたふてぶてしい態度は！一体どこからその自信は来るんだ！？」

「何たって俺は・・・・・・・・・・」

「な、何だって言うんだ・・・・・・・・・・？」

「ドカベンを全巻読破、してるんだぜ？」

「本当にその自信はどこから来てるんだ！？その言葉の切り方もイラっとくるし！！」

「武偵憲章7条『悲観論で備え、楽観論で行動せよ』だ」

「武偵関係ないし、今の霧隠には楽観論しかないけどな！」

武藤の喚き声を聞きつけたのか、野球部の先輩らしき人物が近づいてきた。

「さっきからうるさいな。見学か？」

「連れがうるさくてすいません。ほら、土下座しろよ武藤」

「俺のせい！？てかハードル高っ！」

「武藤、うるさいぞ」

「キンジまで!! し、不知火……お、お前は」

「武藤君、たまには周りも気にした方がいいよ」

「たまには、って今日会ったばかりかだろ!？」

シャウトする武藤は放っておいて、先輩に向き直る。

「ん? お、お前は! きききき、霧隠ええええ!？」

すると先輩が汗ダラダラで聞いてきたので、首肯する。

「そうか、部活荒らしに来たんだな!？」

「え? いや、別にただ見学……」

「問答無用!! マッススライズ、カモン!」

「え、ちょ、あーれー」

先輩が指を鳴らすと、どこからともなくゴリマッチョが二人現れ、あれよあれよという間に連行されてしまった。

「勝負は三球!! ヒットさせられたらお前の勝ち、三振か三球打ち取れば俺の勝ちだ!!」

「いや、何でやらなきゃいけないんだよ」

「イケメンは黙って俺に惨めに負けて女子に失望されてろ!! (純粹にRランク武偵の力量に興味があるんだよ。はっはっは)」

「キャプテン。逆になつて逆になつて」

「うるさい! 行くぜ! 唸れ、俺の燃える左手投げ!!」
ファイアーサウスボー

「ダサっ!! ネーミングセンスダサっ!!」

あまりの酷さに突っ込んでたら、燃える球がいつの間にかミットに納まっていた。いや、早すぎるとかじゃなくて、対応に遅れたって意味で。

「先輩……SSR (超能力捜査研究科) ならそうと言って
おいてくださいや」

先ほどの火の玉ストレート。あれは誰がどう見ても超能力だ。

ほら、今もキャッチャーさんが燃えるグラブを鬼の形相で引っぺがして、必死に土をかけている。

え……アレ、毎回やるの?

「ふっ、負け惜しみを!! 第二球だ!!」

何かキャッチャーさんの目が、「お前打ち損じるかヒットにしるよ! 俺のグラブは耐火製じゃないんだ!!」と訴えている気がしたので、打つことにした。

サッとバットを構える。

「な、舐めてるのかお前!？」

そう取られるのも無理はない。俺の構えは、バットを水平に構えながら前に押し出す構え。

いわゆるなくても所謂バントだ。

「バント……霧隠君は、セーフティバントじゃないバントでもヒットに出来るくらいには足が速いのかい？」

「速いぞ。ピッチャー前のポテボテゴロでランニングホームランをできるくらいには」

「それ速いってレベルか!？」

外野が何やら言っているが、俺はヒットなんて堅実策は取らないぜ？男なら出たところ勝負。一発デカいのかまसानキなるめえよ。

「フアイア!!」

振りかぶられた左腕から放られる速球。俺はその球に水平にバットを押し当てる。

カン ↑金属バットにボールが当たる音

ヒ

↑ボールが飛んでいく音

—

ン

ポテッ ↑場外の芝生に落ちた音

キンジが驚愕し。

「あ、あれはまさか!!」

不知火が絶句する。

「伝説の……」

「「バントホームラン!!」」

「いや! 何から何までおかしいだろ!! 何で当たり前のようにおめーらは受け入れてるんだ!？」

テーテーテーテーテーテー♪

女の子の声援を浴びながら、右腕を掲げダイヤモンドを一周する。

打たれてorz状態だった先輩もいつの間にか復活したらしく、こちらに歩み寄ってきて手を差し伸べてこう言った。

「ふっ、負けたぜ。今日からお前が野球部^{ウチ}のエースだ!!」

「いや、俺野球部入らないんで」

「次は庭球部だ」

「テニスでいいだろうが」

「何か素敵やん？」

「紳助さん!？」

「来たな部活荒らし霧隠!! 野球部主将から話は聞いている。非リアの敵は俺の敵。テニス部部长の俺が相手をしよう!!」

「いや、だから俺部活荒らしじゃなくて見学なんですけど」

「いざ! さあ、ラケットを取れ!!」

「話を聞けえええええええ!!」

「くらえ、参式覇道球!!」

「ぐわぁー!!」

「部長が客席まで吹っ飛んだ!!」

「自分の覇道球はパワーアップをあと105回残している」

「貴様の覇道球だって相当に腕に負担がかかっているに違いない。
だから俺とどっちが——」

「そもそも波動球使えないだろうが!! 肆式覇道球!!」

「ぐへぁー!!」

「部長が客席にめり込んだ!!」

「ゲームセット」

「お疲れ、霧隠君。はい、タオル」

「サンキュ不知火。キンジも審判ありがとう」

「だからツツコミ入れろ!!」

「彼はディフェンスに定評のある男!! 貴様に抜くことができるか
!?!」

「邪魔だああ!!」

「かはっ!!」

「池下が弾き飛ばされたああ!!」

「俺のシュートの範囲はコート全域だ!! 左手は添えないけど!!」

「片手で放り投げるのが……シュート、だと!？」

「先生……バスケが……怖いです……」

「挟り込むように……打つべし!! 打つべし!! 打つべし!!」

「ぐ! は! ひゅ! こぺ! あきやん! きゅるっぽ!」

「ちょ! ? マジで挟れる!! 挟れちゃうから!! およそ人の口から漏れない音が出ちゃってるから!!」

「打て! 打つんだ霧隠!!」

「キンジ! ? お前は鬼か! ?」

「二通り巡ったな、霧隠」

「今日一日部活を巡ってみて、何か気になったものはあったかい？」

「そうだな・・・・・・・・」

「いや、絶対お前は部活をするな！！」

部活を探すごさる（後書き）

武藤早速アウェイでござる・・・。

次回には皆普通に戻っているでござるよ。

ではまた。

七月二十五日改訂

『霧隠幻想録』 入学でござる（前書き）

ついに掲載でござる。

最初はPV十万、ユニーク一万五千突破記念でござる。

『霧隠幻想録』

入学でござる

これは有り得たかも知れない、しかし有り得なかったかもしれない世界。

世界最強の武偵となった少年が、世界有数の犯罪者となった世界。

幾度も敵として見えた二人が、まみ師弟として強い絆で結ばれた世界。

今宵語られるは夢物語。

虚と現、真と偽の入り混じる幻想の舞台。

闇に闊歩する罪人やくしやと光を背負う武偵やくしやが入り乱れる一大スペクタクル。

さあひと時の祭典を、どうぞ心行くまでお楽しみあれ。

俺も今年で六歳。家を出て半年ほど経った年の、苛立たいほどに晴れた夏の日だった。

結局俺はアメリカには行かなかった。ようするに武偵にはならないってことだ。

まあ武偵にならないにせよ修行は大切だ。今日も今日とて日課の修練を始めようかとした俺は、修行場の山の木陰からこちらを観察するような気配を感じた。

それは、今まで感じてきたどんな気配よりも濃密な……それだけでいて純粹に巨大な強者の気配。

その瞬間、俺の中から、油断も、慢心も、過大評価も、過小評価も、全て微塵たりとも存在を隠した。

忍の心構えは『常在戦場』。

とは言っても、侍たちのような戦場の華たる戦士のそれとは同音異義。

常に正面から対峙する正々堂々を旨とする武士と違い、俺たち闇の

住人は四方八方全てが敵の巣穴。

油断はすなわち死を意味する。

慢心はすなわち死を暗示する。

過大評価は無意な疲労を生む。

過小評価は最も愚かしきこと。

いくら歴代最強を謳われていた母を倒そうとも、齢はたかだか七歳半。

未だ神に与えられた力を十全に生かすことは敵わず、体のスペックは精々が一般人の頂点。普通に生きる分には十分だが、この世界で表裏問わず台頭する気構えならば目指す頂は遥かに高い。

故の『先手必勝』！！

気配を感じた瞬間、反射的に投擲した棒手裏剣の乱れ打ち。

弾丸並みの速度で放たれたそれは、草葉を貫通して目標に突き刺さる――はずだった。

俺の投げた投擲具は空を切り裂くのみに終わったのだ。

「なっ！」

「ふむ、これはまた随分と過激な挨拶だ。礼節を重んじる日本人の変遷ここに極まれり、ということなのかな？ 嘆かわしくも時代の流れを感じてしまうよ」

聞こえた声色、目に飛び込む身のこなし、肌で感じる雰囲気、その全てに格の違ひを感じさせられる。

「しかし、君がこれほどの実力の持ち主だとは、この僕でも推理できなかった。ああ、これは実に誇るべきことだよ。しかし、ふむ、やはり君は実に興味深い」

「…………お前、何者だ？」

右手に苦無、左手の指の間に四本の棒手裏剣を持ち構えながら問い詰める。

「ああ、失礼した。どうも自意識過剰になっていたようだ。いや、傲慢だとは思わないでくれ。なにせ自分が書籍や映画でいやというほど扱われれば、君だってそう思ってしまう。自分のことは誰でも知っている、だなんてね。失礼した。では、この場に僕を紹介してくれる人がいるでもなし。自分で名乗るとしよう」

回りくどい言い方をした、二十代そこそこに見える男は、自分でこう名乗った。

「——初めまして。僕はシャーロック・ホームズだ」

……………ああ、実に、実に笑えない。俺はまだまだ未熟もいい

ところだったというわけだ。

『先手必勝』？馬鹿馬鹿しい。この男には先手も後手も関係ない。そんなことにも気付けない俺が、この男に敵うはずがないじゃないか。

勝ち目なんて、万に一つもありはしない。

イ・ウーのトップ、プロフェッショナル『教授』にして、今の武偵の原型となった世界最高にして最強の名探偵。

『コグニス条理予知』という、推理を極めることによってたどり着く未来予知紛いの能力を有する、盲目の英雄。

おそらく、いや、きっと十年、十年後の俺ならば違う結末にたどり着くことも出来るだろう。

だが今の時点での打倒は、那由多の遙か彼方、不可思議のその向こうまで可能性を追い求めても、決して手に掴むことはできない。

だからこそ、彼とは決して敵対すべきではない。

俺は静かに構えを解き、武器を下ろす。

正真正銘本物の偉人である彼が、こんな日本の片田舎までわざわざチンケなガキンチョの俺を殺すために足を運ぶことなどない……
・・・と信じたいなあ。

「まあ、汚いところだが上がれよ。どうせアンタには関係ないだろ

うし」

「あまり汚いようには思えないが、それは部屋の主が決めることなんだろうね。では上がらせてもらおうかな」

部屋に上がり淀みない動作で卓袱台へと向かうシャーロック。これだから遠慮を知らない欧米人は嫌なんだ。普通は俺が「卓袱台でも座ってな」とか言ってから座るもんだろぅが。

というかその洋風な椅子はどっから出した！！卓袱台の前に椅子とかシュールすぎるわ！！あと室内でパイプを吹かすな！！外で吸え！！

日本に欧米、というかベイカーストリートの常識を突っ込んでくる名探偵に辟易しながらも、飲み物を二つ入れて持っていく。

ドゥフフフフ！！

さあ、前世で数多、もいないわ。一人の親友を地獄に落とし続けたドリンクバー奥義最終節『特濃緑茶とコーヒブレンドの野菜ジュース仕立てなぜか不思議と麦茶のかほり』によって恐怖のどん底に落ちるがよいわ！！

「粗茶でございます」

ススッと、それこそ社長秘書くらいの恙無さで、シャーロック（おろかもん）を地獄に誘うアイテムを差し出す。

さあ、俺の掌の上で愉快に踊るがいい！！

「ああ、ありがとう」

そう言ってシャーロックは、俺のお茶を飲んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああ、夏に飲む麦茶はいいものだね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ん？どうしたんだい？ああ、僕のことは気にせず飲むといい」

思考が日本人か！というか、こいつ・・・・・・・・！！

「まさか客人を毒殺しようとしたわけでもないだろうに」

全部分かってやがる・・・・・・・・っ！！

「あ、当たり前じゃねえか」

引くに引けず、最終兵器を口元に運ぶ。

ああ、俺は今この瞬間コイツが大嫌いになりました。ちくせう。

あと、今はもう会えない友よ。今までスンマセンっした！！

「そろそろいいね？」

峠を乗り越え、十分後によやく復活した俺に、一切表情一つ変え

ずに話しかけてくるシャーロック。

「うげー、まっず・・・・・・・・・・はあ、はあ、どうぞ・・・・・・・・・・」

「単刀直入に言うかね、僕は君を入学させに来たんだ」
スカウトし

俺がイ・ウーについてや自分の素性についてを知っていると見越してか、本題から切り出すシャーロック。

「たかだか七歳のガキンチョ見習い忍者をか？」

「ただの七歳児なら、僕と対峙した途端に戦意を放棄したりはしないさ。勇気と無謀の違いを知る者にはそれなりの敬意だって表すよ、僕は」

「ならもう一つ。俺の存在をどこで知った？」

あと数年したら武偵として活動してもいいか、なんて漠然と考えていた俺は、まだ表舞台に立ったことは一度もない。いくら名探偵でも、まったく知らない人間の力量など知りはないだろう。

「老人の戯言と笑わないで聞いてくれよ。夢に見たのさ」

「・・・・・・・・・・は？」

今の俺は盛大に愉快的顔面を晒しているだろう。

世界最高の頭脳が・・・・・・・・・・夢に見た？

「敬愛する女王陛下が、臣民である僕に教えてくださる夢さ。『日

本にいる忍の末裔』について色々、ね」

「女王・・・・・・・・ねえ」

「ああ、妙に年寄り臭い喋り方をなさる陛下だったがね。夢に見ることですのような不忠をしてしまった自分を叱りたい気分になったよ」

・・・・・・・・わかった、アイツだ。

全ての元凶である神。^{デenchョー}アンニャロー、俺を主人公サイドじゃなくて敵さんに絡ませやがった！！

「できれば色よい返事をいただきたいが、どうだい？」

「知ってるかい探偵さん。断れないお願いを、日本では脅迫って言うんだぜ？」

「ふ、で、君はどうするのかな？二十三代目『霧隠才蔵』は」

はあ、と一つ嘆息をついた後、こう言った。

「以後よろしくどうぞ、『教授』殿？」

始まりがいつかと問われれば、この瞬間だと答えられる。

『教授』と『忍』が出会い、手を握ったこの瞬間。

しかし、後世の誰に想像が出来るだろうか。

大怪盗『トワイライト宵闇』が生まれたのが、日本の片田舎に建てられたボロボロの賃貸アパートの一室だ、なんてな。

『霧隠幻想録』 入学でござる（後書き）

さあ、次回はお待ちかね、番外編のメインヒロイン登場！！
お楽しみにでござる。

七月二十五日改訂

教務科からの依頼でござる（前書き）

今回の話は、鈴神さんのアイデアを元に、自分なりにアレンジしたものでござる。ありがとうございますでござる。

今回レキ初登場、そしていつもより長めでござる。

教務科からの依頼でござる

「はぁーい、HRしゅーりょー。部活のないやつはさっさと帰れよ
おー。あア、霧隠え、お前はこのあと、教務科^{マスタース}まで来るよおーにー」

「へ、いや、ちよま！・・・・・・綴iiiiiiii！！説明ぐら
いしていけやぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「ああ、ついに霧隠も何かやらかしたんだな」「俺、明日牛乳瓶と
花持って来るわ」「もし帰ってこれたら盛大にお祝いしてやるよ」

「お前ら縁起でもねえなあ！！」

「でも心当たりはないんでしょ？」

「あんな魔窟に出向かにゃならない心当たりなんてねえよ。ちくせ
う、俺が何したってんだ・・・・・・」

「まあまあ、大丈夫だって」

「そう信じるしかないんだよなあ・・・・・・ちくせう」

「ん？キンジとレキ？お前たちも呼ばれたのか？」

教務科まで出向いてみれば、キンジとその隣にB組に在籍する狙撃^{スナ}
科の麒麟児、ロボット・レキことレキがいた。

「あ、霧隠、お前たち“も”ってことは、お前もか」

「霧隠さん。はい、私もHRの際に」

「そっか、キンジとレキもか……。てことはアレか？」

そこまで言ったところで、アサルト強襲科教諭と体育教諭を兼任している、昔は香港でブイブイ言わせていたと噂の女傑、蘭豹が現れた。

「おーし、お前ら全員来とるなあ！！せやったらこっち来い」

相変わらず声がでかい。んな出さんでも聞こえるっての。

言われるがままにくつついて行く。やがて教務科の一角に併設された個室に着いた。

「さアて、今回お前ら呼んだんはアレや」

「……。アレ？」

おいおいキンジ。このメンツを見てアレがわからんのはどうかと思うぞ。

「だあほ！！Rランク一人にSランク二人も集めたんや、んなもんガキでも分かるわ！！おら霧隠！！説明したらんかい！！」

「へーい。ったく、キンジ。ようは教務科直々の依頼クエストのご指名だ。Sランク武偵にはたまにあるって知ってるだろ」

「それってアレか。単位もらえて試験免除になるって」

「いや、まあそうなんだけどさ……その覚え方はどうなのよ？」

「うぐっ……」

「分かったかドアホが！！何でお前は普段はそんな抜けてんねん！！気合入れろや気合！！」

「す、すみません」

「……ま、霧隠が言ったとおり、教務科ウチからの依頼や。よっぽどやない限り拒否れんからな」

「質問いいですか」

そこで俺は手を上げた。何を先おいても大事なことを聞くためだ。

「何や？まだ依頼の内容も説明してへんのに」

「何でレキとキンジを呼んだんですか？俺一人で十分っすけど」

足手纏いとかそういうんでなく、単純に俺一人で十分。そういう意味だ。

「まあ天下のRランク様はそうかもしれんわな。今回は二人、特に遠山に実戦経験を積ますためみたいなもんや。本当なら依頼クエストをそんなことには使えんけど、お前がいるから大抵のミスはフォローしてくれるやろうし、特殊ケースやな」

「了解っす。で、依頼内容は？」

「こちらミスト。イーグル、応答願います、オーバー？」

『何でしょう？』

「や、ちょ、少しは乗ってくれない？素で返されると非常に恥ずかしいですよ、オーバー？」

『現在は任務遂行を第一に考えるべきです。では用事がないのであれば切らせてもらいます』

ブツツ

「……はあ、ロボット・レキ、か。言いて妙とはこのことなりけり、ってな。しかしありゃ、完全に俺の天敵だな」

素っ気無いレキの態度に呆れながら、もう一つの周波数に合わせる。

「あーあー、こちらミスト。ゴールドン、何か情報は入ったか、オーバー？」

『ご、ゴールドン？とにかく霧隠「ミスト」、……霧g「ミスト」、……k「M・i・s・u・t・o」。……
……インフォルマミストか。まだだ。今情報科の連中も調べてくれるんだが、まだ足取りを追っているところ段階だ』

「オーバーをつけろ、オーバー？」

『何でだよ、オーバー？』

「っぽいだろ、オーバー？」

『何がだ、オーバー？』

「雰囲気だよ、オーバー」

『そんなものか、オーバー』

「ああ、そんなもんだ。では引き続き調査を頼む、オーバー」

『了解、オーバー』

ブツッ

ああ、これこれ。この人と人の間で交わされる会話がいいんだよ。さすがキンジ。乗ってくれたし、これは中学からの付き合いの賜物だな、うん。

今現在俺は、夕陽に染められた東京都内を巡回中。なぜそんなことをしてるかは、三時間ほど前の蘭豹に集められたときに遡る。

はい、ほわわわーん

「て、テロお！？」

「大声出すなやだあほ！！」

「テロだかペロだか知んないですけど、さっさと詳細話してもらえないっすか？」

「お前はお前で落ち着きすぎやー！ちっとは緊張なり何なりしろやーって、もっとやばいもんお前は経験しとるか。はあ……何でウチの生徒がRランクなんや」

溜息をついた蘭豹が、手元の資料に目を落とす。いや、俺にそんな文句言われましても。

「これ聞いたからにはもう拒否れんけど、構わへんのやな」

「構いません」

「教務科からの依頼とか、受けるしかないじゃねえか」

「正直はした金っすけど、単位とかの遠い目で見るんでいいや」

「ホンマ可愛げない奴らやなあ。まあええわ。んじゃ、説明するで」

そう言って手元のリモコンを操作する。すると、部屋の明かりが落ち、スクリーンに映像が映し出された。

そこには、一枚の書類を拡大したものが映し出されていた。

「依頼主は東京武偵局。優秀な人材が軒並み出払っとるから、至急優秀な武偵の派遣を頼むやと」

「で、俺たちの実力を測るのも兼ねて回した、と」

「見も蓋もないこというなや。で、大きく分けて任務は、盗まれた物品の奪還と犯人の全員逮捕。この二つや」

「テロってからには相当ヤバめな代物か？」
シロモン

「盗難先は政府の研究機関。抗体作成のために保管しとった菌が盗まれたそうや」

「よりにもよってバイオテロかよ……」

正直な話、爆破とかジャックとかの方がやり易かった。細菌なんてばら撒かれたら、いくら俺だってお陀仏だ。

「で、できればその種類なんか……」

「遠山、それはウチにもわからんや。機密機密、まったく、命かけんのはコッチやのに、お目出度い連中やで」

「盗んだ連中については、まあパツとでの小規模グループや。構成員は十三人。現在都内のどこかに潜伏中。無用の混乱や都市機能の麻痺を防ぐために、迅速かつ一発で解決せよ、やと」

「どこかってどこだよ……」

蘭豹の説明に、キンジが思わず漏らす。俺も同意権だがな。それに混乱を防ぐとか言ってるが、ようは政府の失態を闇に葬るってことだろうが。

「それについては今、情報科の連中が総力挙げて、インフラやら通信履歴なんかから捜しとる。せやから、レキと遠山はいつでも動け

るようにここで待機や」

「俺は？」

「お前は探しに行けや!! Rランクやろーが!! ほら、分かったらさっさと動け!!」

「へいへーい」

「あと遠山は誰か、知つとる使える『車輛科』に話つけとけや!!」

「りよ、了解!!」

「……と、そんなこんなで搜索中。研究所からそんなに離れてはいないとのことなので、そこから半径十キロ圏内に絞っている。

しかし、正直これで見つけられたら情報科の価値などない。俺にも出来ないことはいくらだってあるのだ。

「さって、日も暮れてきたし、そろそろ動きたいんだがねえ……
……お!!」

突然インカムに音が入る。やっとか!

「ウイ、こちらミスト。応答願う。オーバー?」

『諜報科の霧隠さんですね? 私は今回皆様のサポート回らせてもらいます、通信科一年、中空知美咲です。オーバー』

「状況を。オーバー」

『はい。犯人たちは現在、池袋の雑居ビルに潜伏しています。住所や見取りなどの図詳細は携帯電話に転送しますので、急ぎ遠山さんとレキさんと合流して作戦を実行してください。オーバー』

「ラージャ。オーバー」

その後届いたメールを確認し、記載された住所へと急行する。距離にしておよそ六キロ。全力で駆ければ五分かからないな。

『では作戦を確認します』

中空知嬢の美声が聞こえる。うん、いいね。

『まず霧隠さんが潜入、犯人とは出会いしだい無力化しつつ、最短ルートで目的を確保。それを確認し次第、遠山さんが屋内勢力を無力化。レキさんは逃走する敵を狙撃。それでよろしいですね』

「ああ」

『はい』

「お、おう」

ちなみにレキは既に配置についている。

にしても、自信なさげだな、キンジ。やっぱ普通モードのコイツにはちと荷が重い、か。

したらば。

「なーにいったちよ前に緊張してんだキンジ？」

「う、うるせえ！」

「そんな君に。はい、これ」

俺は自分のケータイを渡した。キンジはそれを受け取り、

「ん？何d——！！うお！！」

「あ、危ね！！いきなり投げ捨てんじゃねえ！！」

「そ、それはお前が！！そ、そんな！！」

「ただのエロ画像だろうが！！わかったらさっさとヒスれ！！」

「お、覚えてろよ……………」

よし、雰囲気が変わった。さすがは『エロのソムリエ』高橋（フラ
ンス在住）提供の一品だ。チラッと見ただけでヒスらせるとは。い
や、ただ単にコイツが初心すぎなだけか？

何はともあれこれで準備は完了だな。

「じゃ、行きますか」

「気を付けろよ？」

「りょーかいりょーかい」

こっからはお仕事の時間だ。俺は公私をしつかり分けられる男だからな、シリアスな雰囲気を出して頑張るぜ？

目標に近づいた俺は、建物の死角にあった路地裏に潜み索敵をしていた。

「さて表の見張りは……二階に一人、四階に二人……
・あとはいないな。裏は扉の前に一人だけか。ついでに建物の中には……ん？ 一人いない？」

気配を探ったところ、事前に聞いていた数とは違い十二人の気配しかない。

（買い出しか何かに出ているのか……それ以外の何かか？）
とりあえず連絡はしておこう。

「中空知。聞こえるか？」

『はい、大丈夫です。どうかしましたか？』

「想定されていた数より、一人少ない。一応二人に伝えておいてくれ」

「わかりました。こちらでも何かないか調べておきます」

「おう。頼む」

さて、できれば不確定要素は潰しておきたいが、時間が経ちすぎて闇夜に乗じて行動されると面倒だ。一応想定外には慣れているし、今回も何とかなるだろう。ならば行動あるのみ。

通行人を装って建物の前を通り過ぎ、急いで裏に回りこむ。ここからが勝負だ。裏口の扉を開けた瞬間に気付かれ声を上げられるのは必至。速攻で片付けようにもタイムラグは必ず生じる。これが扉にもたれかかるように見張ってってくれるなら、扉を手刀で貫くなりすればいいが、警戒しているのか何も考えていないのか……絶対後者だが、とにかく見張りは裏口の横の壁にいるのだ。

「前がダメなら後ろにすればいいじゃない。後ろもダメなら上にすればいいじゃない、っと」

ポケットに手を突っ込んだまま壁を駆け上がり、ビルの八階にシュタッと降り立つ。

「こちらスネーク、潜入に成功した。なんてな。中空知、今から侵入する。今更だがビルの見取り図は正確なんだな？」

『安心してください。情報料がしっかり探し出したたしかな図です』

「重畳。じゃあインカムは外す。確保が終わったら電源を入れる」

『了解です。ご武運を』

バタッ

「…………弱っちすぎんだろ」

バイオテロなんて物騒極まりないものを企むのだから、それなりに出来る奴もいると思いたかったが、よく考えたらそんな自分の手を汚さない犯罪をしようとする奴が強いわけがないわな。

「さて、人の気配が一等多いのはここですねー、と」

気配がもつとも濃密な一室。四人か。

「ほいっと」

一瞬扉を開き、目にも留まらぬ速さでスタングレネードを投げ入れた。

数瞬後に聞こえる呻き声。

あとは簡単。扉を開け放ち四人を、いつの日かに備えて鍛え続けた華麗な縄縛術で捕縛。

中央に置かれた金庫の扉を破壊して中を確認する。

そこには、何十にもケースに入れられた一本の試験官があった。

「ミッションコンプリート任務完了。俺はただちにここを脱出する。あとは任せると伝えてくれ」

「了解しました。最後まで油断しないように」

インカムの音が消える。ここで壁を破壊して逃げたいんだが、残念ながら今回の条件に民間人への秘匿がある以上、無用な破壊は避けなければならない。

「しかも、揺らしたらどうなるかわかんないんだもんなあ……」

視線を落とした手元には、何が起こるかわからない細菌兵器。さすがにバイオでハザードな世界の被害者^{ガイシャ}一号になるのはお断りだ。

耳を澄ませば、下から男たちの怒号が聞こえる。どうやらキンジが無双を開始したようだ。

そして慎重に、しかし素早く屋上に戻り、壁を降りる前に状況を確認しようとして――

「ん？人の気配？表か？」

そして俺はそこに近づき……

「おいおい、ハチさんマークの引越しセンターです、ってか？――殺し屋からいつ転職したんだい？」

降りてきたのは、引越し作業員に扮装した、完全に裏の人間。しかもかなりの手練。

「どうやらこいつに用があるのは、ここの連中じゃなくてアイツだったってことか」

分かれれば簡単。

盗むのが子悪党^{こいこのヤツ}。使うのが悪党^{アイツ}ってか。

おそらく一人足りなかったのは、アイツらの所に連絡員として派遣されていたから。そして受け取りに大勢で来たのは、用済みの人間を消すため、ってとこだな。

まあ、わざわざ扮装して来てくれて助かったぜ。隠蔽の必要がないからな。

『――私は一発の銃弾』

インカムから、声が聞こえる。それはさながら呪文のように。

『銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない』

『ただ、目的に向かって飛ぶだけ………』

「ぐっ!!」

右肩を打ち抜かれた男を、彼女が狙撃するまでの間に下りていた俺が、素早く無力化する。

それと同時に、キンジもロビーから出てきた。

「中空知、任務完遂^{ミッションフルコンプリート}。迎えを寄越してくれ。え、もう向かってる？ さっすが武藤」

こうして、俺たちが三人で組んだ事件は、まるで今の空のように、

闇夜に紛れるかのように民衆の知らぬところで秘密裏に終わったの
だった。

教務科からの依頼でござる（後書き）

テスト勉強のためしばらく更新休止でござる。

次回はおそらく六月の最初の土曜くらいでござるかな？

意見・感想待ってるでござるよ。

七月二十五日改訂

似たもの同士でござる（前書き）

お久しぶりでござる！ 実に一週間半ぶりでござる。まだテストから解放されたわけではござらんが、息抜きにコツコツ書いていたのが仕上がったので投稿でござる。

今回はあのロリっ娘登場でござるよ。

そして後書きにお知らせがあるので、気になった方は見てくださいでござる。

似たもの同士でいざる

今俺は、キンジを引き連れてとある場所を目指している。別段隠す気もないので明かすと、装備科^{アムド}の専門棟だ。

俺たち二人はとある噂を聞いて、それが本当なら武装に関しての依頼をしようと思いここまで足を運んだわけだ。

装備科棟は、地上部分は一階だけだが、地下部分は全部で三階まである。

多くの武装が置かれている性質上、結構嚴重になっているセキュリティを通過して、目指すのは地下二階。階段を使って地下に降りるのだが、

「うわあ、こんなことになってんのか。初めて見た」

「俺は何度か来たことはあるけど、やっぱり慣れないな」

俺たちが見つめているのは、ラックに収められ廊下にズラッと並べられた銃器たちだ。かなり剣呑な雰囲気だ。

それをあまり気にしないようにして廊下を渡り、部屋番号B201、『ひらがあや』と場に合わない平仮名の表札が掲げられた部屋の前に立つ。

「おーし、ノックするぜ？」

「正直この表札を見てかなり不安になったんだが……」

コンコン

「うわ、一切躊躇しなかった」

「いますのー！今手が離せないなので、勝手に入って待っててくださいなのー」

部屋の中から、間延びした、子供みtainな声が聞こえる。

「だよ。よし、帰るか」

「随分悪質だな！？」

「冗談冗談。ではおじゃましますよーと」

「えっと、邪魔するぞ？」

ギィ

俺は扉を開け放った。

「うお、カオス！」

その瞬間目に飛び込んできたのは、物・物・物……、数え切れない数の工具、世界中の銃の部品、ケースに収められたネジ一つとっても何百種類もありそうな様相だ。

よくまあ入学から二ヶ月でここまで汚く出来るもんだ。整理整頓された俺の部屋が殺風景に思えちまうじゃん。

「積み方がドンキみたいだな」

キンジ、同感だが声に出しちゃだめだろ。

ただ待ってるにしても、物のタワーを崩しそうで神経使うぞ、コレ。

「あと何分くらいだー？」

口元に手を添えて、奥まで聞こえるように声を上げる。

「あと少し、あと少しで………終わったのだー！」

「終わったみたいだぞ。霧隠、さっさと行こうぜ？」

そう言って、屈んだり横向きになりながらキンジはズンズン進んでいく。おい、いつからそんなアクティブになったんだ、ネクラめ。

「待ってればいいと思うんだけどなあ………」

「あはっ！初めて見る顔が二つなのだー！」

おそらくさっきまでメンテをしていたのだろう、グロック28を横に片しながら、小柄な女の子が顔を上げる。そう、コレは少女じゃなくて女の子と言うべきだろう。何か雰囲気といい喋り方といい、小学校低学年を髣髴させる。

「何だ？一見さんいちげんはお断りか？」

「そ、そんなことないのだー！」

ブンブン首を振って、俺の冗談に抗議の意をアピールする彼女、Aランク武偵で装備科一年の平賀文。通称は平賀さんだそうだが、まあ平賀でいいだろう。

「からかうのはその辺にしろって」

「悪い悪い。あ、俺は諜報科^{レサド}一年の霧隠才蔵だ」

「俺は遠山キンジ。コイツとは同学年^{タメ}で、専科は強襲科^{アサルト}だ」

「サイゾー君と遠山くんですか？あややは平賀文。装備科の一年生なのだ」

「で、依頼をしたいんだが………」

「やったのだー！今月二人目と三人目なのだー！金づるなのだー！」

無邪気な顔でとんでもないことをのたまいますよ、この幼女。

それに六月中旬で二人目って………あれ？目から水溶液が、あれ？

「えっと、金さえ払えば何でも改造^{ヤッ}してくれって聞いたんだが」

「その通りですのだ。銃の改造から武装の作製まで、あややにできないことはないのだ！」

えっへん、とない胸を張って誇る平賀。

「で、ご用件は何ですか？冷やかしながらお断りですのさ」

「俺は銃を改造してもらいたいんだ」

そう言ってキンジがホルスターから取り出したのは、イタリアが生んだ傑作銃、ベレッタM92。実用性、知名度、デザイン性、その全てを兼ね備えた信頼性の高い一品だ。

「コイツに三点バーストとフルオート機構を付けたいんだが……」

戸惑いながらも、ちゃっかり少女に犯罪幫助を申し付けるキンジ。悪だ。

「あはっ！そんなの簡単なのだ」

「（簡単って、一応違法改造なんだぞ……無邪気すぎないか？）」

「（なら依頼なんてするなよ。やってくれるならそれでいいだろ）」

隅でコソコソ話していると、平賀が電卓に打ち込みだした。おそろく金額についてだろう。とかこのタイミングでそれ以外の話が出たら怖い。

「ピ、ポ、パ、正味これだけになりますのだ」

「って、高っ！」

そこに示されていたのは、一般的なAランク武偵への改造依頼にかかる料金を大幅に超える数字だった。どれくらいかは、武偵として個人情報保護の観点から言わないでおくが、まあ二倍以上とだけは言っておく。

「むっ、皆そんなこと言うのだ！あややは自分でこれくらい思ってるから、これだけって言うてるのだ！」

「！」

「す、スマン。もう少しだけ安くならないか？」

「むー、ならこれだけなのだ。これ以上は何て言われても安くしないのだ！」

そう言って電卓から数を減らす平賀さん。

「わかった。その分後回しにしても構わないから」

「……………どうせお客さんいないから、明日には終わってるのだ」

「（く、暗い！落ち込みだした！）」

「（まったく、お前はアレか。メイン以外のケアはしないのか）」

「（メイン？）」

「（電波だ。忘れろ）おい、平賀さん。俺も依頼していいか？」

「はいはいなのだ！何にしますのだー？」

「俺は銃はどうだっていいからな。装備を作って欲しい」

「材料費とかで割高になるけど、いいのだ？あんまり値引きはしたくないのだ」

「ああ、平賀さんの言い値で構わない」

俺は、平賀さんの自分の仕事に対するスタンスに、かなり共感を覚えた。金さえもらえば何でもやる、実に素晴らしい思考だ！それに対する報酬として、他より割高なのも俺に重なる。

いや、まさかこんなところにここまで気が合う人がいるとは思わなかった。こういう人には俺は、一切躊躇せずに金を出せる。

「本当ですのだ！？サイゾー君はとーやま君と違って太っ腹なのだ！いい人なのだ！ふはふは！」

「霧隠が値切らない！？明日、いや今夜は雪か！？」

「お前失礼だな！俺だって値切らないときくらいあるわ！」

「わははー！それで、サイゾー君は何が作って欲しいのだ？」

「簡単に言うと、時速百十キロくらいで走り続けてもなるべく磨り減らない靴が欲しい。音は立てたくないから底にはなるべく金属を使わずにな」

正直、依頼のたびに靴を履き潰してたら浪費もいいところだ。かと

言って裸足なんてことは、文明人のプライドが許さない。

「サイゾー君、そんなに速く走れるのだ？すごいのだー！」

「霧隠の非常識^{アブノーマル}っぷりを、すごい一言で済ませられる平賀さんの方がすごいと思うぞ」

キンジが呆れているようだが、放っておく。

「それで、できるか？」

「あややに任せるのだ！Nothing is impossible!
le！」

「心強いぜ。んじゃ、平賀さん。金はいくら使ってもいいから、最高の一品を頼むぜ？出来によってはチップも弾むから」

「サイゾー君はいいお客さんなのだ！任せといて！最高の品^{さいごー}を超特^{ちやーとつ}急^{きゅー}で仕上げてみせるのだ！ガッポガッポなのだ！ふはふは！」

無邪気に笑う平賀さんに、とりあえず前金として十万円と、連絡先の書かれた名刺を置いていく。

「とりあえず自由に使ってくれ。あ、これ俺の連絡先。んじゃ、頼んだぞ」

「わかりましたのだ！出来たら連絡するのだー！」

「霧隠よりケチとか……俺って……俺って……
……」

「うっせー、行くぞ」

ブツブツ呟くキンジの首根っこを掴んで、俺はまた機械ジャングルを抜けて、部屋を出た。今後ともヨロシクですのだー、という少女の声を背後に受けながら。

今度は菓子子の詰め合わせでも持ってくるか。

似たもの同士でござる（後書き）

取り合えず平賀さんは友人ポジションでござる。

それと前回建てた中空知フラグは、いつの間にやらポツキリ逝っていることをここに記しておくでござる。キンジ、恐ろしい子でござるっ！

そして、次回新章突入でござる！

まだ原作ではござらんが、新章のタイトルこそ、遂に決まったこの小説のヒロインを示すものでござる！！次回を乞うご期待、でござる！！

祭は準備中が一番楽しいでござる（前書き）

やった！中間テスト、完っ、でござる！

結果なんかいいんでござるよ！終わってしまえば！

そんなわけで、本格復帰でござる。リハビリにとりあえずは数日連続投稿を目標にするでござる。

そして、ついに決まったヒロインでござる。章名で誰だかわかった人もいると思うでござるよ。

始める前に、ひとつだけ言っておくでござる。

今まで自分が言ってきたメイン、サブ云々ヒロイン選考基準とか、原作が崩れるどうのこうの、とかは、全部空の彼方にカキーンして結構でござる。

優柔不断で自分の言葉に無責任、が自分のモットーでござるゆえ。

批評も批判も受け付けるでござるが、ただ罵倒するだけとかは止めて欲しいでござるな。

六月四日修正

祭は準備中が一番楽しいでござる

『いやー、師匠のおかげで今月も飢えを凌げそうでござるよ』

「うん。数ヶ月ぶりのセリフがそれだとシニールだな」

『数ヶ月、でござるか？ 某には、先週も師匠と会話をした記憶がござるが、はて？』

「気にするなメタの話だ。そういや、お前今度の文化祭くるんだよな？」

『そのつもりでござる。し、して……そのお』

「わあーてる。俺も鬼じゃない。祭りの日ぐらいおごってやるさ」

『師匠おー。一緒ついていくでござるうー』

「はいはい、ついてこなくていいから、じゃ、またな」

『では、失礼いたす』

向こうで電話の切れる音がしたのでこちらも切る。忘れているかもしれないが俺の一応弟子の風魔だ。

内容は、今月の生活費諸々への感謝だな。

手にかかる弟子、というか妹分に兄貴分として一応無償で金をくれてやっているわけだが、生憎コッチも慈善事業をやっているわけじ

やない。

来年になったらキッチリ労働で払ってもらうさ。ふはははははは！

ブルッ

「さ、寒気が……風邪でござろうか？やはり不摂生はほどほどにせねば。それに、いくら兄のような存在でも、師匠に頼りきりはよくないでござる。今宵もファミレスでの修行に精を出すといたそう。それにしても、文化祭でござるかぁ……楽しみでござるなあ」

〽次の日〽

「さてえ、今日のHRホームルームの議題は、二週間後に迫ってしまっためんどく……たのしいー文化祭についてだァー」

「センサー。本音が漏れてまーす」

「気のせえー気のせえー。さて、下っ端のお前らはあ、人様には見せられない、主に強襲科アサルトとか諜報科レザードのあーんなものやあ、こーんなものをおせつせと運ぶのが決まってるのでえ、私が担当地区を決めておいたあ。異論は認めませえーん」

綴が、気だるげに担当地区ごとにメンバーを読み上げている。基本は自分が在籍している科だが、人手が足りないSSRのようなところ

ろに、暇そうな尋問科ダギュラやら救護科アンビュラスのような面子メンツが駆り出されていた。

「各々専科のやることもあるだろうーが、奴隷の一年と諦めれえー」
言っていることはアレだが、これは軍並みの上下関係が構築されている武偵高では仕方ないことだ。奴隷の一年、鬼の二年に閻魔の三年……てな？

キンジや不知火は強襲科で葉莢拾いに精を出しているらしいし、武藤もコースの掃除に汗水流しているらしい。

え、俺？金ももらえないのにんなもんやるかよ。別に先輩に目を付けられて囲まれても怖いことなんかないし、最近ではすっかり諦めている様子が目に見て取れる。物分りがいい先輩は好きだぜ？

っと、そうこうしてるうちにHRも終わったか、なら練習に行くか。

「不知火、さっさと行こうぜ」

「うん。何だかんだで霧隠君もやる気なんだね。最初はあんな嫌そうだったのに」

「そりゃ、入場料が多いほど給金が増えるー、なんて聞かされちまったら、んあもんやるっきゃなかろうに」

「ははっ。君らしいね」

「おら、んなことはいいいからさっさと行くぜえ！」

「わ、ちょっと」

「一年A組の男二匹参りやしたあ」

「もー、サイ君もリョー君も遅いよー。理子プンプン〜!」

インゲスタ
探偵科の大講義室に入った俺たちを出迎えた魔改造フリル制服を装備した少女は、探偵科のAランク武偵の峰理子。まあ、セリフ通りのアホの子だが、こと情報収集能力にかけては天下一品の才能を持っている。

「ごめんね。遅れちゃった。もう練習始めてるのかい？」

「ううんー。まだ全然来てないよー!」

「ならさっきのセリフは何だったんだ」

確かに、見ればいるのは柱にもたれかかってボーっとしているレキと、理子と同じD組の星伽、それに特殊捜査研究科（CVR）の女子が三人だけだ。俺の視線に気付いたのか会釈してきた星伽に、俺も手を振り返す。

「えーと……あと八人だな」

そこで噂をすれば何とやら。残りのメンバーが一斉に入ってきた。

「よーし!そろったところで、今日も劇の練習がんばろー!おー!」

理子の掛け声に、ノリのいい奴らは拳を掲げる。理子も言ったが、

俺たちが練習しているのは文化祭でやる劇。メンバーには、一年の間でアンケートを取って選ばれた、所謂顔のいい奴らが集められた。拒否権がなかったため俺も最初は嫌々だったが、前述の給金の話が出た辺りから真面目に取り組んでいる。

劇の内容は、流行の（※原作一年前なので、まだ戦国ブームは続いているのです。古いわけではありません）歴女を取り込もう！という理子の意見が採用されて時代劇だ。題目は『暴れん坊將軍』。俺のチョイスだ。好きなんだよ健さん。

御庭番役兼製作総指揮兼監督の俺が、皆に指示を飛ばす。言っておくと、主演は勿論のこと不知火だ。

レキ？棒読みしか出来なかったからナレーションにした。意外とはまり役だったな。

「はい、んじや悪代官に女中が襲われるシーンから！アクション！」

「いや！止めてください！」 「よいではないか！よいではないか！」 「あーれー」

さすがCVR。着物の脱がされ方から、肌を魅せる技術まで、一年ながら卓越している。コイツらにハントラされる人はドンマイだな。でも、

「代官の顔はもっとスケベに！」

「いや、今でも十分やってるって！」

悪代官役の抗議が入る。しかし、劇を預かる身としてここは譲れない。ならば、と代官の前に移動。その場で高橋にもらったエロ本を開く。

「むほお！」

「その顔だ！それを常に出せるように心がけろ！」

「了解！……だから、もう一回……ね？」

パツ

「むほお！」

「いや、キモいんだけど……」

女中役が不満を上げるが、我慢してもらえないだろう。

「次は新之助が街娘と会話するシーン。アクション！」

「一体これはどうなっている？なぜ砂糖にこれほどの値段がついているのだ？」

口調を変えて男らしい感じの不知火。俺がリスペクトする健さんとはベクトルが正反対だが、まあ客寄せのためなら目を瞑ろう。

「大声では言えないけどね、お代官様と奉行所の郡奉行様が一枚噛んでる、って噂だよ。あ、私が言ったなんて言っちゃだめよ？」

「安心しろ、こう見えても口は堅いのでな」

ふむ、さすがの安定感を見せてくれるぜ、不知火。文句の付け所がない。

「よし、次は・・・・・・・・」

・・・・・・・・。

・・・・・・・・。

・・・・・・・・。

「おし、今日はこれまで。解散！」

号令のち、徐々に人影が減っていく。やがて、夕陽が差し込む教室には俺と彼女だけが残った。

「何か用事か？『霧隠商店』は依頼ならいつでも受けるぞ。レキ」

扉の前に立つ俺の眼前には、いつも通りのドラグノフ狙撃銃を肩にかけ、ヘッドフォンを装着したレキの姿がある。

いや、いつも通りではないか。なぜかドラグノフが剥き身だ。何かわけでもあるのか？カバーを洗濯中とか？

あ、『霧隠商店』ってのは、最近俺が始めた事業だ。何も法に抵触

しない普通のものから、限りなく黒に近いグレーなものまで、金さえ払えばほとんど何でも、一週間以内には調達する雑貨店、とでも考えてくれればいい。

最初は依頼も少なかったが、最近は常連さんもできた。たまに教務^{マスタ}科の連中まで来るから驚きだ。

「では、少しついてきてもらえませんか」

レキがそう言って、俺の横をすり抜けて廊下に出る。俺も、講義室の鍵を閉め、歩き出したレキに先導されるがままについていくことにした。

「ここでいいでしょう」

ついたのは探偵科の屋上。眼下には東京湾を望める。

秋ということで、もうすっかり真っ暗な屋上への呼び出し……
・不知火とかキンジ辺りなら、簡単に告白イベントに持っていけるんだろーなあー。はあ、結局告白なんて、中学のときの何ていったか忘れたギャルの一回だけだった……。ちくせう。

それにしても、やっぱりコイツの感情は読みづらい。

まあ、任務を何度か合同で行って、最近は出会ったところよりそこそこ会話に応じてくれる辺り、少しは気を許していてくれる……。のか？ さっぱりわからん。

「では私からの依頼です。才蔵さん、私には必要なものがあります」

「俺に頼むなんて、よっぽどのものか。よし、俺に何とかできるモノならとってこようじゃないか」

「はい、あなたにしかできないことです」

「おう、何だ？」

「私が欲しいのは」

そう言ってレキは、俺を真っ直ぐに見据えた。ガラス球のような二つ双眸に上目使いで見つめられて、不覚にもドキッとしたのは秘密だ。

「才蔵さん。アナタです」

.....。

.....。

.....。

「へ？俺？」

あまりの急展開に、逆に落ち着きすぎてしまう俺。

遅れて、一気に混乱が押し寄せてくる。

え？マジ？妄想が現実になったっていうか告白どころか、段階すつとぼしてプロポーズ？え？何で俺？え？いや？ないないないない。どれくらいないって、マジでない。

「才蔵さん」

混乱している俺を尻目にして、囁くように、それでいて明確な意思を感じさせる声で、狙撃科スナイプの麒麟児、ロボット・レキはこう言いやがった。

「私と結婚してください」

ああ、どこかにいる両親へ。不肖の息子である私めは、ファーストプロポーズを、奪う前に奪われてしまいました。

祭は準備中が一番楽しいでござる（後書き）

と、言うわけでヒロインはレキでござるね。テスト勉強中にフツと決まったのでござるよ。

この章は、原作六巻に近い長編になる予定でござる。

基本は原作に似てるでござるが、立ち位置の違いや時期の関係から大筋の展開以外はオリジナルになるでござる。

ではまた。

闇夜に語らうでござる (前書き)

アニメの「魔剣」編を見て思ったことでもござるよ。

この綴センセー……………誰？

そんなこんなで、どうぞでござる。

闇夜に語らうでいやる

「結婚してください」

突然同級生に告げられたその言葉に、俺は……

「いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや。ないないないない。真顔でジョークは大概にしとけよコイツめっ♪」

切実に現実逃避していた。

「冗談でも戯言でもありません。私は現実に才蔵さんに結婚を申し込みました。あとは受諾の返事を待つだけです」

拒絶の返事は待っててくれないますか？あなたは『返事は「はい」か「Yes」のみだ』って人種なんですか？

「てか、何で俺なんだ？俺とお前は、任務以外では大して話したことないだろ？」

「風があなただと言ったのです。あなたでなければならぬ、あなたをウルスにしろ、と。」

やばい、逆に感動しちゃうほどまったく話がかみ合わない！大体、風？何の話だよ！何かのコードネームとかあだ名か？それにもっと謎の単語。

「ウルス？」

「『家族』という意味です」

「何だ、家族が欲しいのか。それなら火急速やかにペットを飼いなさい。猫とか亀とかインコとか猫とかハムスターとか兎とか猫とか」

「あ……あなたでなくてはいけないのです」

いつもの無感情な口調ではなく、力強い決意が籠った言葉。

「それに、私もすぐに求婚を受け入れてもらえるとは思っていません」

「そうかそうか。そうだよな。じゃあまずはお友達からで……」

「ですので、これからはあなたと共に生活をします。受け入れていただけるのであれば、いつでも言うてください。」

「お友達は同棲しませんのことよ！？」

思わず妙ちきりんな口調になったが、致し方ないことだと思うので許して欲しい。皆だって、仕事仲間としか思ってた娘にいきなりプロポーズされて、返事を返さないのに同棲、なんてことになったらどう思う！しかも普通に美少女！

・・・あれ？この状況美味しくね？何か漫画に良くありそうなシチュですやん。

・・・あれ？じゃあなんで素直に喜べないんだろう？

ああ、銃を突きつけられてるからか。そーかそーか・・・

・・・あれ？

何か気付いたら、いつの間にかレキが狙撃銃ドラグノフを構えてた。

「すんませえーん、レキサあーん。何で俺、銃口を向けられてるんですかあー？」

「逃げようとしたら撃つためです」

「レキさん？人間が何で動物と違うか知ってるかい？会話によるコミュニケーションが出来るからなんですよ？さあさあ、いざいざ、ゆっくりじっくりざっくり話し合おうじゃないか！Let's talk!」

おどけながら、何とか銃口から逃れようとする。

「お断りします。結婚相手は話し合いで手に入れるものではなく――」

そう簡単に逃がしてくれませんよねえ。銃口はあっさり向けなおされた。

「――奪うものですから」

レキさん、男らしすぎです！世に蔓延る草食男子に見習って欲しいけど、対象を俺にはして欲しくないぜ。俺が草食みたいじゃないか！！

「ですが、幸いにも才蔵さんには恋仲や、それに近い方はいらっしやらないようですし、少し穏便に事を運ぼうかと思えます」

・・・・・・思ってたないんだからね。彼女がいなくて良かったなんて、片時も思ったこと、ないんだから！！

「もし、仮に、仮にだが、俺にそういう奴がいたら、お前はどうするつもりだったんだ？」

「猶予を与えていました」

猶予？それなら俺だって今ももらったんじゃない・・・・・・

「七発の銃弾を当てる前に、婚約を誓っていたたく猶予です」

よかったああああ！！彼女いなくてよかったああああああ！！

「・・・・・・ついでに質問するが、何で七発？」

「制服のボタンの数十一です」

え、七発目はどこに？やだ何この子怖い。

「懸念事項として、才蔵さんと不知火さんが出来ている……
という噂があったのですが」

「懸念も疑念も抱くな！！それは御腐れ様たちの噂であって、新鮮な俺には終ぞ関わりたくない事項だ！！」

さて、俺はあの場から解放されて、部屋に戻ってきた！

「質問があります、何でレキ將軍閣下は私めの部屋にいたのでしょうか？」

そう、解放されたのは『場』だけ。残念ながら『人』からは解放されなかった。

「言いました。『これからはあなたと共に生活をします』、と」

帰ってきた男子寮の俺の部屋。一度いなくなったと思ったのに、一切の淀みなく上がってきたからまったく疑問を抱かなかった。霧隠才蔵、一生の不覚っ！

「い、いや、俺の部屋何もないだろ？狙撃銃^{ドラ}の整備とかどうすんのですよ？」

「部屋に何もないことに関しては、私も同じなので気になりません。整備についても、明日には解決します」

最後の発言が、『私、明日には帰るんでー。キャハ♪』みたいな可愛らしいものでなく、『おうこら、逃げ切れる思うとるんかあアン！？地球の裏^{チタマ}側^{ウラ}まで追いかけたるわ！！』みたいな不穏なものに聞こえるのは、きっと俺の心が醜く歪んでいるからだ。

美少女 is justice！！こんな可愛い女の子が、俺の精神的疲労をこれ以上増やすようなこと、するはずがないね！……

……ないよね？

「才蔵さん。シャワーをお借りしてもよろしいでしょうか？」

レキが、銃と自室から持ってきたらしいナップザックを机の上に置いた後、俺にそう聞いてきた。

お前、男の家でシャワーなんぞ使ったら、事の準備としか、歪んでしまった俺は取れないぞ？シャワーに意味を見出さないのは小学校低学年までだ。高学年？日曜洋画劇場あの年代のガキはシャワーからのコンボに興味を抱くんだよ！

「ああ、自由に使ってくれ」

「ありがとうございます」

そう言ってレキは、
しゅるっ。

「くあwせdrftgyふじこlp!？」

ブラウスをいきなりたくし上げやがった！！

「や、やめろ！俺は、まだ内なる獣を外に出したくはないんだ！！
まだ俺の理性があるうちに・・・・・・そんな暴挙に出るのは止め
てくれ！！くっ・・・・・・や、やばい・・・・・・出てきちゃう
！！俺の、俺の暴走した分身が！！や、ヤメロー！！」

俺が一人で中二ごっこをしてる間に、レキは下着だけになって風呂
場に向かっていた。素でスルーは寂しいかな、かな？

あと思っただんですがレキ先生、ここで脱ぐ必要、なくね？

それに、突然脱ぎだしたゴタゴタで、何かとんでもないことを忘れ
てしまった気がする・・・・・・。ま、思い出せないってことはそ
こまでってことだな、うん。

さて、先生はまだ体を洗っている。ここで、俺の紳士力を試すかの
ような問題が降って沸いた。

――果たして・・・・・・俺は覗くべきなのだろうか

一つ屋根の下どころか、壁一枚の向こうで、チャプチャプ、だのス
ッスッ、だの妄想を掻きたてられる擬音が現在進行形で垂れ流しで、
あまつさえ少し動けば音源を直視認できるんだ！！男として、否！
漢^{ヲトコ}として、俺は一体どうするべきなんだ！？

（脳内会議）

議長「はい、第百十六回本性召集緊急脳内会議を始めます。議長は今回も私、『日和見』です。では、各々勝手に意見言っちゃってください。一番優勢な意見にします」

理性「覗くだけにしとくべきだ。社会的にも物理的にも抹殺されるぞ」

色欲「犯っちゃえ！」

強欲「犯っちゃえ！」

嫉妬「犯っちゃえ！」

怠惰「犯っちゃえ！」

憤怒「犯っちゃえ！」

傲慢「犯っちゃえ！」

暴食「犯っちゃえ！」

議長「自分の性質的には、一番多かった『犯っちゃえ！』ですが、本体が死ぬのは嫌なので理性の意見にします。はい、かいさん」

全員「」「」「」「」「お疲れちゃん」「」「」「」「」

俺の本性どれだけ煩惱丸出し！？しかもいつ開いても七対一なんで

すね。

とにかく、脳内会議に従って覗くだけにしようか。……
何だかんだで理性も煩惱に塗^{まみ}れてるな！。

勘違いはするなよ？別に俺が覗きたいわけじゃないんだ。ただ俺の
理性が覗きたいだけなんだ。

誰もいない空間にそう言い訳をして、俺はまずゆっくり振り返った。

「お待たせしました。先に使わしていただいてありがとうございます
す」

これがテンプレって奴なのさ。

何がって？

「ああ、気にするなよ。ところで……………」

「はい」

「何でスッパなんスかあああああああああ！！」

無理無理無理無理無理無理！！何事もなかったかのように爽や
かに指摘しようと思ったんでございやすれどもば、やっぱムリ！！

覗く覚悟は出来ていたけど、直に真正面から見つめる勇氣なんぞ持
ち合わせておりませぬ！！

例えるならお母さんに、「明日カレーがいい！！」って軽い気持ち

で言った小学生の男の子が、バーモンドだのこくまろだのを待ってたら、お母さん無駄に張り切りすぎてルーを小麦粉から作たウン時間煮込んだ本格カレーが出てきちゃったときの心境くらい覚悟ない！！

「お、おま！な、なん！は、はだ！？」（※訳「お前何で裸！？」）

「着替えは机の上ですから」

しれっと返すレキ。いや風呂場に持って行けよ。

俺に見られることに関して何も思っていないのか、気にした素振りなど一切見せずに着替をナップザックから取り出すレキ。着替えが制服な辺り、何着も持っているのだろう。

にしてもこうまでに無反応だと、何か一人で勝手に意識しているみたいでやってられないな。

「お前、俺に裸見られて何も思わないのか？」

「構いません。いずれは才蔵さんのモノになる身体ですから」

レキが発した「モノ」という単語は、俺が思っている「もの」とどこかニュアンスが違う、哀しい感じがした。

「……………はあ、俺は朝練のシャワーで風呂は済みますから、飯は食ったか？」（※朝練Ⅱ早朝・戦闘訓練）

「はい。今夜の分は済ましてあります」

なら・・・・・・・・。

「もう消灯の時間です。電気を消してよろしいでしょうか？」

壁時計に目をやればジャスト九時。おいおい、おどれは小学生か。月9を録画で見ないといけないお年頃か。まあ、あと何時間もこの空気に耐えるくらいだったら、寝たほうがいいか。

「ならお前はそこの部屋のベッドを使ってくれ。俺はここの天井で寝るから」

いつもはベッドがある部屋の天井だが、さすがに女の子と同室で寝られるほど、俺の神経は凶太くはない。

「いえ、私はベッドを使いません」

んじゃどうやって寝るんだ・・・・・・・・って、あの噂はマジだったってことか？

曰く、レキは座って眠る

どうやら本当だったらしく、レキは狙撃銃を杖のように抱えて、体操座りで壁に寄りかかった。お前侍か。なら主は忍者の俺じゃなくて、レキってことになるがな。

下にいると、完璧な警戒態勢の寝姿とは裏腹の、あまりにも無防備というか無頓着なスカートのせいで目のやり場に困りそうなので、飛び上がって天井に着地する。こうすればもう惑わされることもないぜ。

隣の部屋にベッドがあるのに、リビングで座って寝る美少女と逆さ吊りに寝る美少年。

うん。すっげーシユール。ころそこ！「自分で美少年とか、ワロスww」とか言わない！

部屋の中には、時計の秒針の時を刻む音だけが響いている。普段ならまったく気にならないのだが、今日に限ってはそれだけで寝つきが悪くなる。

「…………レキ、寝たか？」

「……………いいえ」

暗闇も相まって落ち着いた雰囲気。わかりやすく言うなら事後の雰囲気だな。

え？わからない？俺もわかんねえよ！背伸びしたんだよ！いいから洋画でも見て感じ取っとけ！

「少し話そうぜ。慌しすぎて、いまいち状況も不明瞭だし」

「わかりました」

うん、こんな雰囲気なら俺もふざけず普通に話せそうだ。いや、普段もやろうと思えば出来ますが何か？ただやらないだけです何か？

「とりあえず、お前が風とやらの命令で俺にプロポーズした、ってのは理解した。合ってるな？」

「はい。簡潔にまとめればそうなります」

「お前はさっき、俺じゃなきゃいけない。みたいなこと言ってたけどよ、俺は金儲けに思考の四分の三を常に費やしてるような面白みのない男だぞ？ 何で俺なんだ？」

「それもあなたの一部です。それに、たしかにあなたには将の才能はあまり見受けられない、と風は言っていました」

将ってのは、將軍って意味だろう。それなら俺にそんな才能、あるはずがない。俺は忍。侍とは考え方が根本から違うんだ。そもそもの話、将云々の前に風魔の先祖みたいな一つの一族を支え続けた忍者なんていう、侍然とした連中は忍の歴史を紐解いてもあまりお目にはかかれない。

確かに甲賀者は忠義を重んじるがそれでも侍のような絶対の掟ではない、俺たち伊賀者に至っては、考え方が傭兵のそれだ。一番金を払ってくれる主人に仕え、落ち目になったら契約を切って次の主人を見つける。

事実ウチの先祖は、関が原の合戦の終結とともに、西軍であった真田家の下を去っているのだから。

その点で俺は、伊賀に生まれてよかったのだろう。前世からの業と言っていい金儲けに何ら負い目を感じずに済む。

でも、俺の拝金主義を前面肯定されたのはこいつが初めてかもしれない。皆どこかしらで俺に対して、少し金に汚すぎ、という視線を見せていたからな。

「ですが、あなたは強い」

「そりゃ、それぐらいが唯一の取り柄だからな。所詮力しかない男だ」

「いえ。それは違います」

「何が違うんだ？」

思わず首を傾げてしまう。強いと言われて、単純な力のことかと思っただけと言ったのだ。

「もしも、才蔵さんが他人より勝っているものが、武だけだったとしたら、風はあなたを選ばなかったでしょう」

「………？」

「あなたの強さは別にある。自分では気付きにくい事かもしれないが」

「気付きにくい？他にできるのなんてバイトくらいだが………」

「あなたは、強い魂を持っている」

「た、魂？これまた随分抽象的な………」

「自分の生き方に誇りを持ち、周囲に流されず己おのが信条を貫き通す、鍛えられた玉鋼のようなに強さと美しさを兼ね備えた魂を」

「な………何か、正面から直球で褒められるところばゆい。レ」

キに、むしろレキだからこそ、過大評価も過小評価もしない奴だと分かるからこそ、余計に顔が赤くなる。

「力なき信条はただの夢想と変わりません。誇りなき武は暴力にしかありません。しかし、あなたには貫き通き続ける意志も、周りにも最後には自発的に認めさせるだけの武もある。それは、誰にでもできることではありません」

別にそんな大層な考え方で生きてきたことなんてなかっただけに、普通の俺がレキにそう見えていたことがどこか嬉しい。

「カリスマを以って優れた兵を率いるのが将の素質ならば、才蔵さんが持つのは武を以って民に安寧をもたらし、雄ゆうの素質です」

「雄……ようするに英雄って事か？それこそ過大評価だ。俺はそんな大層なものじゃないさ。俺はケチで阿漕アコギなただの忍者だ」

「雄に求められるのは、清廉潔白であることではありません。それは為政者にこそ求められるべきものであり、雄である条件は大衆の敵に対する絶対の勝利者であることです。それに私は、金銭感覚は十人十色であり、それが人間性の評価へと直接繋がるとは思いません」

……何か、レキがこんなに話す奴だとは思わなかった。

いつも任務中に話しかけてもスルーばかりされるから苦手にしていたが、アレはあくまで任務中だからで、こういうプライベートで話すならば、どちらかと言えばかなり話しやすい部類の人間だと思う。

人とかかわりを極力避け、誰とでも平等に接する。『誰とでも平等』、と言うのは聞こえこそいいが、結局のところは特別な人間がない、つまり親しいものが一人もいないということになる。

友人はおらず、周りにいるのは、あくまで違う存在として崇める信望者だけ。

そんな彼女と有意義に思える会話が出来た。だからこそ、話していて、キンジたちとはまた違う毛色の会話が出来るレキは、俺の仲で友人としての好感度がかなり上がった。

「まあ、あれだ、嬉しいぜ」

「いえ、ただ事実を述べただけですので」

サラッと言うし、本当のことなんだろう。正直、いきなり結婚とか言われても、答えられるわけがない。

だがまあ、さっきは有耶無耶にはなったが、まずはお友達から始めようぜ。

闇夜に語らうでござる（後書き）

才蔵には、アリアのような関係の異性がないため、レキの対応も違っているでござる。

感覚的にも、「今すぐ結婚!」というよりは、「早いうちから唾つけとくか」レベルなため、狙撃拘禁もしないのでござるな。

では、意見・感想待ってるでござる。

押しかけでござる(前書き)

本来の予定より一時間のフライング投稿でござる。

あと、後書きは異様に長い上本編一切関係ないので、物好きな方だけどうぞでござる。

押しかけでいじる

次の日、朝練のサバイバルゲームでやけに集中砲火に遭う気がした。不思議に思いながら、シャワーを浴びていたら途中で水がいきなり熱湯に変わった。調べたら部品が壊れていた。暗鬱になりながら下駄箱に向かったら上靴が草履になっていた。

もしかしてこれイジメ？とか鬱に拍車をかけながら教室に入ったら、クラスの男子が一齐にこちらを振り返った。やばい、かなりホラーしかも、ただ俺が動くほうに目線を合わせてくるだけで声は一切発しないという、どこぞの石像状態だ。

ちなみに女子は、俺を見てはコソコソ喋っている。

「な、なあ、不知火？朝から何か皆がおかしいんだが、俺何かした？」

いつも通りニコニコしている不知火に、まずは事情を確認する。

「霧隠君、あまりここでその話をしないほうがいい。彼らを不用意に刺激することになる」

「か、彼ら……？ああ、男子どもか……」

「食事のときにでも話すでしょう」

「あ、ああ……」

その後、俺は四限間ずっと一部の男子から、身に覚えのない恨みつ

らみの視線を背中に受け続けることになった。ちくせう、一番前の席とか損ばっかじゃねえか。

「で、結局何なんだ？この視線は？」

男子の半分……とまでは行かないが、現在進行形で廊下の男子の一部に射殺さんとせんばかりの視線を向けられて、改めて不知火に聞いたときだった。

「霧隠！！てめえこれから大変じゃねーか！夜道に気をつけろよ！」

突然現れた武藤に、背中をバシバシ叩かれた。

「今日は大変だっただろ？」

うるさい武藤を沈めていると、隣にキンジがやって来た。白目を剥いている武藤を引きずって、三人十一で学食に向かう。

「いや、お前らは理解してるみたいだが、俺はさっぱりなんだよ。結局俺は何をやらかしたんだ？」

復活した武藤も含めて四人で食事を受け取り、空いている席についた。キンジは相変わらずハンバーグ定食だ。よくまあ飽きないな。

「霧隠君。君、昨日部屋にレキさんを泊めたんでしょう？」

「ぶふっ！」

「うお、汚ね!! 何すんだ霧隠!」

前のキンジが騒いでいるが、そんな場合じゃない!! 何で不知火が知ってるんだ!?

「今朝同じ階の男子が、偶然君の部屋から出るレキさんを見たんだって」

「んで、そいつはレキの隠れファンの一人でよォーまあ俺は別口で知ったんだが……お前、今日何か妙なこともなかったか？」

武藤の質問に思考をはたらかせると……ああ、朝のアレは全部そういうことかい。

「心当たりはあったか？」

「ああ……バッチリすぎるほどに、な」

「しかし霧隠の趣味は無口だったのか。意外だったな」

「いや、別に俺とレキはそういうんじゃないってだな……」

「お前は危険物件に手を出しちゃったからな。もう安息の日はないぜー。ハハハ、死ねリア充!」

ああ、視線の主はレキ教信者でしたか……めんどくせー。もうすぐ文化祭だったのに、何でこう何度も面倒が降りかかるんだ？

思わず溜息をついてしまう。

そのときだった。

「すみません。ご一緒してもよろしいでしょうか」

背後から突然かけられる声。振り返れば、渦中の一人にして元凶であるレキだった。

「おーおー、突然の彼女のご登場とは見せ付けてくれるじゃねえか！妬けるぜ」

「黙れ武藤。好きな奴にロクに声もかけられないヘタレには言われたくねえ」

「な、な、な！証拠のない、う、嘘は………」

「そうか、そう出るか。あーそういや、お前の妹さん——貴希だったか？」

「い、いきなり何で妹の名前が出るんだ………てか、何でお前が知ってやがる!？」

甘いぜ武藤。忍者に調べられないことなどちよつとしかない!!

「で、その貴希に教えてやろうかと思ってな、お前が好きな人の名前は、ほとg」

「すみませんしたあああああ!!」

そう、^{それ}土下座こそお前が俺に常日頃から取るべき姿勢さ。だが、その前に忘れちゃダメだな。

「おい、レキ……。お前の信者のせいでこちららストマツクに甚大な被害を被ってんだが」

何か後ろから、『我らのレキ様に責任なすりつけてんじゃねえぞ』と聞こえたが、そんなの気にしない。

「すみません。ですが、私はそのような団体は認知していないので」

何か後ろから、『れ、レキ様あ……。がはあっ!』と集団略血の音が聞こえたが、そんなの気にしない。

いつの間にか武藤は一つ横にずれ、レキが俺の隣に陣取っていた。だが、学食に来てまで食うのがカロリーメイトってどうなの? いや、俺も好きだけどさ、チーズ味。一番好きなのはメープル味だがな。

いや、それもどうだっていいや。

「とにかく、お前とレキは今や時の人ってわけだ」

ああ、ありがとうキンジ。認めたくない現実を突きつけてくれて。

落ち込む俺と何も感じないように虚空を見るレキ。

(こうなったら、徹底的に調あらっべ上げてやる。風だかウルスだか知らないが、タダで俺をものに出来るなんて思うんじゃねえぞ!)

これ以上振り回されないためにも、俺は今度は自分から打って出る決意をこの食堂で誓ったのだった。

幸いというか、レキは何やら用事があると言って、武藤とどこかに行った。おーおー、そのままゴールインでもしといってくれないかな？と、叶わない望みを抱きつつ、俺は通信科コネクトの専門棟の廊下に、足音を響かせている。

今日は劇の練習は休みの日なので、午後は自由だ。

だから、今朝予約を取った彼女に、依頼の物品ブツを持って行くのだ。

目当ての部屋、土足厳禁の音響学講義室に彼女はいる。スリッパに履き替えて、扉を開けた。

「中空知ー。いるかー」

ちなみに今のは部屋の中に呼びかけたのではない。手元のケータイだ。

男が苦手なのか単なる人見知りなのか、中空知は面と向かっての会話が壊滅的だと、ここ数ヶ月で判明した。なので、これはその対策だ。

『はい、お待ちしていました。霧隠さん。ご依頼の品は？』

「おー、これだこれ」

そう言って、俺は手元からマイクロSDを取り出した。これは、レキがシャワーを浴びている間にこっそりMP3プレイヤーを拝借して抽出した、雑音としか思えない音が入っている。

それを、大机の上に置いて後ろを向く。これも顔を合わせないための配慮だ。

『ではお借りしますね。今朝連絡でおっしゃられていた通り、音響解析をすればいいのですね?』

「ああ、音はお前の畑だろうと思ったからな。雑音しか俺には聞こえないんだが、一体何の音なのかを教えてもらえればありがたい。」

『では、期待に答えられるよう頑張らせてもらいます。出来れば、レキさんの使用されているヘッドフォンの型が分かればいいのですが』

「それなら調べてきた。ゼンハイザーのPMX990だ」

『助かります。それは——此方にありますね。では、少々お待ちください』

そう言って中空知がヘッドフォンを被る音が聞こえた。俺は黙って結果を待つ。

『・・・・・・・・とても・・・・・・・・広いところ』

ケータイから中空知の声が再び聞こえてきた。

『音の反響と速度から、海拔の高い、広い草原で録音されたものと思われます』

さすがは音響捜査のプロ。本来パソコンを必要とする技術を、耳で

やっつてのける技能は流石に俺も真似出来ない。耳はいいけど、判別や分析するのは苦手なんだよな。

『近くには――擦れる音の具合から、シベリアカラマツの森が散在していますと推測されます。他の低木も鑑みると、モンゴルの北部から東シベリアのどこかでしょう』

あんな日本人のような顔なのに、レキは外人さんだったのか？ いや、ハーフって可能性もあるか。

『この呼吸音は……モンゴル古馬の末裔、プシュバルスキ
ー馬……。それに、こちらはハイイロオオカミの亜種、ツ
ンドラオオカミです。普通の狼より大きいのが特徴です』

お、狼？ 狼ですか？

『あつ。今かすかですが、人の会話が聞こえました。これは……
・・聞いたことがない言語ですね。基本はロシア語ですが、日本語
と……古い、元朝以前のモンゴル語が混ざっています』

その謎言語も大概だが、お前も何でそんなに知ってるんだよ。しかも、モンゴル語じゃなくて古いモンゴル語まで理解できるなんて、通信科って何を勉強するんだ？

少し中空知の過ごしている授業に疑問を抱きつつも、予想以上に大漁の収穫だったのは嬉しい誤算だ。これは報酬を奮発せねば。

「とにかく助かった。それだけ分かれば後は自分で調べられる」

『お役に立てた様で何よりです。では、これはお返ししておきます』

スツとSDカードが置かれたのを確認し、それをポケットに突っ込んで礼を言いながら、俺は部屋を後にした。

「О, ああ С п а с и б о きょうりよく з а П о м о щ ь ありがとう」

感謝の言葉を述べてから、通話終了のボタンを押す。

ロシア向こうの時間帯とか無視して、レキについて調べものをしてもらったのだ。まあ、日本と時間はほとんど変わらないんだけどな。

ケータイをポケットに突っ込み、俺は歩いて自室に向かう。

中空知に出身地に関するヒントをもらったあと、俺は教務科^{マスタース}で経歴を洗っていた。

本当はこういうのは第三者にやってもらうのが定石なんだが、俺には骨肉細工があるのでまずバレることはない。そういう点で結構重宝している。

しかし、日本に来る前の情報があまりにも少ないことに気付き、昔の繋がりを頼ってモスクワ武偵局のお偉いさんに色々当たってもらった。

結果ビンゴ。レキは、武偵憲章を批准する前のロシアや中国で、所謂記録に残らない仕事^{スリーパー}なんかをしていたようだ。

それに関しては、俺は別に何とも思わない。むしろ、レキみたいな可愛い子にそんな汚れ仕事をやらせた奴らに俺は怒っている。

とにかく、レキが海外出身なのは間違いなさそうだ。電話の相手には、引き続きレキの故郷の詳細を調べてもらっている。これは以前に貸した分だから金はいらないらしい。

さて、そうこうしてるうちに寮に着いた……って、ありや車輛科の軽トラじゃねえか。誰か引越してもしてきたのか？

不思議に思いながら階段を上って部屋がある階に着くと、なぜか自室前にレキと武藤がいた。

レキは……ああ、キーがなくて入れなかったってことか。

俺の部屋は進入対策用に偽造キーを差し込むと放電するように細工してあるから、俺が管理してるキーでしか開かないからな。

で、武藤は何でいるんだ？

疑問符を浮かべながらも、俺は二人に声をかけることにした。というかどのみち気付かれる。

「おーい、二人してなにしてんだー」

「お、やっとな旦那の登場か」

「誰が旦那だ」

俺の突っ込みはスルーして、武藤が自分の横の荷物を見せてくる。

「おら、ここまで運んでやったんだ。後はてめェらでやっとけ」

「武藤さん、ありがとうございました」

レキが武藤に礼を言う。いや、レキ。そいつには罵倒ならまだしも、感謝なんぞいらねえぞ。

「いってことよ」

俺が何の話か理解できないうちに、武藤はこの場を離脱していきやがった。仕方がないので、俺はレキに問いただすことにする。

「何でアイツが来てたんだ？てかそのダンボールは何よ？」

レキの隣に積まれた、明らかに通行の邪魔になるダンボール三箱を指差して言う。

「私の部屋に置いてあったものです。私が武藤さんに依頼して、ここに運んでいただきました」

そこで俺は脳裏に、レキと武藤が言っていたことを思い出した。

——部屋に何もないことに関しては、私も同じなので気になりません。整備についても、明日には解決します。

——んで、そいつはレキの隠れファンの一人でよォ——まあ俺は別
口で知ったんだが……お前、今日何か妙なことがあったか？

「そういうことかい。じゃあ何？最初っからお前、ここに泊まるどころか居候する気だったと？」

「はい。才蔵さんと共に暮らす、と言いました。いつでもあなたを主人に迎え入れるためです」

「はっはっはっはっは……」

「こん……ちつくせえう!!」

押しかけでござる（後書き）

はい、こっから真面目な話。ってかただの愚痴。

「お前の愚痴なんざ酒のつまみにもなりやせんよ」

って方は、別に飛ばしてもらって無問題。モーマンタイ

あ、この小説でまともな口調なの初めてッスね（笑）

まあ、何があったかっていいますとね。まず最初に

「俺のハートは何製か」

っていうところからなんですよ。

どうでもいいことですが、これ結構大事。百点満点の配点十点分ぐらい大事。

ガラス？ノン

紙？激しくノン

強化ガラス？ノノノノノ

答えはダイヤモンドです。

強いじゃんかって？ええ、確かにそこその強度は自負してますよ。

どんなに削られても耐え（るつもりでい）ますから。

でもね、在りし日のトリビアを見てた人なら分かるでしょ？

ダイヤって、教授のトンカチで簡単にポーン行くんです。

粉々ですよ。微塵もないですよ。

と、うだうだ言ってたんですが、つもるところね。

萎えた

この一言に尽きますよ。前の後書きにもチラッと書いた気がしないでもないんですが、批評・批判は受け付けます。そりゃ、まがりなりにも落ち度はこっちにある場合が多いんですから。しっかり受け止めて糧にしますともさ。ごりごり精神を削られようとも、この身続く限り！

はい、嘘です。さすがに削られ続けたら消えます。ま、それはおい

といて。

でもな、罵倒。お前はダメだ。

何の脈絡も理由も根拠もなく当て逃げのように悪口だけ置いてく輩、いますよね？

自分もですね、いろんな二次創作見てて、

「悪口で執筆休止か……ホントかな？」

なんて、ちよいとちよいとおまいさん、みたいな甘っちょろい考えだったんですがね、自分もやられちまってはつきり理解しました。

ああ、こりや萎えるわ

上から衝撃ドーンですよ。

いや自分ね、結構感想楽しみにしてるんですよ。

来てるの見つけたらリアルに「ウキヤハイ！」って言うときもあるくらいに。

で、今回もウキヤハイしながら開いたんですよ。

ハイ、罵倒。↑わさび風に。なぜかといえば今のドラは嫌いだから。

もはや萎えを通り越して殺意がマッハ。でもネットだから無理ング。

殺意が反転して萎えに戻った。

しかも書いてあった名前見て、

「殺意があるのはむしろ向こうじゃんWWW」↑見事黒歴史追加

と、一人で思っで一人で身悶え。

閑話休題

もうね、一瞬マジで停止も考えました、ハイ。

でもまあ、こんな駄作でも読んでくださる方々がいる以上、普段からアレなのにネットでもでんな無責任でどうすんべさ。と思い直し踏ん張ることに。

一応感想をユーザーのみにするかも検討したんですが、それもなんか悪質なテロリストに屈するみたいで俺の薄っぺらいプライドが許さない。

てことで長々愚痴みたいなもん垂れ流しちゃいましたが、結論はコレです。

俺を励まして♪

うん、自分で書いてて自分に殺意が沸いた。しかも萎えに変わらないよ。

アレです。「バクマン。」です。PCPです。規模が違うね。てか最近のジャンプ読んでないとイミフだね。

日本語に訳せば、私に皆さんの愛の慈悲を！ってわけです。

一言、いや一文字でも結構です。何か優しい言葉を掛けてください。それを糧にPCに向かいます。

別に来なくても書くからいいんだけどさ！

八月一日編集

— — —
ω
・
、
)

『霧隠幻想録』

ダイジェストでござる（前書き）

（　。　。）

（　ㄐ　ㄐ　）　ゴシゴシ

（　；　。　。）

（　　ㄐ　ㄐ　）　ゴシゴシ

（　；　ㄐ　）　。　。

は、励ましが・・・・・・・・三十件近く来た、でござる・・・・・・・・
！？

さすがに0はないとは思っていたが、せいぜい五、六件だと思って
いたでござる。

思ってた以上にいろんな人に見てもらえていたんでござるなァ・・・
・・・としみじみ。

ほんとうにありがとうございます。返事はちよつとずつ返していく
でござるが、一気には大変なので取り合えずここでお礼にかえさせ
てもらおうでござる。

さて、何とか今日中に書き上げた番外編。今回の記念は次の二つ
でござる。

テストに苦しんでる間に何か超えてた総合評価1000。

感想に励まされてる間に突破したお気に入り登録500。

ではどうぞでござる。

『霧隠幻想録』

ダイジェストでござる

霧隠才蔵六歳。リリカらないしマジカらないけど、そこそこ頑張ります。

シャーロックに勧誘され、夜にまた来ると言って奴が立ち去った後。最初は大変だった。半年前にどんな姿で部屋を借りてたか忘れてたから。さすがに六歳のガキが何しようと部屋なんぞ借りれるはずがないので、骨肉細工で大人の姿になって一度部屋を借りたんだが、その後は

早朝から修行

昼は現地調達

夕方に商店街に寄り、おっちゃんおばちゃんに売れ残りの豆腐とか魚を貰う

深夜に帰宅して料理

って感じに生活してたから、一切近所さんと交流がない不気味な住人って認識だったと思う。え？小学校？んなもん誰が行くか。俺はリアルバーロー小坊になる気は毛頭ない。

で、まあ大家に挨拶に行く姿をウンウン唸りながら考えていたところに、迎えに来たシャーロックが一言。

「何も言わずに出て行けばいいのではないかな？」

衝撃だった。自分の脳みその残念さに。精神が肉体に引っ張られた覚えはなかったんだがな。こういうのは自覚できずに起きるのかもしれない。

で、持ってくるものなんぞ僅かな金と着替え、忍具くらいなので十分で用意完了。シャーロックに歩いて付いて行くことになった。

アパートの前に何もないのを見て、リムジンとかそんなんはないのか聞いたがそんなものはないとのこと。

やっぱり貧乏人の憧れの一つに、無駄に長い黒塗りリムジンの中で飲み物を飲むっていうのがあったので、ちよつとテンション下がった。

連れてこられたのは、人気のない海辺。周囲にはポツポツと民家の明かりが見えるだけだ。

「さあ、ではイ・ウーへの直行便への搭乗だ。準備はいいね？」

「いや、何もなくてね？」

前にはひたすらに海、背後と左右は砂浜しかない。しかし、ここで終わらないのがイ・ウークオリティらしい。俺が後ろの確認をした間にか、横倒しのロケットのような黒い物体が浮上している。

「これは『オルクス』。スーパードキヤビテーション海水気化魚雷を改造した小型潜航艇だよ。

では僕に続いて乗りたまえ」

「おうよ……って、痛っ！」

ものすごく自然に乗り込むから、中は不思議変態技術による四次元空間にでもなっているのかと思いきや、そんなことは全然なかったぜ。

前を見たらシャーロックがテンプルにカチンとくる微笑を浮かべていたので、取り合えず後頭部をド突いてから、俺は備え付けのヘルメットを被った。

はい、やって参りましたよイ・ウー本拠地。いや、来てみて驚き桃の木。

――伊・U

伊は日本の、Uはドイツの、それぞれ潜水艦を示す暗号である。

正式名称は『ボストーク号』。1979年に行方不明となった、戦略ミサイルを搭載していた悲劇の超アクラ級原子力潜水艦。それが今まさに、俺が足をつけた船の正体、らしい。

らしいというのは、別に俺は原潜にロマンを感じたりするタイプではないからで、ここにくる途中に『講義』と称した、教え好きシャーロックの趣味につき合わされたからだ。

で、イ・ウーってのはシャーロックが盗み出したボストーク号に書かれていた伊・Uをそのまま読んだものらしい。

「お前探偵の癖に怪盗みたいなことしてんじゃねえよ」

「昔知人の警部にも釘を刺されたよ。お前が犯罪者になると手が付けられないからするな。そう言われたね」

「どこの誰か知らない警部殿……シャーロックは結局こんな悪い子に育ってしまいましたよ。どうか厳しき沙汰を！」

「ふむ。それは今度の話にしよう。霧隠才蔵君、改めてイ・ウーへの入学を歓迎するよ。ここでは君は生徒であると同時に教師でもある。超人同士、錬磨し合い高みに至る努力に励んでくれたまえ」

「わかった。で、シャーロック――」

「ああ、待ちたまえ。それでも、僕は一応ここにいる無法者を束ねるリーダーなんだ。プライベートはともかくとして、人の目があるところでは『教授』^{プロフェッショナル}と呼んでくれたまえ」

「何で俺は、初々しいカップルの女子が、「周囲に關係を知られないように、学校では前と変わらない呼び方にしてね」と言うシチュを、見た目詐欺の爺さん相手に体験せねばならんのだ」

「……君は本当に六歳なのか、たった一日で疑問に思えてきたよ。実は見た目と中身がかみ合っていないなんて言わないかい？」

「そりゃお前だろ」

「ははは。それもそうだね」

ソ墓穴つたあああああ！！。つぶねえええええええ！！オモツク

やばいぞやばいぞ。俺、考案忍者スキルの一つである、表情から心音果ては血流や汗腺に至るまでを短時間ではあるが完全に掌握する全身ポーカーフエイスで乗り切りはしたが、常に気を張ってないと、マジでバレル心配大！！

幸いにも、おそらく今回は乗り切れた……と、信じておこう。天然チート相手は本当に神経使うよ。最近俺は本当にチート主人公なのかマジで疑問。正直貫った能力は、チートというよりは、タグに「微妙チート」だの、「チート（笑）」とか書かれちゃうタイプだと思う。

「では新入生の自己紹介といこうじゃないか」

やや思考の海に入っていた俺は、シャーロックのその一言で覚醒した。

で、挨拶ですか？

これから人外の宴に突き落とされるんですわかります。

ここからは駆け足で進んでいくぜ。タイトルにも『ダイジエスト』って書いてあるからな。

まず来てから俺の担当上役について聞かされたんだが、どういうわけだか『教授』本人自らが直々に指南鞭撻をしてくれると聞かされた。それについて、イ・ウーのナンバー2だというパトラとやらに、高慢ちきちきお嬢様理論を垂れ流されたため、ほんの少しだけ毒を吐いてやった。

それ以来、艦内ですれ違おうものなら即座にそこが戦場と化すようになった。

イ・ウーにいる連中は、皆何かしらの目標を目指して修行に励んでいるらしい。それを大まかに分けると二派閥。『教授』の理念の元、ただ目的のためだけに己の力を高めんとする『研鑽派』^{ダイオ}と、その目標が総じて世界制服とかいう危ない連中の集まりの『主戦派』^{イグナティス}。だが俺は、そんな派閥の理念以前にパトラが『主戦派』の筆頭格と聞いてすぐさま『研鑽派』への所属を表明した。

『教授』に聞かれて答えた俺の目的は、世界中の高名な財宝を手中に収めること。というか普通に金儲け。財宝を手に入れるとか某慢心王に似ているが、別に学術的価値とかそんなのはいらぬ。ただ純粹に換金した時の価値のみが重要だ。

『教授』から、バリツを中心に戦闘技法や様々な武器の扱いを学び、俺は逆に『暗器使い』と『忍法・骨肉細工』を教えた。

本当なら奥の手として隠しておきたかったが、絶対にいつかバレる
と思ったので素直に披露した。

めだかボックスでも、本家である宗像形は黒神真黒によって暗器を
習得したため出来るとは思っていたが、『教授』は一週間とかから
ずに『暗器使い』を会得した。しかし『忍法・骨肉細工』^{ステルス}に関して
は無理だった。『教授』は最初、超能力の一種だと思っていたらし
いがそれは違う。これは純粋に肉体のみで行う技術だ。出来なかつ
たときの奴の少しがっかりした顔を見て、胸がかなりスッキリした
ことを記しておく。

その後、『教授』以外の奴らにも教えて教わったが、結局他には誰
も『骨肉細工』どころか『暗器使い』すら会得出来たものは現れな
かった。

それから四年後。俺はその時にはすでにかなりの力を得ていて、イ・
ウーではパトラに次ぐナンバー3、『研鑽派』ではリーダー格の地
位を得ていた。とは言っても、ならず者の集まりにあって権力を保
持しているのはトップの『教授』だけで、パトラや俺の地位はせい
ぜい力の誇示程度の意味しか持たないわけだが。

俺が今までに盗んだ被害総額はすでに十一桁に上る。しかし現場の
監視カメラ等には一切姿を見せないため、半ば都市伝説のような扱
いの怪人『怪盗宵闇』^{トワイライト}とかいう異名が付いた。今捕まったら懲役二
百六十三年だそうだ（笑）。

そんなある日、フラツといなくなった『教授』が、俺と同年らし
い一人の少女を連れて帰ってきた。小奇麗な服を着た様子はどこか

の令嬢のように見えるが、どこか怯えた様子をしていた、というのが最初の印象だった。

名前は、理子・峰・リュパン4世。

かつてフランスを席卷した大怪盗にして、『教授』ことシャーロック・ホームズの終生のライバルである、アルセーヌ・リュパン。彼女はその曾孫らしい。

考えてみれば随分と皮肉なもんだ。

世界最高にして最強だった名探偵は、今では世界最強の犯罪者集団のトップに君臨。かつて命を賭けて戦った仇敵、モリアーティ教授と同じ『教授』の異名を持ち、果てはライバルの子孫を懷に抱きこんだわけなのだから。

彼女の紹介の後で意見を求められ、「ずっとルパンだと思ってた」と言ったときの、「そんなどうでもいい感想しかないのかい、君は」という感じのあのシャーロックの顔は、思わず顔パンした俺に一切罪がないと思える顔だったことを記す。

理子が怯えていた正体は吸血鬼だった。何じゃそら。と思っていた。

気付けば、地図のどこにあるかも分からない無人島。ボストーク号の整備なんかをするために一年に一回くらい寄港する隠れ家なんだが、今俺はそこにいる。

なぜかって？戦うからだ。その吸血鬼と。俺が。

WHY?

初め、理子を連れ戻すとかのたまって、寄港中のイ・ウーに強襲してきた吸血鬼・ブラド。

かのルーマニア、ワラキア領の領主であった『串刺し公』ブラド・ツェペシュ本人らしい。

ここまで来たら、もう妖怪とかターミネーターとか出てきても驚かない。というより、一回だが神にだって会ったことあるしな。

とにかく、ブラドは、監禁してた理子に逃げられたから返せと言ってきたのだ。そりゃ逃げられたらお前の負けだろ。と言ったらキレられ、それを見たシャーロックが、俺に勝ったら理子は返すと言いやがった。本人の了承なく。

それを聞いた理子の絶望しきった顔を見て、思わず張り倒した俺は短気な子。

詳細はめんどくさいので結果だけ言えば、俺は勝った。

コレだけだとあっさり勝ったみたいに使われてしまうかもしれないので、正確に言うとかかなりギリギリで勝った。

何で舌に目ン玉あんだよ。と毒づきながら、死に体のデカブツを、こちらもボロボロの身体で引き摺ってイ・ウーに帰還。出迎えた『教授』を張り倒して、驚愕する理子にドヤ顔をして張り倒されたのもいい思い出。

その数日後、なぜか小夜鳴とかいうムカつくイケメンと、バツキン髪金少女が入学してきた。少女はヒルダと言ってブラドの娘らしい。

そして何より驚いたのが、小夜鳴がブラドの擬態ということ。おいおい嘘だと言ってくれよバーニィ。メタモルフオーゼあんな化物がイケメンに変身なぞ、全宇宙の真理が捻れ狂ってるようにしか思えないじゃないカ。

それよりも怖いのはヒルダだ。何か、お父様の仇とかほざいて襲ってくるかもしれない。

そう警戒していたヒルダに、なぜか兄様にいさまと呼ばれたときは、対応に困るどころじゃなかった。何でも、父を撃破した人間は初めて——しかも子供——なので興味が沸いたのだとか。

「実年齢はお前のほうが上j——」

言い切る前にサートシ君状態にされたため、今でも呼び方は変えられていない。

そしてその一年後。つまり今なんだが、またも『教授』が新入生を連れて来た。

「さあ、ではこれから君の、教師となり、生徒となる先輩たちに挨拶をしてくれたまえ」

「わかった」

騎士甲冑のようなものに身を包んだ、銀髪にサファイアのような碧

眼を持つ美少女。

彼女はこう名乗った。

「私はジャンヌ。ジャンヌ・ダルク30世だ」

こうして、俺たちは初めての邂逅を果たしたのだった。

『霧隠幻想録』 ダイジェストでござる（後書き）

考察

その壺 イ・ウーのメンバーの数は？

原作にあった限り、五巻のラストでイ・ウーから脱出したのが七人乗っていたのが誰だかは分らないが、取り合えず二つはココ三姉妹の炮娘と、ヒルダと仮定。そこにブラド、パトラ、カナ、ジャンヌ、理子くらいが大体のメンバー。でもあとの五人が不明。

少しだけ捏造も考えはしたが、今の原作の展開的にまだ出てくる可能性は大。よって描写はカット。

その式

いつごろからメンバーはイ・ウーにいたのか。

■カナ

一番分かりやすいのがカナ。浦賀沖海難事故が起きたのが原作の少し前の冬。つまり二〇〇八年の十二月にイ・ウーに入学。カナはキンジより四から五歳差なので、この小説では五歳差として話を進める。

■ ジャンヌ

ジャンヌは自分がイ・ウー最弱だということ以外はまったく言っていないため、「魔剣」^{デュランダル}としての活動と合わせ見て、才蔵にかなりの力がついた原作六年前に入学したことにする。

■ 理子

理子は幼いころにブラドの元を脱走したとしか書いていないので、この小説では十歳——原作の七年前——で逃げ出してイ・ウーに来たことにする。

■ ブラド、ヒルダ

ブラドは理子を追いかけてイ・ウーを強襲してシャーロックに負け、理子の監視も兼ねてイ・ウーに所属したことになる。そのため、入学は理子と同年に仮定。

■ パトラ

パトラは自ら、ブラド親娘をイ・ウーに推薦したと語っている。ここから少なくともパトラは、原作の七年前にはイ・ウーでそこそこの発言力を持っていたことになる。事実、ブラドよりも上のナンバ12だったと描写があるため、彼女は才蔵よりも先輩の設定にする。そして彼女がイ・ウーを追放されたのは少なくともカナが来てからのため、原作開始あたりで追放されることにする。

■ 炮娘

炮娘についてはまったく謎なので、ジャンヌの一年後くらいにする。

パトラとの舌戦の内容と、ブラドとの戦闘。この二つは本編でこれからやる予定のものを、さらにSな性格の才蔵が行ったと考えてくれればいいでござる。

所詮記念番外編なので、一回でかなり展開を進めねばならぬのが難点でござるな。

では、次回はジャンヌ魔改造計画始動の予定でござる。

アンケートというわけではござらんが、何か魔改造の参考になる意見・アイデアがあればいつでも歓迎でござる。

お知らせ（前書き）

本編じゃなくてすいませんでござる。

お知らせ

予定では、後三話程度で第一章完結でござる。

その後は原作に入るだけでござるが、その間は半年近く空いでいるでござるよ。

で、原作までの空白期間を埋める「閑の章」をやるのでござるが、それについてアンケート！

今のところの今後の予定では、文化祭、クリスマス、年末年始、バレンタインとイベントを想定しているのでござるが、他に何か季節のイベントアイデアを募集するでござる。

ただイベント名だけ書いて、テツオの裁量に全て任せる冒険をするもよし。

具体的な話の内容も書いて要望をする安全牌を取るもよし。

条件はただ二つ。

ほのぼのイベントだということ。

11月～3月中の、一日限定イベントinジャパンだということ、の二つでござる。

では、宛先はこちら。「テツオ」のユーザーページのメッセージ送信まで。ネタバレを防ぐため、感想に送るのはお控えを。

件名は「才蔵&a m p,レキのキャツキャウフフなデート日和」でござる！採用の方には載せる前に返信をするでござるよ。

締め切りは原作に入るまででござる。また、時間が経過することになるイベントは減っていくため、秋や年末のイベントに要望がある方は、お早めにでござる。

では、たくさんのご応募お待ちしておりますでござる。

容姿設定でござる（前書き）

今回は、「閑の章」本編の前のおまけみたいなものでござる。

本文中に、今日世界史の授業中に書いて家で色を塗ったイラストがあるでござる。

しかし、ここまで読んでくださった読者の方々のイメージする才蔵とは、なかなか大きく違う可能性があるため見る際はご注意を。イメージを守り続けたい方は見ないことを推奨するでござる。

そして作者に絵の才能はないでござるゆえ、あしからず。

容姿設定でいえる

> i 2 6 5 4 3 — 3 3 8 4 <

【身長】

178cmくらいを想定

【髪型】

原作中に出てくる男性陣に被らない髪型にしようとしたら、いつの間にかツンツンになってました

【目】

イラスト全体を見て、読者の方が一番違和感を感じたであろう目の色については、初代霧隠才蔵をイメージしたものです。十勇士の霧隠才蔵は日本人じゃないですから

【手】

これについては完全にミステイクでしたね。右手と左手のポーズは逆にして、オートメイル機械鎧をしっかりと見せるべきだったと色を塗り始めてから後悔

【服】

「黒は地味だし赤は武藤と被るんだよね……なら迷彩でいいか。諜報科っぽいし」って感じで決まりました。中のシャツは何となく着せませんでした。必然的にネクタイもないです。……
・もしかしたら校則違反かもしれませんね（笑）

【靴】

カッコいいデザインが全然思い浮かばなかったので半ばヤケクソで書きました。一応名前は『迅雷』です。全力で走ると火花が飛び散る、というのが由来です

【アクセサリー】

首から掛けているアクセサリーは、『永楽通寶』という実際に戦国時代に使われていた一文銭を模したものです。真田氏の家紋である六文銭を髣髴させようとして掛けさせました。さすがに本物は汚いのでレプリカですが

今となってはどうでもいいことですが、転生前の容姿は、イラストの髪と目の色を黒にするだけです。元から美形だったんですね

容姿設定でござる（後書き）

本編は、今の調子を見る限り明日か明後日くらいには更新できそう
でござる。

そして、あとちょっとで、番外編を書くためのノルマにPVが差し
掛かるでござるよ。

ではまた。

『霧隠幻想録』

(魔) 改造でござる (前書き)

何か色々突破したでござる。ついでに文字数もノリノリで書いてたら最長記録更新したでござる。イエイ。

PVアクセス55万突破

ユニーク7万5000突破

総合評価2000突破

わーパチパチパチ。そんなわけで、これからもこの作品をよろしく願ひするでござる。

《ピンポンパンポーン》今回の注意点

原作ジャンヌしか認めない！という方はお引取りを。キャラがかなり変わります。てかもはや別人です。

『霧隠幻想録』

(魔) 改造でいざる

「さて、ジャンヌ君。君の担当上役は、そこにいる霧隠君だ。こう見えてもこの組織の実質上のナンバーツーだから、わからないことがあれば遠慮せず頼りなさい」

「わかった」

「おい。担当とか初耳なんですけどー。てかこう見えてってどういうことだコラ」

「これが君の部屋のカードキーだ。他にも必要なものがあれば言いなさい」

「わかった」

「おい。俺、担当じゃないけど一応理子の面倒も見ただけどー」

「では皆解散して構わないよ」

わいわいがやがや・・・・・・・・

「スルーですかちくせう」

世知辛い気分になりながらも、言われたことはキッチンと行おうと、ジャンヌとやらに近づく。

「今『教授』^{プロフェッショナル}が言ったとおりだ。お前の担当に当たる霧隠才蔵。よろしく」

「先ほども名乗ったが、ジャンヌ・ダルク30世だ。よろしくたのむ」

ジャンヌ・ダルクってたしか処刑されたんじゃないかな？まあ、生き残ってたんだったらそれはそれでいいんだけど。

だいぶ人も少なくなったことだし、ジャンヌの性格を把握するための質問をするでしょう。

「なあジャンヌ。お前、今の時点で自分がどれくらい強いと思ってるよ？」

俺の問いに、ジャンヌは胸を張ってこう答えた。

「無論、^{ハッ}イ・ウーでも上位に食い込めるほどだと思っている。私は^{ステルス}種超能力者であり、策の一族の末裔なのだ。そして^{デュランダル}聖剣まで持ち合わせている。勝てないはずがないだろう？」

ああ……コイツ、あれだ。

『身の程知らず』。

イ・ウーに来る奴にはたまにいるんだよな……。なまじつか周り以上の力を持っていたばかりに、自分を最強か何かと勘違いしてる奴。外での評価なんぞ、イ・ウーでは無駄なのに。

まあ、そんなら俺の最初の仕事はコイツの鼻っ柱を折ることだな。

しかし俺はレベルが違いすぎるわけだから説得力に欠ける。さて、手ごろな奴は誰か……。アイツでいいや。聞いた話同年っぽいし。

「おーい、ツアオ・ツアオ！」

集まった人影の中から、黒髪ツインテの少女を呼び出す。イ・ウーの技術士である彼女、ツアオ・ツアオは同時に中国武術の達人でもある。

民族衣装に身を包んだ少女が、タタタと駆けて来た。

「何ね、サイズ。ようやくツアオ・ツアオを口説く気になったか？」

……。なぜか、奴がどっかの外部組織からここに来た数週間後から、会うたびに誘惑してくるわけの分からん奴でもあるのだが。

「寝言は寝て言えちんちくりん」

「ち……。ちんちく……。！」

「俺は『主戦派』^{イグナテイス}の野蠻人^{ロリコンども}と違って、ミニマムボディにもツインテールにも気色悪い執着はしねえよ」

たしかコイツ、次期『教授』候補を真似てるんだったか？で、仮想としての対象に丁度いいとか何とか。『研鑽派』^{ダイオ}の俺にはどうでもいい話だが。

「耶威耶威耶ッ！その言葉、後悔させてやるネ！へあっ！」

構えを取って、俺に攻撃を食らわそうとするツアオ・ツアオの脳天をデコピンで揺らす。

「跳びかかんなら俺じゃなくてジャンヌにしろ。どうせそのつもりだったし」

「霧隠？」

「ジャンヌ。取り合えず、これからお前が過ごす世界について手っ取り早く教えてやる。そのツアオ・ツアオはイ・ウーでは雑魚の部類だ。『最強』のお前なら勝てるだろ？」

「雑魚とは何ネ!!」

俺の言葉に納得したのか、ジャンヌが首肯する。

「なるほど。実力を把握するということか。いいだろう、お前に見せてやる。六百年の光の歴史を」

・・・・・・・・で。

「さて、井の中の蛙ちゃん。ここが化物の巣窟だ」

「くっ・・・・・・・・うっ・・・・・・・・ううっ・・・・・・・・」

「へへん。バーカバーカ。超能力者も所詮、ツアオ・ツアオの敵じゃないネ！わかったら大人しくひれ伏すヨロシ」

「ツアオ・ツアオはもう帰っていいぞ。というかむしろ帰って下さい。てかうっさいから帰れ」

これぞ帰れの三段活用。しかしバカは俺の言うことが聞こえなかったのか、まったく似合わないしなをつくり出した。

「……ツアオ・ツアオ今日は帰りたくないネ。サイズ、今晚にでもツアオ・ツアオを抱いて……」

スタッフ
「理子ウー」

「はいはい！ほーらツアオ・ツアオ。子供はお眠のお時間ですよー」

「！い、いつの間——我放！理子！！耶アアアア！！」

どこからかやってきた理子が、ツアオ・ツアオの首筋をひっ捕らえて出て行く。

いい感じに明るくなった理子は、ちょうどツアオ・ツアオと互いの技術を教えあっている最中らしい。俺が水面下で色々動いたことでブラドからは完全に解放されたが、今は純粹に自分の力を高めるとか言ってた。頑張れー。

ボタン！

ツアオ・ツアオの悲鳴を吸い込むように扉が閉じられ、俺と地に倒

れ伏して小さく嗚咽するジャンヌだけが、室内に残された。

「・・・・・・・・惨めだな」

「！」

「鼻をへし折られた天狗とはまさにこういう奴を指すんだろう。いやはや、我らが先祖もいいことを言うぜ」

「貴様・・・・・・・・！」

いい眼だジャンヌ。その憎しみを力に変えて強くなれ！なんてな。

「だがジャンヌ、お前は幸運だ」

膝を曲げて、うつ伏せのジャンヌに視線を近づける。

「何せ、俺がイ・ウーでの最初の教師役なんだから、よっと」

「何を・・・・・・・・って、なななな何をするんだ霧隠え！！」

ジャンヌを横に抱きかかえて持ち上げると、いきなり赤面&猛抗議。しかし徹底的にツアオ・ツアオに痛めつけられていたためか、暴れたりはない。

「ジャンヌ・ダルク30世」

「！・・・・・・・・なんだ」

きつとこのときの俺は、今までにないくらいに笑っていたはずだ。

理子あたりが見れば、きつと尋常じゃない量の冷や汗をかくだろう
いい笑顔を浮かべながら、俺はこう言った。

「強くなってみないか？」

Side 理子

原作ヒロインズで初の視点は、何と理子りんだよぉー！いえー！

「……………いきなりガッツポーズを決めて、どしたネ？」

「何でもないよー？ただ電波を受信しただけなのだぁ！ビビビッ！」
隣を歩くツアオ・ツアオがいぶかしむように見てくる。むー、本当
なのにー。

とにかく、ここ数日あったことを説明するよー！

ツアオ・ツアオとジャンヌが戦った後、落ち着いたジャンヌは理子
が世話するよう言われたの。「職務怠慢だー、プンプン！」って言
ったら、「女のことは女だろ」ってバツサリ！上役だからっておう
ぼー！

ジャンヌは負けて鼻を折られたはずなのに、なーんか嬉しそうだっ
た。訊いてみたら、キリくんが強くしてやるって言ったらしい。で
も、それってなーんか嫌ーな予感がムンムンだったから、理子は注
意しといた。あの正確が捻くれたキリくんが、普通に訓練するなん

て思えないよね。

そして次の日キリくん連れられて訓練室に籠った二人。もう三日になるのにいっこーに出てこない！これは、訓練にかこつけて、キリくんがジャンヌに中でトンでもないエロエロトレーニングをしてるって、理子わかつちやった！だから万が一の生贄にツアオ・ツアオを連れて、差し入れと称して突入しちゃうぞイエー！！

「さ、ツアオ・ツアオ。張り切って開けちゃおー！」

「何で自分で開けないネ。ま、いいアル。是、^{シイ}開けるヨ」

そしてまんまとかかったツアオ・ツアオが、ついに扉を開けた！さーあ、どーんなエロティックな個人教授をしてるのかなあー？ ワクワクしてきちゃった！

「おらどうした！ダニにも劣る下等生物が！もうダウンかみつともない！貴様はもはや蛆すら美しく思えるほどに醜悪なカスだっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

これ、笑うところ？

「はぁ・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・」

「いいかゴミ虫！俺の喜びは貴様の顔が苦痛で歪む様子だ！ババアのマ《ピー》《コみたいに醜くひいひい言いやがって！このフ《ピー》《豚が！残飯が漁りたいなら無様にブヒブヒ鳴いてしろ、《ピー》《

イズ持ちの《ピー》春婦めっ！」

「く・・・・・・・・くそ・・・・・・・・！」

解放された扉の先は、想像してた桃色空間ではなく阿鼻叫喚の地獄絵図だった。ジャージ姿で竹刀をついたキリくんが、丸太を背負ってベトコンを走り続ける汗だくのジャンヌに、間違いなく放送禁止な用語を連発している。私もツアオ・ツアオも、思わず赤くなっちゃった。

「さ、サー・・・・・・・・も、もう・・・・・・・・限界、です・・・・・・・・
・サー」

あ、ジャンヌがベトコンに流された。そこにキリくんが近づいて、竹刀を地面に叩き付ける。

「どうしたジャンヌ。もうギブアップか情けない」

「はっ・・・・・・・・はっ・・・・・・・・」

「所詮貴様の強さへの覚悟などその程度だったということだな。さつさと部屋に帰って、貴様が尊敬するご先祖様とやらの遺影でも抱きながら寝るがいい」

「くっ・・・・・・・・」

「もっとも、貴様のような根性なしのアバズレを生み出す遺伝子を保有していた先祖だ。さぞ救えない死に方をした、醜い淫乱ビツピー》なんだろうよ」

キリくんの暴言に、ジャンヌが目をカッと見開いた。

「我が先祖の……聖乙女の侮辱だけは許さん！」

飛び上がって殴りかかったジャンヌを、合気の要領でひっくり返すキリくん。宙で回転したジャンヌは、ポフンとお尻から落ちた。

「サーはどうした！」

「あ、一応暴力は振るわないんだ。紳士だね」

「紳士はあんなこと言わない思うヨ」

感心する理子の横で、ツアオ・ツアオが言う。いや、分かってるよ。でも、そうとでも思わないと、こんなの見てらんないよ。

「何度でも言おう！ジャンヌ・ダルク一世はアバズレだ！違うと証明したいならもう十分走り続けろ！」

「サー、……やってやります、サー！」

完全な涙目で、ジャンヌが走りるためにベトコンに戻った。それを見て、キリくんがこちらにやって来た。

「何だ。お前たちも一緒に受けたいのか？」

ブンブンブン！！

理子とツアオ・ツアオは、顔が分身するくらいの勢いで拒否した。それを見て「そうか」と言ったキリくん。怖いよブルブル。だから

ジャンヌ、そんな裏切られたみたいな目で見ないで。良心がチクチクだよー!

「わ、私たちは差し入れに来たヨ。全然ここから出てきてないから、コレ作ってきたネ」

ツアオ・ツアオが差し出したバスケットには、私とツアオ・ツアオで作ったサンドイッチが入ってる。しかし、キリくんはそれを見て額に皺を寄せてしまった。

「どったのキリくん?もしかして、もう食事終わっちゃった?」

「や、上等な食事をくれてやっていいものか……」

「イヤイヤイヤ!そこは上げようよハリーハリー!見てて痛々しいよ!」

理子の必死の説得あつてか、キリくんはジャンヌにストップの合図を出してこう言った。

「喜べ雌《ピー》ラ豚!貴様のために食事が与えられる!この二人に感謝をしながら三十時間ぶりの食事を噛み締めな!」

「!サー、イエス、サー!」

「……三十時間?」

Sideジャンヌ

軍曹殿（そう呼べと言われた）が部屋から退出された後、私は、まだ出来て日が浅い友人二人の優しきで与えられたサンドイッチを噛み締めていた。何やら塩辛いがきつとドレッシングか何かだろう。

「な．．．．泣くほど美味か？こ、この前は悪かったヨ。まさかここまでされるとハ．．．．」

「いや、いいのだ。あれは私が慢心してただけだ」

「っていうか、何でこんなことになったの？理子全然分かんない。強くなりたいからってこれは．．．．」

「．．．．ああ、それにはワケがあるのだ」

「目、目が．．．．ジャンヌが遠い目だよ．．．．」

あれは、理子と会った次の日。ここに連れて来られて言われたことだった．．．．。

『さて、強くなるためのプログラムを昨日の夜のうちに考えておいた』

目の前にはジャージ姿で、肩に日本の剣術、ケンドーに使うシナイとやらを担いだ霧隠がそう言った。

『感謝する』

『昨日の戦いを見た限り、お前の本来の戦い方は、罠と策を巡らせて氷の超能力で不意を突く、そんな感じだろ？』

その言葉は中々に驚いた。コイツは昨日の、その……私の惨めな負けからそこまでを見抜いたのだ。これは存外期待できるかもしれない。そう思った。

『だがな、お前は超能力をフルには使い切れていない。凍結の開始から最後までラグが大きすぎるんだよ。それに剣技も全然なっちゃいない』

ぐ……そう言われてしまえばそうなのだが。

『だからお前には三つ、超能力の完全な制御と剣技、そして忍者流の罠を教えようと思う』

『ほう、霧隠はニンジャなのか。それは興味深いな』

極東の地の隠業集団と聞き及ぶニンジャに、ここで出会えるとは思わなかった。何でもいるなイ・ウーは。

聞けば、よく霧隠という少女など、我が先祖である双子のジャンヌ・ダルクが、かの大怪盗であり、峰理子の曾祖父アルセーヌ・リュパンとともに戦った、ブラド・ツェペシュの娘らしい。というか、ブラド本人もいるらしい。どれだけ、因縁の面々が集結してるのだと思わずツツコンでしまったな。

『だがまずは超能力の強化。すなわちATP^{せいしんりよく}の鍛錬と、外部から魔力を供給する方法の会得だ』

『待て。貴様は超能力者なのか？そうは見えないんだが……』

『それはアレ。ここにブラドが持ってきた技術さ』

そう言った霧隠が何やら珠を浮かべたかと思えば、そこから雷撃を奔らせたのだ！

『俺はイ・ウーにいる全ての超能力者の力をほぼ完全に制御できる。これはイ・ウーでも『教授』と俺だけが出来ることだ』

す………凄い。これがイ・ウー。超人がさらなる高みに至れる場所！私は歓喜した。そんなまさに文字通りの『最強』に、直々に調練をしてもらえるのだ！こんなに素晴らしいことはないだろう？

『それじゃまずは、精神力を鍛える修行をする。依存は？』

『ない！早く始めてくれ！』

強くなる。具体的にして明確な目標が目の前にいるのだ。今すぐにも………！

そう、そのときは思っていた。ああ、あのときの私の馬鹿。

『いいだろう。では………』

これより話しかけられたとき以外、その臭う口は閉じておけ！そしてその薄汚い口からクソ垂れるときは、前と後ろに「サー」と付ける豚！！』

．．．．．え？

『き、霧隠．．．．．？何を．．．．．』

『俺のことは軍曹殿と呼べ！このフ《ピー》ツキン雌豚！』

バシーン！

シナイが床に叩きつけられた音に、思わず耳を竦めてしまう。

『返事はどうしたっ！』

『わ、わかつ．．．．．』

バシーン！

『!』

『返事は「サー、イエス、サー!」だ!脳ミソを鼻の穴からファツ《ピー》しないと理解も出来ないか、ライクアババロア!』

『さ、サー、イエス、サー……』

突然の豹変は意味が分からないが、これ以上は怒らせたくなかったので言葉通りにした、のだが……。

バシーン!!

『聞こえないぞ!金玉……は元からないじゃないかクソ虫!クリ《ピー》リスでも摘みながら喋ってるのか貴様!』

『そ!そんなもの弄るわけないだろう!』

バシーン!!

『違うときは「サー、ノー、サー!」だオナニ《ピー》中毒者!』

『さ、サー、ノー、サー!』

『完全に俺の訓練を成し遂げたとき、貴様は一個の大量殺戮兵器となる!しかし!それまでは両生生物のクソをかき集めた値打ちもない!カスだ!』

シナイを杖のようにして、霧隠が前を行き来する。

『貴様は厳しい俺を憎むだろう!しかし、憎しみは糧となり、学ぶ

ため養分となる。俺は厳しいが男女の差別はしない主義だ。男も、女も、オカマも、弱者である限りは、皆平等に価値がない！俺の使命は、イ・ウーの害虫を駆除することだ！貴様が益虫にならないければ遠慮なく叩き潰す！分かったか《ピー》ラ豚！』

『サー、イエス、サー！』

バシーン！！

『ふざけるな！大声を出せ！』

『サー、イエス、サー！！』

『貴様の出身地はオルレアンだったか？』

『サー、イエス、サー！！』

『オルレアンにいるのは、野蛮人か娼《ピー》だけだ。さっきからの威勢を見る限り、貴様は野蛮人ではない。さては《ピー》婦か！発情親父の醜い極太マ《ピー》を、そのガバガバマン《ピー》で啜え込むんだらう？』

『サー、ノー、サー！！』

『肉便《ピー》か？』

『サー、ノー、サー！！』

『バカ高い金だけふんだくっておいて、マスか《ピー》の手伝いもしない外交儀礼のない奴が。きっちり見張っておくからな！』

それから先はもつと酷い罵倒の嵐、そして地獄の訓練の幕開けだった……。ああ、もう思い出したくもない……。

震えだした私を、肩を抱いて峰理子が慰めてくれた。人肌が温――

「休憩は終わりだ、お《ピー》エラ豚！次の訓練だ！さっさとこのギプスを着けろ！それと二人、いつまでもいるとお前たちも巻き込むぞ」

「失礼しましたー（ネ）！！」

タタター、バタン――！

ツレなさが冷たい……。

そしてこのようなノリで、たまにやってくる『研鑽派』のメンバーと交流したりしながら訓練を続け、気付けば半年が経過したのだった。

S i d e パトラ

おお、ようやく妾の出番が来たのか。まったく、絶世の美女たる妾を蔑ろにするとは、その豪胆さは認めてやろうかの。許しはしないがな。

妾はパトラ。偉大な美貌の女王、クレオパトラ七世の末裔にして、生まれ変わりぢや。

今は、あの忌まわしき極東の猿の台頭によって、ナンバースリーなどという屈辱的序列に甘んじてはいるが、いずれは奴も、『教授』候補の子孫とやらも滅ぼし、ゆくゆくは『教授』となってエジプトを足がかりに世界に覇を唱える存在ぢや。

その妾に生意気にも刃向かう、身の程知らずの下等な黄色い猿、キリガクレサイゾウ。考えただけでもハラワタが煮えくり返りそうになりおる！

妾は最初、あやつの傘下に不幸にもなってしまった少女たちに、このイ・ウーでのルールを親切に教えてやるつもりだったのぢや。しかし、蠅が鬱陶しく周りを飛んでおるせいで、そして妾も所要でイ・ウーを出ておったせいで、ろくな会話も出来ておらんかったからの。今日がオルレアン魔女の末裔とは最初の会話なのぢや。

妾は男はキライぢやが、美しい女子おなじは好きぢや。妾に劣るとはいえ中々の見た目ぢやった、リュパンの曾孫や聖処女の末裔を、妾に仕える戦士メジャイに取り立ててやるという身に余る栄誉を与えてやろうと探しておるのぢやが……。

おお、いたいた。この妾にかような手間を取らせるとはの。ぢやが新たな側近になることぢやし、特別に許してやるとするか。優しきことよのう。

「そのの。そのそなた」

「む」

こちらを向いた銀髪の少女は……む？妾を睨んだちゃと？
小生意気な……。

「失礼な奴ぢや。霸王ファラオが直々に話しかけてやっておるというのに・
……さてはあの無礼な猿、キリガクレサイゾウに何やら吹き込
まれ——」

一瞬ぢやった。目にも留まらぬ速さで現れた薄氷の剣が、妾の喉元
に突きつけられた。

「な！」

「貴様がパトラか。ふん。妄想するしか脳がない万年お気楽お花畑
なファ《ピー》キン脳ミソというのは、軍曹殿に聞き及んでいた通
り本当のようだな」

「ぶ、無礼であろう！」

黄金こがねに輝く砂金で刃を形成して放とうとするも、それはすぐさま凍
りつかされてしまった。何度、何度やっても同じ。なぜ、なぜぢや
！なぜかような小娘に妾が！！

「一つだけ言っておこう」

小娘は身の程知らずにもこう言い放ちおった！

「貴様のような醜女しうめの妄言など、聞くだけで耳が腐りそうだ。そのような穢れた、男どもの《ピー》ンポを馬鹿みたいにしやぶるしか使い道のない、フェ《ピー》専用オナホ《ピー》ルでこれ以上私が敬愛する軍曹殿の名をクソと同じ要領で垂れるな。次に言ってみろ。男の熱い《ピー》棒ばかり突っ込んでる下の口に、私が作った氷の塊をブチ込んで二度と使い物にならないようにしてやる」

目の前の女は、まるで、もう妾には興味すらないといった目をして
おった。

な、何と……何と下品極まりない女ぢゃ！こんな輩、妾の側近にはいらん！そのような奴が妾を徹底的に辱めおったぢゃと！

「下郎がっ！無様に死ねえっ！」

さきほどの比でない大きさの黄金の刃。これなら造作なく葬れるであろう。小娘も汗を流しておるのが分かる。力量さも分からずに、妾を侮辱した己を恨むのぢゃな。

次の瞬間には、血の花を以って妾の目を少しは楽しませる余興となる。そのはずぢゃった。しかし、そうはならんかったのぢゃ。来おった……憎き憎き、小賢しき愚民が！！

「貴様、キリガクレ！なぜ……なぜそなたが、猿如フアラオきが妾の術を扱っておるのぢゃあ！！」

そう、奴は妾と同じ、いや、それ以上の黄金の刃を以って、妾の刃を粉碎したのぢゃった……！！

S i d e ヒルダ

「軍曹殿！それにヒルダ殿！」

私の隣の兄様に駆け寄って敬礼をする新入り、ジャンヌ・ダルク3
0世。

私のお父様とは先祖からの因縁があるはずだが、今ではそんなことは関係ないらしい。最初会ったときは驚愕だったのに、次に会ったときは「ヒルダ殿！」と敬礼された……何で？

それにしても、さすがは齡十で第三態テルツァのお父様を打ち破った規格外にぎさま。最初はおそらくイ・ウー最弱だったであろうこの子をたったの半年で、少しの間とはいえイ・ウーのナンバースリーとやり合えるほどまでに成長させたのだもの。

パトラパカが声をかけたときから、兄様は影で様子を見ていた。パトラには私たちをイ・ウーに紹介したという恩義はあるものの、それを返す義理はないしそのつもりもない。

兄様と対立しているのだから、そんな奴に協力なんてしたら滅びしかない。今は兄様が見逃ユコしているが、イ・ウーが仮に崩壊でもしたら、どうなることかわかるでしょう？

「俺の一番弟子にちよつかいかけるのは控えろよ。盗人ブトレマイオスいぶつの一族」

「妾の質問に………答えんかあ！！」

再び放たれる刃。それも連撃。さすがはG25の魔女^{マツギ}。魔力だけは馬鹿みたいにある。人間にしては最強の一人といってもいいでしょう。

でも、それだけ。

人間なんてゴミの粹に囚われている女ですもの。人間を遥かに超越した存在であるお父様や私の第二態^{セコンディ}、もしかしたら第一態^{プリモ}にすら敵うことはないでしょうね。

そして、そんな私たちが第三態^{テルツァ}になっても敵わない、人の皮を被った明らかな人外である二人のうちの一人、兄様が相手なのだもの。ああ、もう一人は『教授』よ。

結果は言わずもがな。煙が晴れたときには既に気絶していたパトラは、惨めに『主戦派』の連中に担がれていったわ。

フフフ。いい気味。あの醜態を肴に、今夜は兄様たちと美味しいワインが飲めそうだわ。

そして、それからさらに三年が過ぎたの

Side才蔵

……三年半に及ぶ修行の結果は凄まじかった。元から才能

はあったんだろうな。俺が教えることは片っ端から吸収していき、新しい技術も何度も取り組むことで会得していった。

三年前の状態でも、タイムラグなしの氷刃ひょうじんの形成や、多数の物体に触れないで連続凍結など、元からは見違えるような戦果を、あのパトラ相手に叩き出したんだ。

俺はパトラの人格は全否定してるが、能力を評価してないわけじゃないからな。その上で奴は修行の腕試しには都合のいい存在だった。ククク、いい肴になったぜ。おかげで、ヒルダや小夜鳴と美味しいワインが楽しめた。

そしてそれから三年経った今のジャンヌは、違う方法で中々力をつけている理子よりもかなり上の実力を誇るだろう。

しかもジャンヌには、今ではほとんどと言っていいほど魔力の制限がない。

星から魔力を得るというおどれはこの真祖だと突っ込みたくなるパトラや、電力を魔力に変換するヒルダ。ではジャンヌはどこから膨大な魔力を得るのか。

それは、彼女が肌身離さず持っていたアレ。そう、聖剣デュランダルだ。

聞いたことはないか？デュランダルの柄つかには、一体何が納められているのか。

それは、教会辺りにしたら喉から手が出るほど欲しいだろうモノ。カトリック教会で列聖される聖人たち縁の品、俗に言う聖遺物だ。

それも一つではない。聖バジルと聖女ジャンヌの血液、聖ピエールの齒、聖デュニの髪の毛、聖母マリアが着ていた服の端、そんなブツが山ほど詰まった宝の山がすぐ手元にあるんだ。使わない道理なんてあるか？ いやない。

結果は予想通り、いや予想以上だった。修行の成果と合いまって、三秒程度で巨大な氷塊すら作れるようになったのだ。あれは怖かった。ツアオ・ツアオと再戦を希望したからさせたら、開始数秒で上から次々と隕石の如く氷が降り注ぐんだからな。あのときのツアオ・ツアオは涙目だったし、見てた理子は引き攣ってた。

そして今まで宝の持ち腐れだった剣は、『教授』の手を借りつつ進めていき、かなりの腕前になった。

俺としては、アサシンの燕返し。あれを会得させたかったんだが、さすがにこんな短期間で出来たらアサシン涙目だ。それは無理だった。

だが、超能力と組み合わせた『不可視の剣撃』インヴィジブラ（俺命名。直後あまりの中二臭さに悶えたのは秘密）という技を開発できたのは良かった。これは、視認が出来ないほどに薄い氷の刃を剣先から数メートル伸ばし、剣の間合いから避けたと思わせて斬ることが出来る便利な技だ。

これの何が大変だったって、この見えない氷を作るのに数ヶ月を要した。薄いだけじゃなく光の屈折も考えて、その上で数秒で形成するんだからな。これが出来るようになったジャンヌは、今では超能力の精密な扱いについては俺すら凌駕している。

最後に、彼女が拘っていた「策の一族」という名に恥じない罍の腕前。この前、理子がジャンヌの部屋を訪ねて勝手に入ろうとしたら、常軌を逸した数のトラップ地獄に襲われたそうだ。素晴らしい！

・・・ああ、言うな。分かってる。

俺、調子に乗りすぎました。

だから、な。理子。そのナイフを下ろしなさい。ツアオ・ツアオは構えを解け。ヒルダは浮かしてる電気珠を消しな。そしてゆっくり話し合おう。

俺だってなあ！やりすぎたとは思ってるんだよおおおおおおお！！！！

『霧隠幻想録』

(魔) 改造でござる (後書き)

あれはハートマン軍曹ですか？はい。それとマオお姐さんです。ちなみに個人的にはテッサが一番好きだったりします。

言っときますが、ジャンヌは別に才蔵に洗脳とかはされてません。

才蔵は、厳しい中でも褒めるときは褒めますし、達成したときは意図せずして女心をくすぐることばかり言っただけです。それに自由な時間も途中からは普通にありましたし。言わば飴と鞭。今は恋愛感情と言うよりは敬意が強いです、キツカケさえあればすぐ陥落するレベルまで持っていています。それも意図せずして。……も・げ・ろ！

今回は、口が汚いジャンヌも中々いいかも、と自分の中で常々思っていたことを放出しちゃいました。敵には嫌悪を隠さず接し、友人には毅然とした物腰、しかし敬愛する才蔵が相手のときはわんころのようになっちゃうジャンヌ……。意外と良くないですか？あ、よくない？そう思ってるのはお前だけ？でもめげませぬよ！

原作ジャンヌとの絡みを期待してた方ごめんなさい。これからは、天然で乙女趣味な策士ジャンヌ・ダルク改め、ちよっと口が汚いお茶目な叩き上げ軍人ジャンヌ・ダルクの活躍にご期待下さい。

短期間で強くなりすぎと思ってるかもしれませんが、死ぬ気を通り越せばリミッターははずれると思います。今は直ってますが、修行中は色々外れたんです。……ご都合主義ですねハイ。

同時に、こんなジャンヌには原作メンバーも勝てないなー、と思い、

人攫いじゃなくて怪盗才蔵の相棒的立ち位置、ホームズのワトソン、ルパン三世の次元、才蔵にはジャンヌです。だからちよつとこのあたりでも原作と外れるでしょうね。作者の草が生えちゃう位の技量でうまく纏めれるかは微妙も良いところですが。

あと、読んでて感じた方もいると思いますが、こっちの才蔵は普通に性格が悪いです。超がつくド級のSです。やっぱ育つ環境が性格を決めるんだと思いますので。それと鈍感も入ってます。本編では皆無な主人公補正がこちらでは何でかはたらいっているんです。原作主人公が近くにいないからですな。

いやー、今回は書いてて楽しかったです。とくに才蔵やジャンヌの罵倒が。気付けば一万文字超えてましたよ、ハハハ。

では次は本編で！

容姿設定でござる 其の弐(前書き)

本編じゃなくてすいません。今回は容姿設定其の弐でござる。

生まれて初めて作ったCGゆえ影などが微妙ござるが、それでも構わない、という方は本文にお進みくださいでござる。

容姿設定でござる 其の弐（後書き）

本編はできたら今月中にあと二話は更新したいと所望。しかし今月中に夏休みの宿題の八割を片付けるという目標もあるため、もしかしたら今月中はもう無理かもでござる。

なので待っててくださる方々は、気長にお待ち下さいでござる。

『霧隠幻想録』 密談でござる（前書き）

遅れてすいませんでした。とりあえず、ユニーク10万記念の番外編です。

本編はもう少しあとになっちゃうかな？

あ、あと新しい小説始めました。「めだかボックス」の二次です。暇な人は暇つぶしにどうぞ。暇じゃない人も流し読みで結構ですの
でどうぞ。

『霧隠幻想録』 密談でいざる

ジャンヌの加入から約四年。研鑽派の長になし崩^{ダイオ}し的になってしま
ってからは、大体五年くらいたつ。

俺の直接の部下としてはジャンヌだけだが、決まった担当がい
ない理子やツアオ・ツアオ、それに保護者が眠^{ネム}ってる(?) ヒルダを含
めた四人纏めて面倒見ないといけない。

自分の傘下に見目麗しい美姫四人。

これだけだったら俺だってハーレムみたいで喜ばしいが、しかしこ
こは天下のイ・ウー。そんな甘い輩はどこにもいやしない。似非軍
人にオタクコソ泥、チャイナ痴女にDS吸血鬼。どいつもこいつも
一癖二癖ある連中ばかりだ。

まあそんな面倒くさい連中だが、一目置いているのかどうかはさて
おき、一応俺の言うことには割と素直に従ってくれている。

そう。割と、だ。

ジャンヌはいらないと言っても護衛とか言って風呂にまで引^{ヒキ}付い
てこようとするし、ツアオ・ツアオは止めろと言っても懲^{チゲ}りずにハ
ニートラップを仕掛けてくる。

だが、それ以上に面倒くさいことがあるんだよな……。

「早速にそこを退きなさい下等種。お兄様のお相手はお前のような

卑しい玩具には相応しくないわよ？　いい加減身の程をわきまえなさいな」

「下等種下等種、馬鹿の一つ覚えで低脳ひけらかす陰険女は嫌だねー。故郷にさっさと帰ったら？　きつと皆にちやほやしてもらえよー。なんたって、たあーった二“頭”だけの“絶滅危惧種”、だもんねえ？　あははははー！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「「死にな（さい）！！」」

「どうでもいいが、俺の部屋でやるなっつってんだろが」

それがこれ。理子とヒルダのことだ。

理子にとって、ブラドとヒルダは最も憎みべき仇敵とも言える存在。一方のヒルダにとっても、元々は自分の玩具同然の存在だった理子が、イ・ウーにおいて自身と対等に振舞うのが許せないらしい。

言わば、自身の存在を肯定するために、超えなければならぬ壁と対峙する理子と、プライドゆえに、理子が自分たちに立ち向かうことすらよしもしないという、とんでも我がまま理論全開のヒルダ。

本来なら俺が仲介すべきなのだろうが、こればかりは手を出しがた

同じ人間としての感情論を加味すれば理子に加勢したくもなるが、理論でならヒルダにも一理はあるからだ。

吸血鬼は地球の支配種にはなり得なかった。たしかにそれは純然たる事実。

しかしそれは個体数の差による結果論であり、彼らが人間の上位種であるということも、また揺るがざる事実だと思わないだろうか？

捕食者に対抗するために武器を持ち、闇を恐れるがゆえに光を手に入れ、更なる利便を求めて科学を発達させ続ける霊長類（にんげん）ヒト目ヒト科が、地球上最も優れた生物だということはもはや疑う余地もないし、俺もそこに難癖をつける気はサラサラない。

だが、人間は非力な存在だ。サバンナとかアマゾンとかに放り込めば一日と持たずに死ぬくらいに。

しかし現実、力で勝る生物ならごまんといる中でも俺たちは地球の覇者の座を射止められた。

どうやって？ と道行く人に問えば、十中八九彼らはこう口を揃えるはずだろう。

「人間は他の動物と違って知恵が発達しているから」

それは正しい。事実に則した正答だ。

ならば、「人間を超越した力」を有し、さらには「人間並みに優れた知能」を持つ生物がいるとすれば？

そのうちの一つが吸血鬼。オーガ・バンビエス

数百年の時を経れるほどに長命であり、人類の常識を遥かに上回る臂力を誇るという、まさに人間の上位種と言うに相応しい生物だ。

力を至上とする彼らにとってみれば、弱者をどうこうしようが強者ヒトの勝手。一見すれば暴論に思えるそれも、置き換えてみれば俺たちの家畜に対する認識と何ら変わらない、という理屈になってしまうから性質が悪い。

まあようするに、だ。互いが互いの常識に則って行動した果てのすれ違いほど面倒なものはないってこと。

補足しておく、ヒルダは夜行性なので滅多に理子とはかち合わない。しかし、今日のようにヒルダが気まぐれで早起きしてくると、ほぼ俺といっしょにいる理子とは必ず鉢合わせしてしまう。

ま、そんなことはどうでもいいことだ。

まずは、こいつらを止めるとしよう。これ以上続けられたら俺のコントロールが壊れちまう。

「波動けえええええん！」

「ヨガフレエエエエエイム！」

「出てけ！！」

ガッ、ゴッ、ペキュ

「「きゅううう……」

W・K・O・！！

「つまり、理子君とヒルダ君を、模擬戦以外で戦わせる機会がほしいと？」

その夜、俺はシャーロックのところを訪れていた。理由はシャーロックが言ったとおりだ。今のあいつらはフラストレーションの塊。どこかでガス抜きしないと潰れてしまう。

「まあ、それはおいおい、だね。いずれその機会はあるよ」

「お前の予知は自己完結でこっちにゃわかんねえよ。ま、お前が言うならいいが……って、何してんだ？」

俺の目の前で、何やら手紙のようなものをしたためているシャーロック。

「まあ、遺書みたいなものだよ」

「ああ、死期が近づいてるのか」

「そう。緋弾の継承は近い。だから、君に頼みたいことがあるんだ」

「ああ？」

「僕が死んだ後で勃発する戦役。どうか、それが終わるまでは彼女の緋弾を奪わないで欲しい」

いつになく真面目な顔のシャーロック。その真剣な面持ちに、こちらも居住まいを直す。

「・・・・・・見返りは？」

「僕が死んだ後のイ・ウー・・・・・・で、どうかな？」

たしかに、ここに収められた財宝やボストーク号にはそれだけの価値がある。しかし・・・・・・。

「イロカネを失えば、抑止としてのイ・ウーの権威は失墜する。それくらい分からないお前じゃないだろ？ 俺は面倒は嫌いなんだよ」

「ふむ・・・・・・」

「かと言って、どこからイロカネを奪えばバチカン辺りがうるさい。それもまた、中立な抑止にはなりえない」

そう。問題は、イロカネはその全てがどこにあるのかを把握されている。表が知らなくとも、裏なら確実に。となると、残った選択肢は一つだけ。

「崩壊寸前のボロ船率いて戦争に乗り込め、と言うか。シャーロック」

どうせこの答えさえ予知していたんだろう。ふっ、と笑ったシャーロックはこちらを見た。

「師団と眷属、そのどちらにも参加しない無所属のまま、どちらの勢力も無傷で制圧することで、イ・ウーは滅んでいないということの世界にアピール。そしてそのまま、全ての勢力と中立な関係を築くと宣言。そうすることで、今には劣るが均衡を保つ抑止力のままでいられる。そして、お前と約定を結んだ俺が制圧することで、お前の子孫も無傷で済む……食わせ物だな。シャーロック」

「素晴らしいよ。やはり君は、今までで一番優秀な生徒だ」

安楽椅子から立ち上がり、パイプをふかしながら壁を向くシャーロック。その背中、少しだけ弱々しく見えた。

「僕はこんな立場になっているとはいえ、平和を愛している。自分が死ぬことで、世界中に犯罪がはびこるのは忍びがたいんだよ」

だからね――、と続けるシャーロック。

「やがて始まる、緋弾の少女の序曲。君の協力が必要だ。才蔵君」

差し出されたシャーロックの手。それを、俺は――。

更新報告

九月四日New!
番外編投稿です。

く愚痴的な何か
本編がスランプです。

原作にいくまでの内容は出来てるんです。でもキーボードが叩けない。

ついには他所の娘にまで手、出しちゃいました。

めだかボックスの二次です。こっちとは趣を変えた、ノット最強系な少年が主人公です。

こっちでは出来ないド下ネタもバンバン書く予定なので、興味が出た人がいましたら読んでみてね？

それじゃ、「こかけミックス」、よろしくね！

文字数稼ぎ

.....

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7444s/>

緋弾のアリアー忍ぶ最強－（改訂中）

2011年9月4日13時44分発行